

西本城跡

NISHIMOTO CASTLE

—県道岡本大方線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



1999.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

西 本 城 跡

NISHIMOTO CASTLE

1999.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



西本城跡及び上田ノ口集落航空写真 (S=1:3000)



西本城跡航空写真（西から）



堀切2~4（東から）



西本城跡遺跡オルソコンター図 S=1:300



出土遺物（貿易陶磁）表と裏

序

大方町は、青い海と緑の山々の豊かな自然に囲まれた土地で、長い歴史の中で人々の生活を育んで参りました。人々の生活の歩みは嘗々とその大地に刻まれ、その中で固有の文化を築きあげてきました。文化は一朝にして出来上がったものではなく、幾星霜、長い歴史と風土の中で我々の祖先のたゆまない努力と創意によって培われ生み出されたものであります。私たちは、歴史の中に生きていることを自覚し、過去に学びながら現在に働きかけ、そしてこのすばらしい自然と文化を次代に継承して行かなければなりません。

今回の調査資料は周辺地域はもとより土佐の歴史を明らかにする上で重要な位置を占め、分けても全国的な城郭研究の中で西南四国の城郭の規模・施設・性格などを知るうえで貴重な資料となりました。

報告書を刊行するに当たり、本書が学術的に多くの研究者に活用されることはもちろんのこと、残された城郭範囲と併せて地域学習の一環として学校教育や社会教育、あるいは多くの町民の方々に広く活用されることを願うところであります。また、西本城跡の発掘調査が大方町の歴史を紐解く契機となり、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査・報告書作成にあたって多大なご理解とご協力を頂いた高知県中村土木事務所、並びにご指導頂いた高知県教育委員会はじめ、お世話になった関係者の皆様及び地元の方々に厚くお礼申し上げます。

1999年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 古谷 碩志

例　言

- 1 本書は、平成9年度県道岡本大方線改良工事に伴う「西本城跡」の緊急発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、高知県土木部中村工事事務所の委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 西本城跡は高知県幡多郡大方町上田ノ口字タナダ・テッボウ田他に所在する。
- 4 発掘調査は平成9年10月15日から平成10年3月31日まで実施し、引き続き9月30日まで整理作業、報告書作成を行った。調査面積は4,500m²である。
- 5 発掘調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第5係長松田直則・同主任調査員堅田至が担当した。
- 6 発掘調査にあたり、調査の方法及び縄張り図の作成について中井均氏（米原町教育委員会）の指導・協力を頂いた。記して感謝する次第である。
- 6 本書の執筆は、松田直則と堅田至が分担し、編集は松田直則が行った。文責は、目次及び文末に執筆者を記した。
- 7 城跡の全体測量は公共座標IV系により、航空測量を行った。なお、航空測量は委託により（株）アイシーが実施した。
- 8 検出遺構に関しては、掘立柱建物跡（SB）、土坑（SK）、柵列（SA）で標示している。出土遺物は通し番号とし、遺物の挿図、写真図版は同一番号である。
- 9 調査にあたっては、委託者である高知県中村土木事務所から多大なご援助をいただき、また、地元関係各位にはご協力をいただいた。記して感謝する次第である。
- 10 出土遺物の資料は、高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。また遺物の注記は調査略号97-17ONである。
- 11 本書に掲載したFig.39の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図を80%に複製縮小したものである。（承認番号 平11四複、第23号）

本文目次

第1章	調査に至る契機と経過	
第1節	調査の契機	松田1
第2節	調査組織及び経過	堅田3
第3節	調査日誌抄	堅田4
第2章	地理的・歴史的環境	
第1節	地理的・歴史的環境	堅田7
第2節	大方町の中世城郭	松田13
第3節	西本城跡の概要	松田15
第3章	調査の概要	
第1節	調査の方法	堅田17
第2節	調査の概要	堅田19
第3節	基本層序	堅田20
第4章	調査の成果	
第1節	検出遺構	堅田29
第2節	出土遺物	松田43
第5章	考察	
第1節	四国西南部の中世城郭	松田55
第2節	大方町中世城郭の検討	松田60
第3節	西本城跡出土遺物の検討	松田64
第4節	連続堀切・竪堀群について	松田66

挿 図 目 次

- Fig. 1 大方町の位置図
Fig. 2 西本城跡位置及び周辺の地形図
Fig. 3 西本城跡周辺遺跡分布図
Fig. 4 大方町河川流域別中世城郭分布図
Fig. 5 西本城跡概要図（高知県輔多郡大方町）
Fig. 6 西本城跡測量基準点設定図
Fig. 7 西本城跡調査対象範囲
Fig. 8 調査区グリッド設定図
Fig. 9 A・B・C TR平面図
Fig. 10 西本城跡鳥瞰図
Fig. 11 A・B・C TRセクション図
Fig. 12 曲輪2及び東西斜面セクション図
Fig. 13 曲輪1a・b、曲輪3、切岸セクション図
Fig. 14 西本城跡検出遺構全体図
Fig. 15 切岸平面図及びエレベーション図
Fig. 16 曲輪2遺構全体図
Fig. 17 SB1
Fig. 18 SB2
Fig. 19 SB3
Fig. 20 SB4
Fig. 21 SB5
Fig. 22 SB6
Fig. 23 SA1・2
Fig. 24 SK1・2・3
Fig. 25 集石1平面図
Fig. 26 堀切1平面図及びエレベーション図
Fig. 27 堀切2・3・4平面図
Fig. 28 竪堀1・2・3平面図
Fig. 29 堀切2・3・4セクション図
Fig. 30 竪堀セクション図
Fig. 31 集石2平面図
Fig. 32 遺構内出土遺物
Fig. 33 遺構外出土遺物1
Fig. 34 遺構外出土遺物2
Fig. 35 遺構外出土遺物3
Fig. 36 遺構外出土遺物4
Fig. 37 古銭拓本
Fig. 38 四国西南部の中世城郭地域別分布図
Fig. 39 四国西南部の中世城郭分布図
Fig. 40 大方町河川流域別中世城郭分布図
Fig. 41 大方町中世城郭流域別比高差グラフ
Fig. 42 中世遺物出土量グラフ
Fig. 43 西本城跡遺物出土分布図
Fig. 44 連続堀切・竪堀を多用する城郭縄張り図

表 目 次

- Tab. 1 大方町遺跡一覧表
Tab. 2 出土遺物観察表1
Tab. 3 出土遺物観察表2
Tab. 4 出土遺物観察表3
Tab. 5 出土遺物観察表4
Tab. 6 古銭観察表
Tab. 7 大方町中世城郭観察表
Tab. 8 出土遺物出土地点表

写 真 目 次

卷頭図版 1 西本城跡及び上田ノ口集落航空写真	PL. 17 堪堀 3
卷頭図版 2 西本城跡航空写真	曲輪 2 、SB1・2・3
卷頭図版 3 堀切 2 ~ 4	PL. 18 曲輪 2 、SB4・5・6
卷頭図版 4 西本城跡オルソコンター図	堀切部・曲輪 2
卷頭図版 5 出土遺物（貿易陶磁）	PL. 19 曲輪 2 ・ 3
PL. 1 西本城跡遠景（東より）	曲輪 2 ・ Pit群
曲輪 2 調査前	PL. 20 曲輪 4 集石 1
PL. 2 曲輪 2 ・ 切岸調査前	曲輪 2 ・ 3 東斜面
曲輪 2 伐採風景	PL. 21 曲輪 3 作業風景
PL. 3 斜面部土留め作業風景	堀切・曲輪 3 東斜面
切岸ベルト設定状況	PL. 22 曲輪 2 東斜面
PL. 4 曲輪 2 西斜面調査前	東斜面下集石 2
Cトレーナー設定状況	PL. 23 現地説明会風景
PL. 5 A・B・Cトレーナー完掘	同上
Aトレーナー完掘	PL. 24 曲輪 2 青磁碗出土状況
PL. 6 B・Cトレーナー完掘	曲輪 2 備前擂鉢出土状況
Aトレーナーセクション	PL. 25 遺物出土状況
PL. 7 Aトレーナーセクション	PL. 26 出土遺物 1
曲輪 2 作業風景	PL. 27 出土遺物 2
PL. 8 曲輪 2	PL. 28 出土遺物 3
曲輪 2	PL. 29 出土遺物 4
PL. 9 曲輪 2 作業風景	PL. 30 出土遺物 5
曲輪 2 セクション	PL. 31 出土遺物 6
PL. 10 切岸作業風景	PL. 32 出土遺物 7
堀切（北東から）	PL. 33 出土遺物 8
PL. 11 堀切 4 セクション	PL. 34 出土遺物 9
堀切 3 セクション	PL. 35 出土遺物 10
PL. 12 堀切 2 ・ 3 ・ 4 （東下方から）	PL. 36 出土遺物 11
堀切 2 ・ 3 ・ 4 完掘	PL. 37 出土遺物 12
PL. 13 堀切 1 完掘（東から）	PL. 38 出土遺物 13
堀切 4 完掘（西から）	PL. 39 出土遺物 14
PL. 14 堀切 2 完掘（東から）	PL. 40 出土遺物 15
曲輪 4 作業風景	PL. 41 出土遺物 16
PL. 15 堪堀 1 ・ 2	PL. 42 出土遺物 17
堪堀 3 南北セクション	PL. 43 出土遺物 18
PL. 16 堪堀 3 東西セクション	
堪堀 1 集石	

第1章 調査に至る契機と経過

第1節 調査の契機

大方町は県の西南部、幡多郡の東よりで、海岸沿いの集落と土佐湾に注ぐ6つの小河川の谷間と谷間にある集落によってできた町である。主要産業は農業で、温暖な気候に恵まれ特にキュウリや砂地栽培のラッキョウの产出が多い。これらの主要産物の主な流通手段は陸上運送で、国道56号線が、中村・高知に向かう主要幹線となっている。

大方町南西部の主な岐線として南線と北線がある。南線は中村・下田ノ口線で、北線は岡本・大方線である。南線の中村・下田ノ口線は、中村市下田を起点として平野・双海・出口・田野浦を経て下田ノ口に至る南部海岸線の主要県道となっている。さらにお出から中村市古津賀で国道56線と取り合う一般県道出口・古津賀線もある。北線では、今回調査の原因となった岡本・大方線がある。岡本・大方線は、大方町上田ノ口から中村市蘇岡の岡本を結ぶ線である。この北線は、上田ノ口から御坊塙、下馬荷を経て蘇岡に通する道である。

明治の頃から馬荷村や橋川村の経済圏は旧中村町で、両村に於ける生活道としては下馬荷から蘇岡に出る線が多かった。古老の話によると、生活物資はもちろん肥料をはじめとする生産資材なども、中村町からの購入が主であったとされている。その後地域の利便性は変わらず、地域住民からは下馬荷から蘇岡に通ずる道の整備が望まれていた。昭和34年一般県道岡本・大方線として、蘇岡を起点として長坂峠を越えて、下馬荷を経由し上田ノ口に至る間8371mが認定された。しかし地域住民の一部は、馬荷から上田ノ口に至る間よりも、馬荷・蘇岡間の整備を優先して欲しいと根強い要望があった。昭和48年に下馬荷と蘇岡の大河町区間は、工事が着工され昭和55年度までに長坂峠まで350mを残し工事が進んでいる。さらに優先して整備を進めていた馬荷・上田ノ口間の局部改良工事も現在進捗している。

県道岡本・大方線が国道56号線と取り合う地点は、現在姫瀬川の流路と同じ方向で上田ノ口集落



Fig. 1 大方町の位置図

を迂回する経路を取っている。集落を迂回し中心を通らなければならぬことや、交通量も多くなっていることから、集落背後の丘陵を切り取り直線的に国道に結びつけ、さらにそれに伴い国道沿いの圃場整備も同時に実行計画が上がった。高知県土木部から、この計画路線に埋蔵文化財の有無について、大方町教育委員会を通じて県教育委員会に紹介がもたらされ



Fig. 2 西本城跡位置及び周辺の地形図

た。これを受けた大方町教育委員会及び県教育委員会は、集落背後の丘陵上に中世城郭の西本城跡が所在していることを示し、現状保存の為の協議を行った。現状保存のためトンネルによる工事工法も協議したが、予算及び期間的なことなど計画変更による保存は不可能である結論に達し、止むを得ず記録保存を行うこととなった。このため平成9年10月15日付けで発掘届けが提出された。これを受け、工事計画範囲を確認するため踏査、立会を行ったが計画範囲内に西本城跡の曲輪及び堀切等が含まれており、工事計画範囲全てを調査対象範囲とした。

以上の結果、県教育委員会・大方町教育委員会が協議し、発掘調査は財團法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり工事主体の高知県土木部から委託を受けて平成9年10月15日から調査を実施することになった。(松田)

第2節 調査組織及び経過

発掘調査は、平成9年10月15日から平成10年3月31日までの間約5ヶ月半の現地調査で4500m²の範囲を実施した。引き続き平成10年4月1日から3月まで、整理作業及び報告書刊行の工程で開始された。発掘調査は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施し、調査体制は以下のとおりである。

総括…埋蔵文化財センター所長 古谷頑志

調査事務総括…同次長 津野洲夫 調査総括…同調査課長 西川 裕

調査担当…同調査第5係長 松田直則 同主任調査員 堅田至

事務担当…同主幹 吉岡利一、同主幹 大原裕幸

発掘作業員…浜田昌一、野並 康、岡本寅美、地引博司、秋森広松、藤本福包、布 陽子、松本菊美、中山昭子、畔元順子、岡本芳子、高橋太郎、松井澄子、北川久子、武政松子、川村 勉、岡本覚、出島正勝、深木繁実、深木繁春、田辺勝茂、成子喜代子、松本安雄、深木正寛、矢野茂世、安田篤助、宮川清子、平地 武、深木 繁、水瀬好幸、植田稔弘、松本辰美、田辺貞雄、武政輝忠、沖和子、沢田建男、伊芸愛子、森 繁子、大原豊実、前田耕作、岩本 正、東 真枝、竹田信男、長崎竹美、平地五月、岡崎真紀、岡崎桂子、岡本里以、松本光代、松田五六、野安勝利、松本昇、宮崎貞義、伊与木春茂

整理作業員…橋田美紀、黒岩佳子

発掘調査期間中の平成10年3月には、埋蔵文化財センター主任調査員小島博満の協力を得た。

調査前に、西本城跡全体の縄張り図を滋賀県米原町教育委員会の中井均氏と作成し、発掘調査は平成9年10月15日から器材の搬入設営を行い、伐採作業を実施した。伐採作業の後調査区内の測量にはいりグリッドの杭打ち作業を開始した。さらに排土処理のため斜面部にトタンを使用したシャーテー設置作業を行った。排土置場の空間が東側斜面下の谷部にしかなく、調査はこの谷地形部分にトレントA～Cを設定し掘削作業にはいった。曲輪部分の調査は、伐採作業と排土処理に必要なシャーテー設置が完了した曲輪2からトレントを設定し順次掘削にはいった。城跡という遺跡の性格から斜面部も含め遺構が検出され、西側斜面下には県道岡本・大方線が通っており排土がながれ落ちな

いよう土留め処理に時間を要した。遺構を含む全体測量及び空中写真は、㈱アイシーに委託して行った。現地調査後、整理作業及び報告書作成は、高知県立埋蔵文化財センターの施設において実施し平成11年3月31日をもって全ての作業を終了した。

第3節 調査日誌抄

10月15日(水) 調査区域の調査前写真撮影及び伐採準備。現場事務所設置。技術公社との打ち合わせ。

10月16日・17日(木・金) 調査区域の伐採始める。平場に測量用の杭打ちを始める。現場事務所完成。発掘機材整理。現場事務所内清掃。

10月21日(火) 調査区平坦部掘削範囲のグリッド設定。北側斜面を残し伐採はほぼ終了。

10月22日(水) 水田部分にトレーナーを設定する。

曲輪2の2×4mのトレーナーを設定し掘削を開始する。

10月23日・24日(水・木) 曲輪2の掘削。水田部掘削。

10月27日(月) 曲輪2にベルトを設定し、表土掘削。

10月28日(火) 調査区西側斜面伐採。水田部分掘削を続ける。曲輪2M-9, L-9, K-9, J-9遺物取り上げ。

10月29日・30日(水・木) 西側斜面伐採、帶曲輪有り。曲輪2各グリッド掘削。

10月31日(金) 西側斜面伐採。水田部分掘削、



曲輪2掘削。

11月4日・5日・6日(火・水・木) 調査区西側斜面伐採。曲輪2掘削。

11月10日(月) 西側斜面伐採終了、東斜面の伐採した雑木を下におろす。曲輪2掘削。

11月11日(火) 西側帶曲輪平板地形測量。東斜面シューーター増設と伐採した木の整理。曲輪2掘削。

11月12日(水) 東側斜面雑木整理終了。北側斜面掘削開始。D-12杭打ち。

11月13日(木) 前日に続き曲輪2掘削。北斜面掘削。A-17, D-14, E-14杭打ち。

11月14日(金) 西側斜面に土留め用フェンスを張り掘削開始。

11月17日(月) 東斜面下場平板地形測量。北斜面掘削。西斜面掘削。

11月18日・19日(火・水) 西側斜面、北斜面掘削。

11月20日(木) 西側斜面、北斜面掘削続ける。9ラインセクション図。中村土木と打ち合わせ(4:30~5:00)





11月21日(金) 西側斜面掘削。掘削した土を下の県道に落とさないようにするため道板を仮設する。D-14付近の平板測量。北斜面掘削。

11月25日(火) 西側斜面、北斜面掘削続ける。掘削した土を安全な場所に移動する。

11月26日(水) 雨で現場作業なし。調査区内松の伐採について大方町森林組合と打ち合わせ。

11月27日・28日(木・金) 西側帶曲輪掘削。土留め用フェンスを西側斜面に増設する。北斜面掘削。

12月1日・2日(月・火) 西側斜面Hライン掘削開始。西側帶曲輪掘削

12月3日(水) 西側斜面、西側帶曲輪掘削及び北斜面掘削。遺物写真撮影後、取り上げ。

12月4日・5日(木・金) 西側斜面、西側帶曲輪掘削及び北斜面掘削。

12月8日(月) 曲輪2掘削。西斜面土留め用ネット補強。東斜面シーダー修理。

12月9日・10日(火・水) 北斜面、西斜面、掘削。

12月11日～15日(木～月) 北斜面、西斜面掘削。西斜面帶曲輪集石実測。西斜面昇降用に階段を設置。松伐採作業本日より開始。

12月16日(火) 西斜面掘削。松伐採作業終了。西斜面下集石及び遺物写真撮影。

12月17日(水) 雨で現場作業中止。

12月18日(木) 西斜面掘削、遺物取り上げ曲輪2掘削。

12月19日・22日(金・月) 曲輪1掘削。西斜面掘削。

12月23日(火) 西斜面掘削。西斜面土留め用ネット増設。西斜面集石実測。

12月24日(水) 曲輪1、北斜面掘削。西斜面堀切部掘削。

12月25日(木) 西斜面、北斜面掘削。現場事務所清掃、整理。

1月5日(月) 西側斜面集石実測。北斜面掘削。東斜面シーダー修理。

1月6日(火) 西斜面土留め用ネット増設。西側斜面掘削。

1月7日(水) 西側斜面掘削、遺物取り上げ。松伐採跡地杭打ち。

1月8日(木) 東側境界線にネットを張る。現場事務所駐車場入り整備。

1月9日(金) 西側斜面掘削。遺物取り上げ東斜面シーダー設置準備。

1月12日(月) 西斜面土留め用ネット修理。南西堀切部ベルト設定。東斜面シーダー設置。

1月13日(火) 西斜面堀切付近掘削開始。東斜面掘削。

1月14日(水) 雨のため現場作業中止。

1月16日～21日(金～水) 堀切部掘削。東斜面掘削。

1月22日～30日(木～金) 東斜面土砂移動。松伐採跡地シーダー設置。曲輪3掘削。

2月2日～4日(月～水) A-トレンド周辺土砂移動。松伐採跡地掘削開始。曲輪3掘削。

2月5日(木) A-トレンドの北側掘削。松植林部掘削。堀切1、2、3東斜面掘削。





2月6日(金) A-トレンチ北側集石の写真撮影と実測準備。東斜面掘削。堀切部東斜面掘削。桧植林部掘削。

2月9日～11日(月～水) A-トレンチ北側集石実測。桧植林部掘削。堀切部東斜面掘削。東斜面掘削。

2月12日(木) 桧植林部掘削。堀切部東斜面掘削。東斜面掘削。A-トレンチ北側土器取り上げ。

2月13日～19日(金～木) 桧植林部掘削。堀切部東斜面掘削。曲輪2東斜面掘削。

2月20日～23日(金～月) 雨のため現場作業中止。

2月26日・27日(木・金) 曲輪2の全体写真、造構検出。

3月2日(月) 曲輪2の造構検出。桧部分掘削。東斜面掘削。

3月3日・4日(火・水) 曲輪2のバンクを外し、造構検出。桧部分掘削。東斜面掘削。

3月5日(木) 雨のため現場作業中止。

3月6日(金) 曲輪2造構探し、杭の打ち直し、堀切部全体写真撮影。桧部分掘削。東斜面掘削。

3月9日(月) 曲輪2杭打ち直し。東斜面掘削。桧部分に梯子設置準備。

3月10日・11日(火・水) 雨のため現場作業中止。記者発表準備。

3月12日(木) 午前中東斜面に階段を設置し、記者発表準備。午後記者発表。

3月13日(金) 曲輪2柱穴探し及び半截。堀切西斜面ベルトを外す。東斜面掘削。

3月14日(土) 曲輪2ピット精査。桧部分東斜面掘り下げ。現地説明会準備。

3月15日(日) 現地説明会を行う。参加人数約80人。

3月16日(月) 曲輪2柱穴及び土坑全掘。堀切部ベルトを外す。東斜面掘削。

3月17日・18日(火・水) 桧部分に設置した階段を撤去する。堀切部のベルトを外す。東斜面集石上部を掘削し残土運搬。曲輪2柱穴完掘。

3月19日(木) 航空測量に備えて調査区清掃と鋼

管、ステップ付属品を現場事務所前まで運ぶ。午後㈱アイサー測量と撮影計画の打ち合わせ。

3月20日(金) 午前中雨。午後ピットの水抜き。

3月21日(土) 航空測量。

3月23日(月) 西斜面埋め戻す。

3月24日・25日(火・水) 貸借機材を返却する。東斜面残り部分の土層断面図作成。

3月26日(木) 西斜面豎堀断面図作成。現場事務所整理清掃。

3月27日(金) 現地機材を一部撤収する。

3月30日(月) 機材等の撤収を終え、現地調査終了する。

3月31日(火) 貸借車両を返却。午後、中村土木事務所検査。(堅田)



第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的・歴史的環境

大方町は、高知県の西南部幡多郡の東寄りの海岸に位置し、東は佐賀町、北は大正町、北から西は中村市に接し、南は土佐湾に面する。町の中央部に湊川、東に雫川・有井川、西に鯛瀬川が南流し、これらの川の流域に集落が形成され、河口の海浜に大きな集落が位置し、中でも湊川と鯛瀬川に挟まれた入野は町の中心をなす。総面積の75パーセントは山林原野、町の主要産業は農業で温暖な気候に恵まれ、米のほかキウ

ウリ、イチゴ、ショウガ、ニラなどの施設園芸が盛んである。また近年、花卉栽培が町南部で急成長、入野ノ浜の砂地を利用したラッキョウも特産として知られている。漁業は沿岸漁業を中心であるが、チリメンジャコの生産が多い。美しい海岸線は4kmにも及び海水浴場やキャンプ場などがあり観光客の人気を呼んでいる。

北部と南部は山地で、高岡郡中土佐町から南方に伸びる火打山脈は、御在所山・仏が森、さらに当町と中村市境の石見寺山に達して土佐湾沿岸と四万十川流域の間に分水嶺を作り、その東側が当町に当たる。面積は112.87km²である。

1 原始・古代

町内の最古の考古遺跡は縄文時代の遺跡である。この時期の遺跡としては小坂口遺跡（出口）・長門駄馬遺跡（出口）・入野遺跡（大方商業高校校庭北側）・オクダバ遺跡（浮鞭）・東ダバ遺跡（浮鞭）・伊の岬遺跡（伊田）がある。以上の諸遺跡はすべて海岸段丘上に立地する。また遺跡が小規模であることも共通し、チャート製打製石器に混在して大分県姫島産黒曜石製打製石器がみられるのも大きな特色である。小坂口遺跡ではサヌカイト製打製石器も一部に見られ、長門駄馬遺跡は海岸に接近する遺跡であり、入野遺跡からは縄文後期と推定される石器が出土している。オクダバ遺跡では時期不明の縄文土器と石斧が発見され、石器のなかには縄文早期とみられるものがある。東ダバ・伊の岬両遺跡は、ともに海岸に近く、サヌカイト製石器も稀ながら存在する。なお、やや内陸部には茶畠遺跡（平野）と森近口遺跡（浮鞭）があり、ともに石器を多く出土する縄文遺跡である。森近口遺跡からは尖頭器・石錐も出土している。各遺跡とも本格的な発掘調査はなされていない。



大方町入野松原

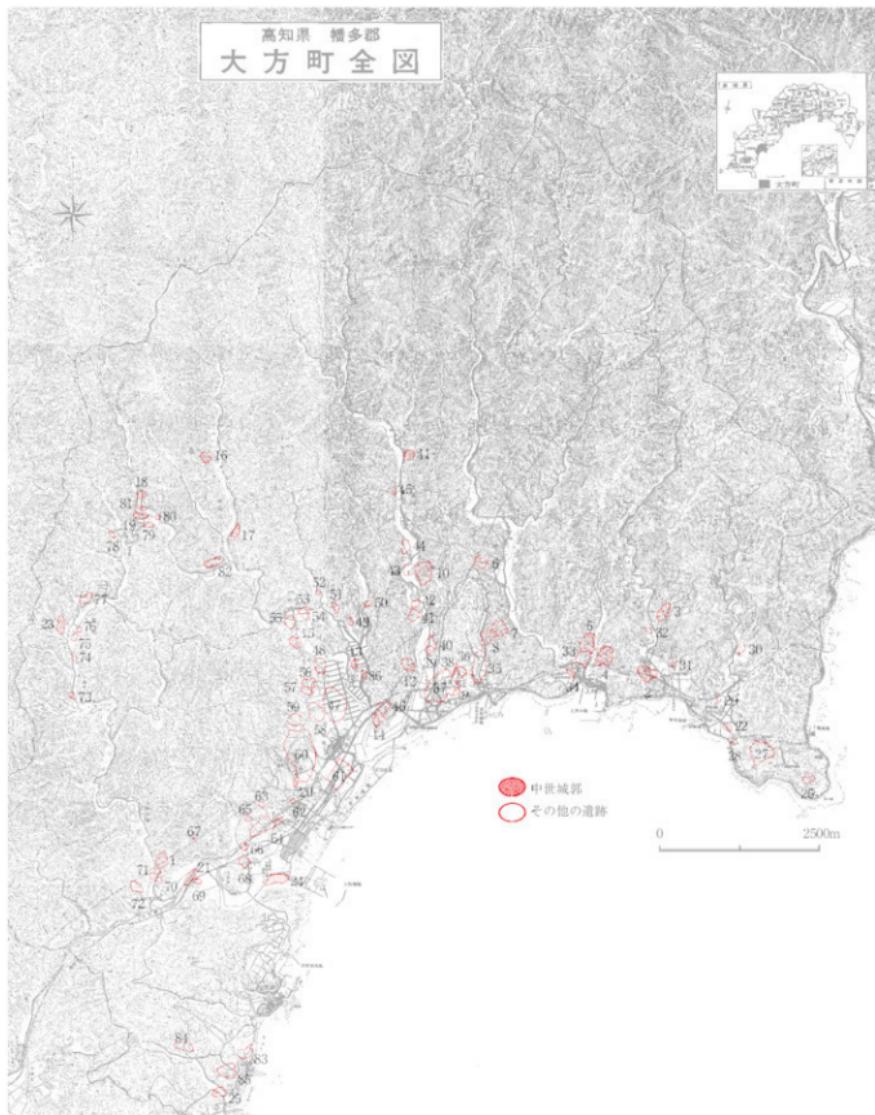


Fig. 3 西本城跡周辺遺跡分布図

Tab.1 大方町遺跡一覧表

施 名 称	所 在 地	種 別	現 況	時 代	備 考
1 西本城跡	大方町西本ノハタクアダ・チホワ田	城跡	山林	中世	
2 上井城跡	木曾川字下ノノヒ	*	*	*	
3 北有井川(有井川奥之古)城跡	木曾川字シロクビ・ヌタノダバ	*	*	*	
4 上田ノ上城跡	木曾川字園野地山	*	*	*	
5 高山城跡	宇高山	*	*	*	
6 鶴川城跡	鶴川3599-1・5・11-13	*	*	*	
7 浮津城跡	浮津字城山・上城山	*	*	*	
8 南浮津城跡	宇小城山	*	*	*	
9 浮津城跡	宇田城	*	頃、荒廃地	*	
10 美津(山添川)城跡	口添川字城山	*	山林	*	
11 大平(添川)城跡	黒添川字施原ノ上	*	*	*	
12 備後城跡	浮津字城ノ原	*	*	*	
13 佐野城跡	浮津字城ノ原	*	*	*	
14 吹上城跡	浮津字吹上城	*	山林・荒廃地	*	
15 前持城跡	加持字古城	*	山林	*	
16 本行城跡	加持川字ドシギュ・ケンキウロ	*	*	*	
17 加持川城跡	宇城山・茨木水・東木水	*	*	*	
18 宮ノ川城跡	大井川字クザイガ崎山	*	*	*	
19 大井川(二重)城跡	宇城ノ谷	*	畠・道路	*	一部消滅
20 人野城跡	人野字城山	*	山林・畠	*	
21 石合城跡	下田ノ口字ラボノソト	*	山林	*	
22 伊丹(井田)城跡	伊丹字古城	*	山林・墓地	*	
23 馬荷城跡	馬荷字城山	*	*	*	
24 朝日(山内)浦(城跡)	朝日字古城・吉城東平・吉城西平	*	*	*	
25 田ノ上城跡	田ノ上字古城・寺田谷	*	*	*	
26 伊の郷遺跡	遷子中平	散布地	畠、荒廃地	柵文	
27 伊の木(大)城跡	宇木太納	散埋地	山林	从世	
28 松山寺跡	伊丹字寺山	*	社寺跡	畠、墓地	中世～古墳
29 伊川瀬跡	宇木コデノ	散布地	木田・畠	平安・中世	
30 清水出遺跡	宇清木出	散布地	木田	中世	
31 有井川(寺)墓	有井川字八幡神社	墓	墓地	*	県史跡
32 清瀬寺跡	宇植木	社寺跡	荒廃地	中世、近世	
33 上田ノ上城跡	上田ノ字西高山・中尾戻	散布地	畠・宅地	令良～中世	
34 小柳山遺跡	宇鳥ノ谷ノ下・板屋カガハ下毛	*	畠、荒廃地	柵文	
35 浮津遺跡	浮津字南ノヤシキ・代賀・林場地	散布地	木田・畠	柵文～中世	
36 桐原遺跡	宇高原ノ西・四男地・山中谷地	*	畠、宅地	令良～中世	
37 棚遺跡	宇高棚ノ棚・棚ノマハ・佐見ダバ地	*	畠、宅地	令良～中世	
38 遠々塚(空塚)	宇施塚	空塚	木田・畠	令良・平安	
39 空塚跡	宇施塚ノ空塚	*	畠、山林	*	
40 防ノ私(内)城跡	宇防ノ私塚・防ノ谷	散布地	畠	柵文～中世	
41 尾守遺跡	口添川字陶屋・尾守	*	*	令良～中世	
42 コウカ遺跡	宇コウカラ	*	畠、荒廃地	中世	
43 高知神(新田)遺跡	宇高知神・新田	*	木田・畠	柵文～中世	
44 日原遺跡	宇ヒビ原	*	畠、宅地	令良・平安	
45 奥添川(山)城跡	奥添川字中星地敷	*	木田・畠	令良・中世	
46 忽野遺跡	浮津字忽野	*	畠、荒廃地	柵文～平安	
47 久保遺跡	宇野字久保	*	木田・畠	令良・中世	県記述跡
48 佐野城跡	加持川字佐野・千葉	*	畠、宅地	令良・中世	
49 前田城跡	宇前田城	*	畠、山林	令良・中世	
50 施利(舟)城跡	宇サ子舟トクシ	*	畠、茅樹閣	柵文	
51 井川遺跡	宇井川	*	畠		
52 花井川(舟)城跡	宇上屋武	*	*	生古・古墳	
53 加持本村遺跡	宇イセキ	*	木田・畠	令良～中世	
54 京福寺跡	宇寺中	社寺跡	畠	*	
55 竹シマノ遺跡	宇竹シマツ	散布地	畠、荒廃地	*	
56 宇町ノ前遺跡	宇ウマチャニ	*	山林・畠	古墳・中世	
57 同助遺跡	人野字同助	*	*	*	
58 猪ノ中遺跡	宇猪ノ中	*	畠	古墳～中世	
59 高須(高須)遺跡	宇高須・高須	*	*	古墳	
60 人野遺跡	宇人野	*	学校・畠	古墳	
61 佐野(舟)城跡	宇佐野の宮・上方行・神上	*	篠・宅地	中世	
62 人野本村遺跡	宇人野	*	*	令良～中世	
63 袖取行遺跡	宇袖取	*	畠、墓地	*	
64 足進遺跡	宇サッハヘイ・弓場、木原	*	木田・畠	古墳・中世	
65 東ワゴウ遺跡	下田ノ口東ワゴウ・地ワゴウ	*	畠	古墳・中世	
66 カシワノ遺跡	宇カシワ	*	*	古墳・中世	
67 田ノ口内塙	宇石ガミ	古墳	山林	古墳	県史跡
68 下田ノ口(源)遺跡	宇地ノイタ谷	散布地	畠	令良～中世	
69 横舟寺跡	宇田ノ口イワカミ	社寺跡	山林	中世、近世	
70 上田ノ口遺跡	宇田ノ口五郎神下・前代	散布地	畠・宅地	中世	
71 ニシノ(舟)城跡	宇ヤシノ	*	*	令良・中世	
72 キモノノダ(舟)城跡	宇ヤマリモ船	*	畠	*	
73 下野舟遺跡	野舟字コヤダバ	*	*	柵文	
74 野舟遺跡	宇野舟・山	*	木田・畠	中世	
75 宝正寺舟遺跡	宇寺舟山・ヨリマセ	*	*	柵文・中世	
76 天神私場遺跡	宇天神私場	*	畠	中世	
77 中馬舟遺跡	宇上大田	*	畠・宅地	*	
78 福空遺跡	宇カダガシキ	*	*	*	
79 アリノ木遺跡	加持川字アリノ木	*	畠	*	
80 長丁頭舟跡	長丁頭舟	*	*	*	
81 大井川遺跡	大井川字吉田屋敷	*	木田・畠	*	
82 大屋敷舟跡	加持川字吉田屋敷・上林山・上林谷地	*	畠・ハクス	柵文	
83 小井舟遺跡	宇小井舟	*	畠・宅地	中世	
84 小井(口)舟跡	宇小井舟ノ口・ボリ・西坂本・新開	*	木田	中世	
85 長門私舟遺跡	宇長門ダバ・ヤマメダ・長門	*	畠	*	
86 旨崎遺跡	加持川字旨崎	*	木田	平安	消滅

2 弥生から平安時代

弥生時代の遺跡は4カ所あり、奥湊川遺跡からは弥生中期の柱状石斧が出土している。破損が激しく一見すると打製の局部磨製石斧のように見られる。加持の庄田遺跡からも中期の扁平片刃石斧と多くの叩石が出土し、浮鞭の弘野遺跡からも打製石斧と叩石が発見されている。弘野遺跡も弥生中期と推定される。

弥生後期から古墳時代の複合遺跡としては入野の早咲遺跡がある。弥生時代の叩石のほかに古墳前期の土師器が出土し、祭祀用の粗製小型土器も発見されている。古墳としては、下田ノ口の後期横穴式石室古墳（県史跡）があり、古く勾玉や須恵器が出土している。入野本村の大方商業高校裏山からは提瓶と呼ぶ須恵器が出土しているが、これは、地形や出土の遺物などから木棺直葬の後期古墳とみられる。浮鞭色見場の鞭跡は多くの須恵器が出土し、古墳時代後期の集落関係遺跡と推定される。本格的調査はなされていない。浮鞭の鹿々場では、須恵器を焼いた窯跡が発見されている。登り窯は未発見であるが、灰原が発見されている。灰原から出土している須恵器から見て9世紀代の窯と見られる。瓦は焼かれず、須恵器の壺・瓶・杯・蓋・盤などが焼かれている。



田ノ口古墳

3 中世

大方郷は当初一条家領であり、建長2年

(1250) 九条道家から一条氏の祖実経に譲与した所領の幡多郡（幡多荘）に「大方庄」がみえる（九条家文書）。のち元応2年（1320）3月10日の一条殿寄進状によれば、道家開基の東福寺へ寄進されている（東福寺文書）。以後大方郷は東福寺領として一応幡多荘とは別途の道を歩むこととなり、長宗我部地検帳には、当町域では足摺分（金剛福寺領）が一筆もないことなども、その現れであろうか。なお、金剛福寺文書には幡多荘内各村（郷）の名が散見するが、そのうち大方郷内の地名は正応2年（1289）前撰政家政所下文中に「大方郷内浦国名田口宅町」と見えるのみである（森簡集）。

1) 尊良親王の幡多配流

当地は、土御門上皇の遠流の地ともいわれ（大方町史）尊良親王も配流されてきたと伝え、中世にも遠流の地であった。後醍醐天皇の倒幕計画発覚で配流されたなかに後醍醐天皇の第1皇子尊良親王がおり、親王は幡多郡の大方郷に入ったという。元弘2年（1332）3月の事である。配流後、大方郷の土豪大平弾正や有井川の土豪有井庄司の活動があったと伝えられる。「太平記」には、「土佐ノ畠」と記され、大方郷の地であったかは明確でない。大平弾正是奥湊川の領主といわれ、親王を奥湊川の最奥、王野という山中に迎えたが、京より刺客襲来の噂もあって、有井川の庄司三郎左衛門



鹿々場窯跡遠景

豊高と相談してさらに有井川の奥の米原の地に移し、以後有井庄司が親王を守護したと伝えられる。当時の親王の心境は「新葉和歌集」に載る少なからぬ歌によって知られる。小袖貝や衣掛唇など親王とその御息所あるいは有井庄司・大平弾正にまつわる伝説が多く残り、大平弾正の墓や有井庄司一族の五輪塔などの遺跡・遺物も当地のそこここに影を落としている。

有井庄司の墓は有井川にある。尊良親王は忠臣有井庄司の死を聞き、冥福を祈って五輪塔を贈ったと伝えられる。大小総数68個の五輪塔が現存し、沖の海中には多くの五輪塔石が砂中に埋没しているとも伝えられる。昭和28年に県史跡に指定された。また米原の仮宮の跡と伝える米原宮跡（町文化財）もある。なお加持の田村大明神は、南北朝期の常滑大甕を古くから神体についていたと「南路誌」に見えるが、昭和47年に付近からこの大甕が発見された。また田村大明神に近い宮尾の戸でも、同50年に同じく南北朝期の常滑大甕が発見された。この大甕が土中に埋没していた様子は鹿持雅澄の「幡多日記」文化15年（1818）の記事に掲載されている。

2) 土佐一条氏と入野氏

応仁2年（1468）10月、前閥白一条教房は、幡多荘の中心中村に入った。一条氏は、下向後、幡多荘内の主だった武士たちの官位昇進の要望を入れて、朝廷に推挙している（大乗院寺社雜事記）。この中に「市正」に任じられた入野家則が見える。家則とその父家元は、一条氏に服従せず、そのために一条氏は興福寺大乗院門跡の尋尊を通じて入野父子を春日社で調伏しているほどである。この入野氏もついに翌3年8月頃までに一条氏に属するに至った（同前）。

3) 地検帳に見える大方

天正17・18年（1589・1590）に行われた入野郷関係の地検帳には、有井川・井田・出口・浮津・馬荷・大井川・奥湊川・御坊境・上田之口・弘ノ・福堂・鞭・鰐川などの村名が見える。地検帳に見える村名は、若干の例外（赤坂ノ村・大楠ノ村・ヒビ原ノ村・弘ノ村など）を除いてほとんどが、そのまま現在に続いている。入野郷の村では一部町を形成した地域もあり、幡多郡では珍しいあり方を示している。東小野様御分・タイノ大分殿分・安田上様御分・觀音寺新左衛門殿分・冷泉院民部小輔殿給・入江治部小輔給・飛鳥井虎熊給などの記載が多い。これらは一条家一門や公家衆、および長宗我部氏一族などと思われる。冷泉院・入江・飛鳥井などは長宗我部時代となても、一条氏時代に引き続いて土着し、旧領の一部を給与されて在地小領主へ転化したものと思われる。当時も当町域は一条氏時代の支配態勢の名残を残している。



大平弾正の墓



常滑焼大甕

4) 水主の記録

長い海岸線をもつ当町には水主が相当数存在した。地検帳によると、各村の水主は、現住のわかるものが井田14・有井川4・浮津3・田浦7の計28名、居住不明の者は井田5・有井川1・浮津0・田浦4で計10名、あわせて38名を数えている。砂浜のみの入野や出口に水主のいないことはうなずけるが、港らしい港を持たない有井川に水主がおり、大方町第一の港とされる上川口に水主が1人もいない意味は今後の研究課題である。舟頭（船頭と同意義か）が上川口に3名もあり、ほかの海辺に記載されていないこともあわせて注目される。また水主や船頭と最も関係の深い船番匠（船大工）が少なくとも5軒あることも重要である。長い海岸線をもなながら東隣りの佐賀町の水主数に比して少ないことは重視される。



現在の大方町入野漁港

4 近世

江戸期に入ると当地も土佐藩山内氏の支配下に入る。当町の江戸期の村名は、4ヶ村の例外を除き地検帳記載の村名がそのまま踏襲されて、一村庄屋あるいは兼帶庄屋により行政が行われている。小村の場合は名本が置かれることもある。そのうち入野村は相当の広域村で一村を統けていることで特色がある。また入野郷には藩政当初から大庄屋が配置され（大方町史）、当初の大庄屋には曾根氏がおり、中期・末期には永野・猪石両家がある。大庄屋の管下には出口・田野浦・上田ノ口・下田ノ口・御坊畠・馬荷・橋川・鹿持川・鹿持・口湊川・奥湊川・大井川・鞭・龜川・有井川・入野の16ヶ村があった。入野は大庄屋の直轄地である。寛保3年（1743）の郷村帳には、入野・鹿持（加持）・鹿持川（加持川）・浮津・鞭・口湊（口湊川）・奥湊川・広野・大井川・上田ノ口・田ノ口（下田ノ口）・御坊畠（御坊畠）・馬荷・橋川・出口・田ノ浦（田野浦）・龜川・川口・井田・有井川・福堂の21ヶ村がみえる。戸数・人数は、入野村の140戸・648人、井田村の87戸・493人など、合計1,075戸・4,719人であった。なお、広野村は鞭村、福堂村の内と思われ、川口村は江戸後期から上川口村とも称された。

1) 浦と浦庄屋

海辺の港湾・漁獲地は浦と称され、浦庄屋が配置された。当町域の浦は井田・上川口・浮津・入野・田ノ浦などがあり、浮津以外の浦は同名の浦もある。入野は従来村であったが、宝曆12年（1762）新浦立てされた。当時の庄屋は永野家であり、村浦兼帶であった。なお漁師居住の旧浦分を浜と言い、百姓居住の農村分を郷という慣行は今に続いている。上川口浦は当町域中でも海運ならびに漁業の重要な港として、井田・浮津・入野各浦を兼帶した浦大庄屋が配置されたこともあり、藩政後半には安光家が4ヶ浦大庄屋を勤めていた（安光家年譜）なお伊田の松山寺跡に再興された觀音寺に残る「月」の字の額は、土佐国司紀貫之の板書と伝えられている。焼却されて「月」の1字のみ残ったものを、郡奉行尾池春水が寺僧から貰い受けて松山寺に寄進したものといわれ、江戸期に文

人墨客の評判を得、関係の詠歌が多く残されている。

2) 田ノ口銅山と入野砂糖

海岸線は長いが良港に恵まれぬ点と、当地が土佐湾内にあるためか、漁業は総体的に余り盛んではなかった。製塩も地検帳に塩浜72浜が集計されているが、みるべきものはない。むしろ当地の産業としては銅山と精糖が産業史に特記すべきものといえよう。田ノ口銅山は土佐で最も古く、幡多郡では唯一の銅山である。延宝5年（1677）藩営事業として試掘が始められており、のち宝永4年（1707）大阪商人海部家助右衛門らによって採掘が始められた。翌年中止され、正徳2年（1712）再開、元文3年（1738）廃坑、安政3年（1856）再開された。その後経営者が転々としながらも明治44年まで続いたが休山している。（堅田）

第2節 大方町の中世城郭

大方町の中世をみると、南北朝時代以降大方郷の豪族として名前が知られている入野氏がいる。入野氏は、一条氏が中村に下向するまでその勢力を保ち、下向後は一条氏の有力家臣團に組み込まれているが依然として大方郷を支配していた。大方町には、高知県遺跡詳細分布調査によって確認されている中世城郭が25城跡ある。確認されている中世城郭は、小規模城郭が多く一条氏の傘下で入野氏と関わりのある小土豪の持ち城の可能性が強い。しかしこの入野氏の詳細については不明な点が多く、入野氏滅亡に関しても文献面の資料は数少ない。その中で、高野山円満院の過去帳に入野家和・家重父子の名前が認められる。この過去帳によると、永正17年卯月24日という命日の記録がある。この過去帳の記録を残して、入野氏の名前が突如として姿を消している。大方町史によると、主家である一条房家が入野父子を誅殺したとされ、その誅殺に手をかした者の褒賞として入野郷に給地が与えられていることを長宗我部地検帳の分析から指摘している。いづれにしても一条氏が下向していく15世紀後半から前述した房家が入野氏を上意討ちした事件の頃までに、西本城跡をはじめ周辺の中世城郭は構築されている可能性が考えられる。このような歴史的背景の中で、現在までに発掘調査されている曾我城跡や、縄張り調査されている中世城郭を各流域ごとにみていくたい。

曾我城跡は、大方町浮鞭城ノ谷口に所在している。1995・1996年に農地造成工事に伴い堀切部を中心として発掘調査されている。曾我城跡は、標高が45mの主郭を中心に連結したいくつかの曲輪と堀切1条、堅堀2条で構成されている。東側に流れる湊川の岸部分の標高差は35mである。主郭部分は、工事対象外で試掘調査のみが実施されている。試掘調査の結果を見ると、主郭部には掘立柱建物跡を検出しており、出土遺物をみると青磁のみで構築から機能した時期を類推すると15世紀後半から16世紀前半の時期とみられている。曾我城跡をみても、前述した一条氏下向から入野氏事件の時期と城跡の機能した時期が一致する。さらに今回の西本城跡の調査成果からも同じことが言えそうである。

大方町は、太平洋に面した扇形の地形をしている。北部の大半を山地が占め、南の太平洋に向けて6つの中・小河川が流入している。中世城郭も各河川沿いの丘陵上に構築されているものが多い。

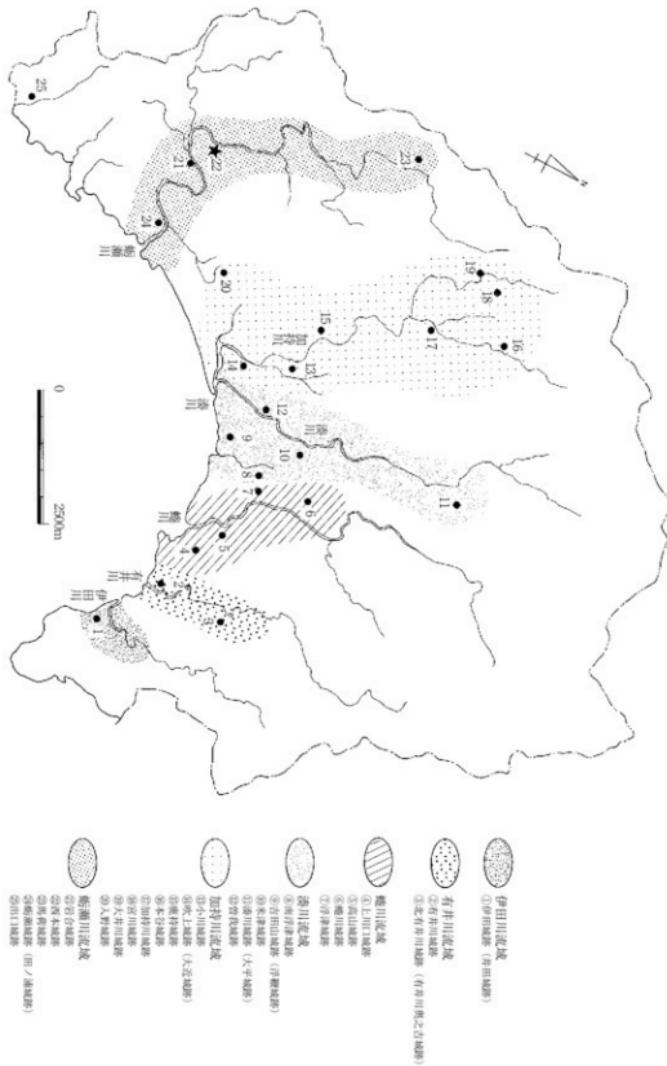


Fig. 4 大方町河川流域別中世城郭分布図

ここでは、各河川ごとに城郭分布をみていきたい。

伊田川流域…伊田城跡の1城跡。

加持川流域…加持城跡、入野城跡、吹上城跡、本谷城跡、加持川城跡、小川城跡、宮ノ川城跡、大井川城跡の8城跡。

蛎瀬川流域…西本城跡、岩合城跡、蛎瀬城跡、馬荷城跡の4城跡。

湊川流域…米津城跡、南浮津城跡、曾我城跡、浮鞭城跡、大平城跡の5城跡。

有井川流域…北有井川城跡、有井城跡の2城跡。

鶴川流域…上川口城跡、高山城跡、浮津城跡、鶴川城跡の4城跡

その他町内主要河川付近ではないが、小河川に近い場所に構築されており、海に近く大方町西南端部に位置する出口城跡がある。以上各流域ごとに城跡を見てきたが、町内に構築されている城跡の特色についての詳細な検討は考察で行うこととする。

第3節 西本城跡の概要

西本城跡は、大方町上田ノ口字タナダ・テッポウ田に所在している。尾根上に立地し、主郭と考えられる標高50mの曲輪1と西側に一段低い標高42mの曲輪2が構築されている。主なこの2ヶ所の曲輪を防御するように堀切3条を両端に配している。曲輪2の南部には3条の堀切を挟んで曲輪3が存在するが、南端を堀切1条によって区画されている。主郭及びその東部は調査対象外であるが、主郭の東側も堀切3条が掘られ強固に防御されている。曲輪2の西側斜面には堅堀が連続して掘り込まれていることも今回の調査で判明した。主郭の曲輪1及び下段の曲輪2は、その前後を3条ずつの堀切で囲まれており尾根上の侵入を防御しており、さらに曲輪2の西側斜面の堅堀群は、斜面を利用した登城の防御的役割を果たしている。曲輪1・2は、田ノ口地区を一望できる適所に構えられており、東は対岸の岩倉城とともに入野～中村間の往還を抑え、西側は馬荷への入口を抑えることができる。小規模城郭ながら、交通の要所を押さえることと、上田ノ口集落を防御するに堅固な構えをもつ城郭である。

大方町では、中世の城館跡が25ヶ所確認されている。そのほとんどが山城で小規模城郭が多い。大規模城郭のような地域支配の核となる城を「拠点的城郭」と位置付けると、対する特徴の乏しい城郭を「小規模城郭」と捉えることができる。西本城跡をはじめ、その多くの山城が小規模城郭であることは認識されており、民衆との係わりの中で小規模城郭が構築されていった点など西本城跡の調査成果は貴重な資料である。(松田)

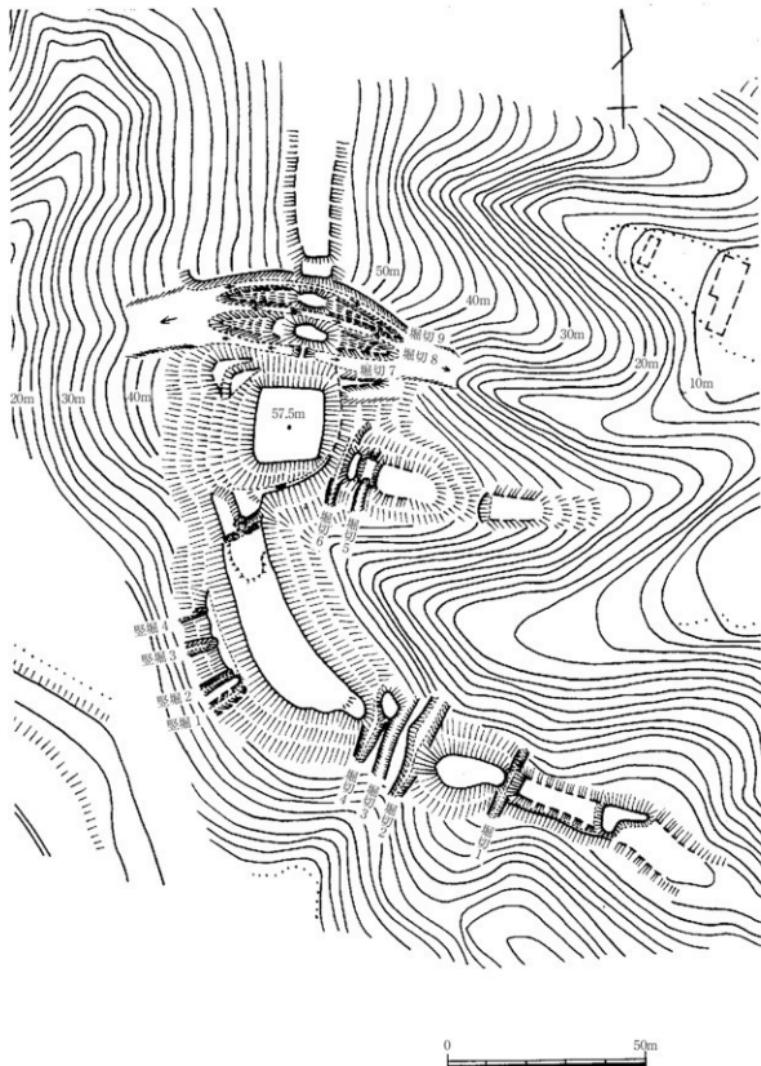


Fig. 5 西本城跡概要図（高知県幡多郡方町） 作図：中井 均

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査にあたっては、雑木の伐採前に城跡全体の縄張り図を作成した。伐採終了後西斜面に堅堀と曲輪を発見し、縄張り図に追加作図した。詳細は遺構の項に譲ることにする。測量基準点の設置にあたっては、(社)高知県建設技術公社に委託した。測量の概要是四等三角点、田ノ口（標石第052951号）・下田ノ口（標石第048989号）を基点にT1～T8の新点を設置し、西本城跡のまわりに準拠点（コンクリート杭）JK1・JK2・JK3を設置した。基準線は曲輪2の長軸方向とし、公共座標第IV系の北から西へ $30^{\circ} - 49' - 52''$ 振っている。名称は南北をA～Z（4.0mピッチ）、東西に2～32（4.0mピッチ）のメッシュ測量点を設置し、各グリッドとした。1～4曲輪は同一グリッドラインであり、グリッドの名称は北西コーナーを基準として呼称することとした。曲輪1～3の調査は 2×2 mのトレンチを設定し、遺構・遺物の遺存状態を確認した後、ベルトを残して全面発掘を行った。曲輪4については面積が狭かったので、西側斜面部分と同時にベルトを残して掘り進めた。東側斜面も同様にベルトを残し掘り進めた。東斜面下の水田部分については、確認のためA～Cトレンチを設定し調査を行った。各トレンチは次のとおりである。Aトレンチ 2×12 m、Bトレンチ 2×10 m、Cトレンチ $2 \times$

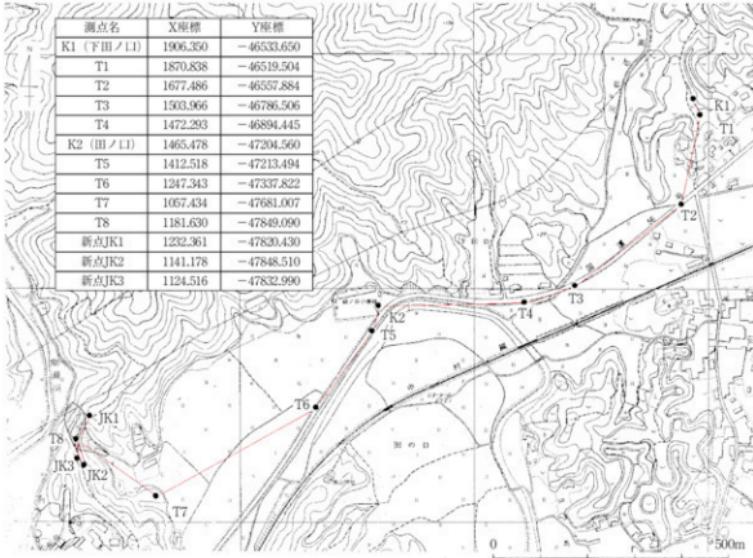


Fig. 6 西本城跡測量基準点設定図

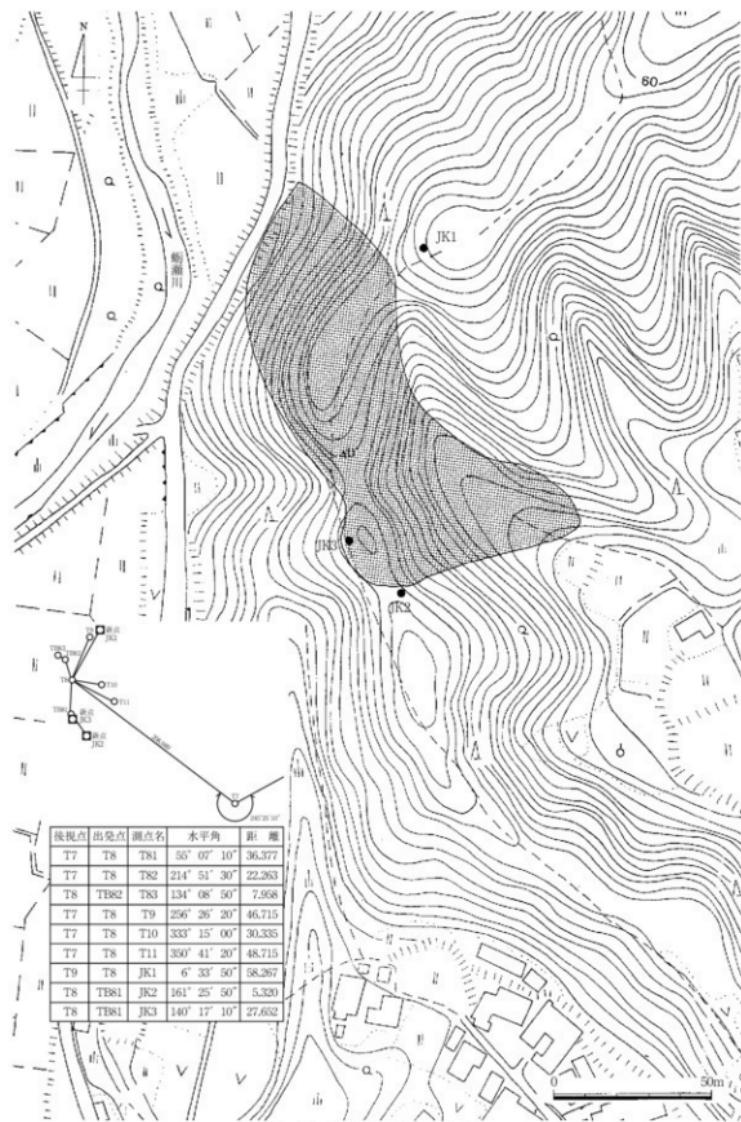


Fig. 7 西本城跡調査対象範囲

24mである。堀切1は浅く長さも短く、ほとんどの部分が調査区外であるため不明な点が多いが曲輪3と他の部分との区画のために掘られた堀切のようである。堀切2・3・4については、堀切の中央部にベルトを設定して掘り下げる。堅堀1・2・3については、下端部の断面図を作製し、一番深く掘られていた堅堀3については、グリッド杭を利用してベルトを設定して掘り進んだ。曲輪4及び東斜面下の集石構造については実測図を作成した。調査の進行に応じて、必要な写真撮影及び図面作製等によって記録を残した。また、遺構の現状を正確かつ迅速に把握、保存するための空中写真測量法による遺構図を作成するために、㈱アイシーに航空写真測量を委託した。作成図面は、遺構平面図S=1:50・S=1:100、オルソコンター図、デジタルモザイク写真、風景写真である。

第2節 調査の概要

西本城跡は大方町上田ノ口字タナダ・テッポウ田に所在し、標高約50~40m前後の北東から南に伸びる尾根上に立地している。西側は上流の馬荷集落から鮎瀬川が南流し、東は対岸の岩倉城とともに

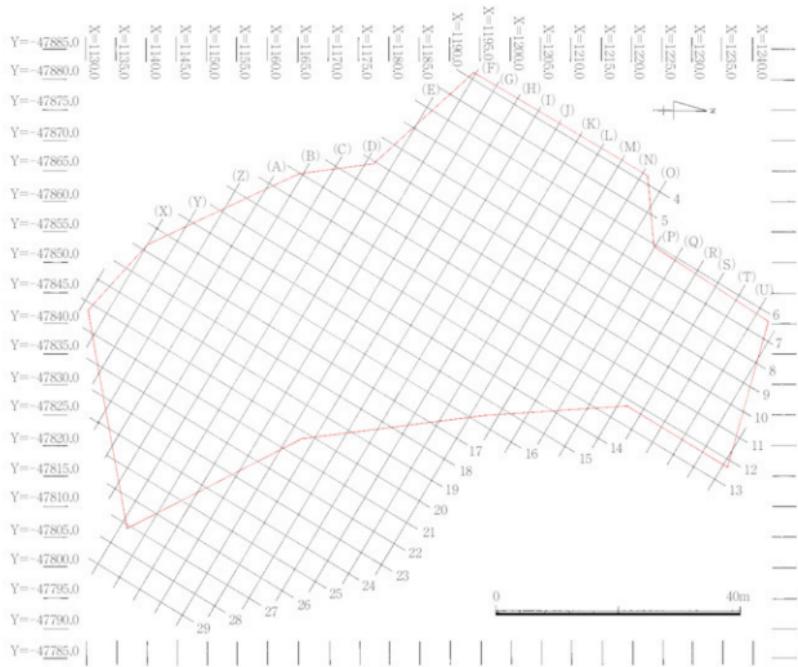


Fig. 8 調査区グリッド設定図

入野～中村間の往還を抑えるとともに、上田ノ口の集落を防御する交通の要衝を抑えている。

調査前の縄張り図作成時の状況をみれば、調査区域外ではあるが主郭と考えられる標高約50mの曲輪1とその北東側も堀切が3条掘られ強固に防御されている。曲輪1の南側には一段低い標高約42mの曲輪2が構築されている。曲輪2の南部には堀切3条を挟んで曲輪3が堀切1条によって区画されている。曲輪2は北東方向の長軸46.8m、東西の最大幅11.4mの不整形の曲輪である。曲輪3は南北方向に長軸をとる不整形の曲輪で、南北17.5m、南北方向の最大幅7.3mで自然地形であると思われる。曲輪1aは南北5.5m、東西4.4mの不整形の曲輪である。この曲輪の西側に一段低く南北に11.7m、東西2.8mの曲輪1bがある。曲輪3と曲輪2の間には3条の堀切が構築され、西斜面曲輪4の下方に堅堀3条が掘られ防御を固めている。

調査は、曲輪2から開始した。北端部では岩盤の露出がみられ岩盤を掘り込んだ柱穴が21個が確認された。南部に行くにしたがって堆積が厚くなり、中央部で土坑3基、柱穴33個、南部で柱穴28個を検出した。曲輪3は、遺構、遺物共に確認されず自然地形と判断されるが、その南側に続く尾根部は堀切により隔離されており、城としての構造の一環としてとらえられる。曲輪2と曲輪3を隔てる3条の堀切のうち堀切4の尾根部はきわめて急峻な斜面をなしており、曲輪2との比高差4.9mである。曲輪2の西斜面に帯状の曲輪4と集石及び3条の堅堀を検出した。東斜面下にも集石遺構を検出した。出土遺物は、ほとんどが曲輪2と集石周辺で出土しており総点数は1165点である。

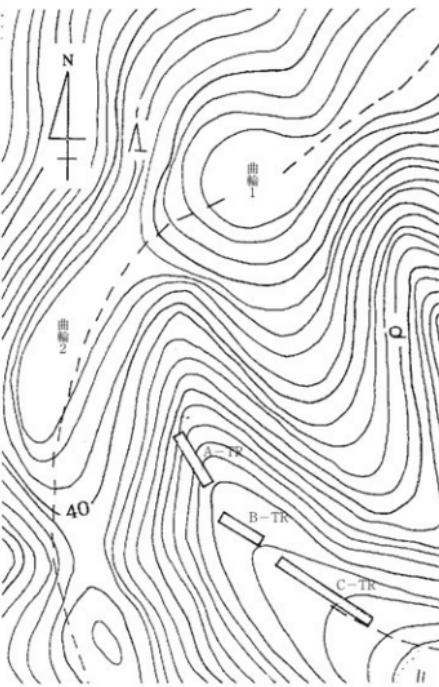


Fig. 9 A・B・C TR平面図

第3節 基本層序

西本城跡における各曲輪の土壤の堆積は薄く、特に曲輪2の北部は岩盤が露出しているが、南部に行くにしたがって堆積が厚くなっていく。東西方向の堆積状況も、中央部が薄く端によるほど厚く

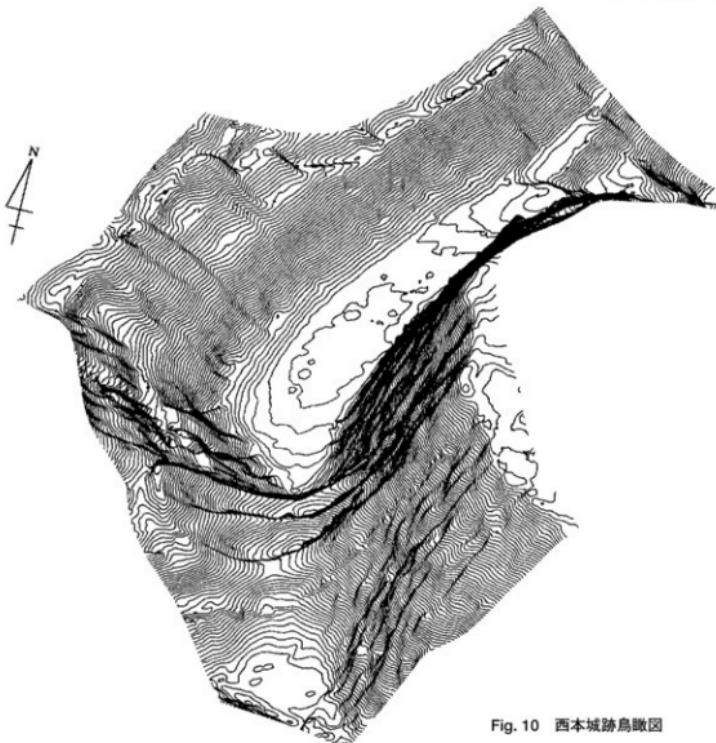


Fig. 10 西本城跡鳥瞰図

なっている。曲輪1a～1bの断面図セクションの層序は、I層暗褐色土層であり表土である。II層は褐色土層で小礫を含んでいる。III層は明褐色土層である。曲輪2の層序は、I層暗褐色土層であり表土である。II層は褐色土層で全体的に堆積しており遺物を包含している。III層はにぶい黄褐色土層である。

曲輪3の層序は、I層暗褐色土層で表土である。II層明黄褐色土層、III層にぶい黄褐色土層、IV層灰黄褐色土層、IV'層灰黄褐色土層である。

切岸のセクションは、I層暗褐色土層、II層にぶい黄褐色土層、III層黄褐色土層である。堅堀1・2は、I層暗褐色土層、II層にぶい黄褐色土層、III層明褐色土層である。堅堀3は、I層暗褐色土層、II層褐色土層、III層黄褐色土層、IV層褐色土層、V層オリーブ褐色土層である。

堀切2・3・4セクション (i-jライン) は、I層暗褐色土層、II層にぶい黄褐色土層である。堀切2・3・4セクション (g-hライン) は、I層暗褐色土層、II層にぶい黄褐色土層、II'層褐色土層、II''層にぶい黄褐色土層で締まりがある。III層にぶい黄褐色土層で礫を含んでいる。堀切2は、I層暗褐色土層、II層にぶい黄褐色土層である。堀切3は、I層暗褐色土層、II層にぶい黄褐色土層、II'層黄褐色土層 (小礫多く含む)、III層黄褐色土層である。堀切4は、I層暗褐色土層 (締まりなし)、II層にぶい黄褐色土層 (小礫多く含む) である。

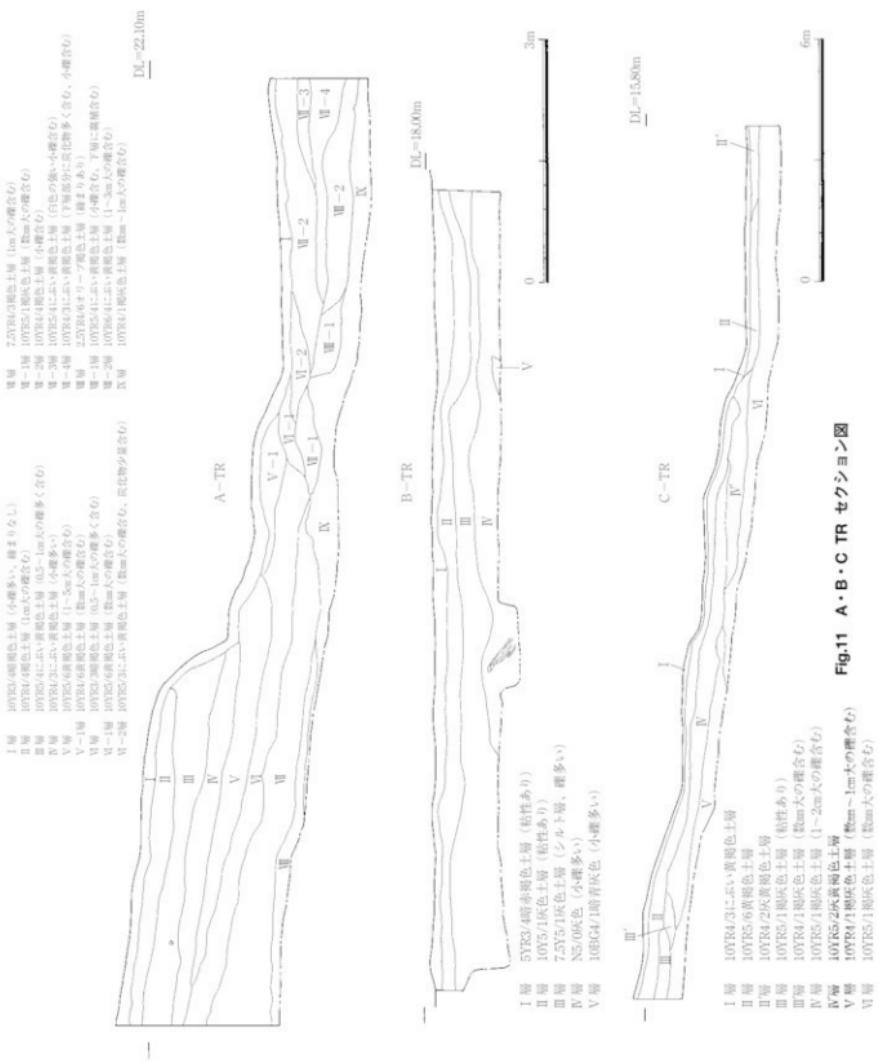


Fig.11 A・B・C TR セクション図

Fig.12 曲輪2及び東西斜面セクション図

Fig. 13 曲輪1a・b、曲輪3、切岸セクション図

Fig. 14 西本城跡検出遺構全体図

第4章 調査の成果

第1節 検出遺構

曲輪1aと西側に一段低い曲輪1bは面積も狭く遺構としては曲輪1aの北部から詰にかけての切岸だけである。曲輪2の遺構は、掘立柱建物跡6棟（SB）・柵跡2列（SA）・土坑3基（SK）・ピット群等を検出した。曲輪2の南部に堀切を挟んで位置する曲輪3は、自然地形を利用した平場であると考えられる。堀切は調査区内で4条確認できている。特に堀切2、3、4は連続して掘られている。西斜面に帯曲輪状の曲輪4と堅堀3条を検出し、東斜面下に集石遺構を検出した。

1 曲輪1の遺構

1) 切岸

調査区の北側端に断面台形状に詰を防御するために尾根を切り込んでいる。斜面の傾斜は50°近くあり急峻である。詰部の長さ約4m、底辺部約16mを測り、曲輪1bとの比高差9m、曲輪1aとの比高差5.5mを測る。

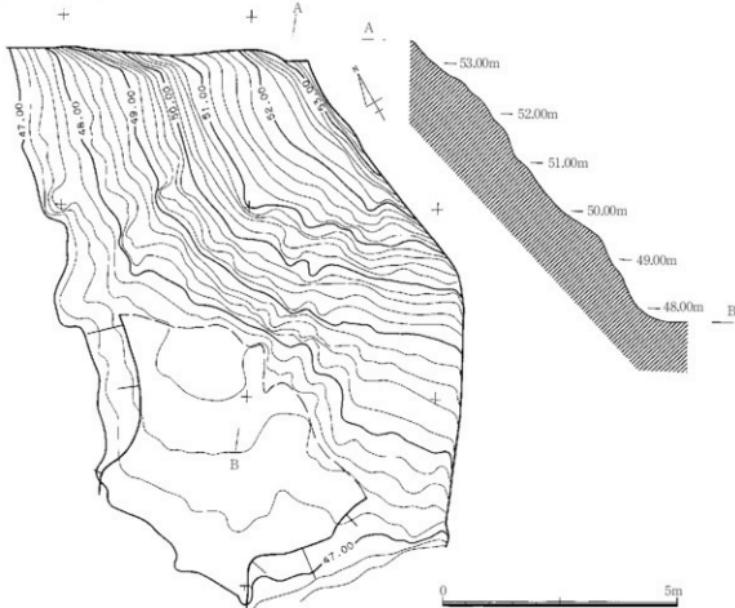


Fig. 15 切岸平面図及びエレベーション図

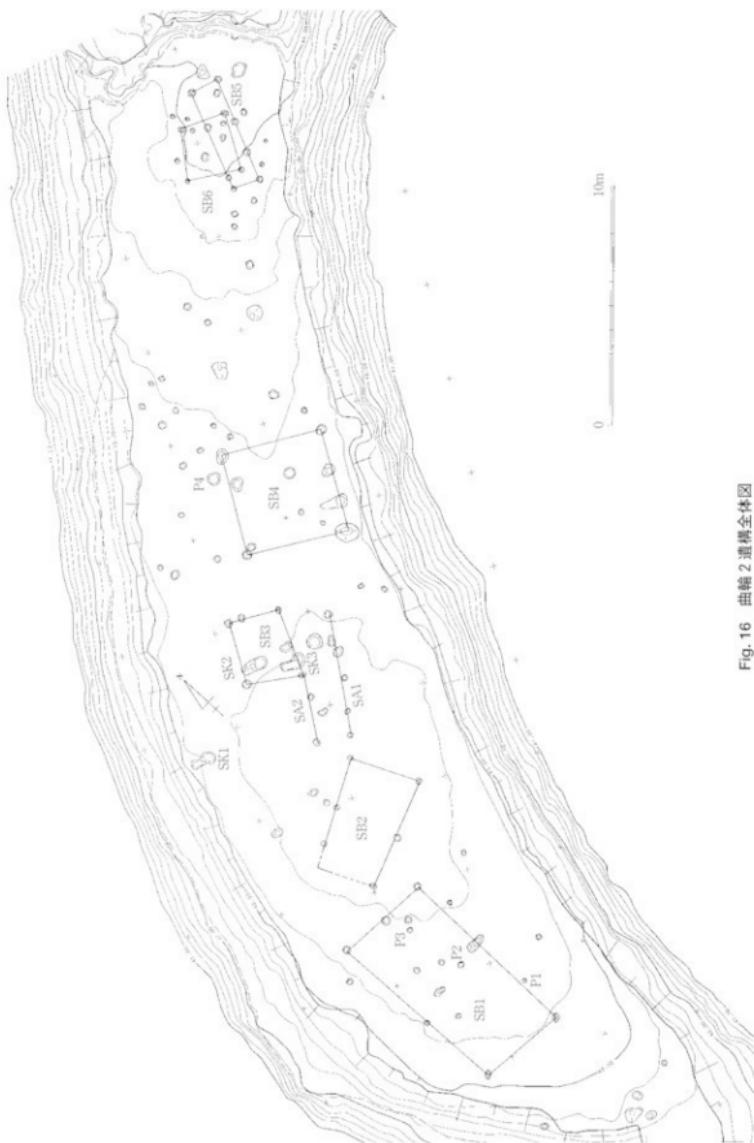


Fig. 16 曲輪 2 遺構全体図

2 曲輪2の遺構

1) SB 1

曲輪2の南部I-9・10・11、G-10、H-10・11区の2層下において検出した。建物の規模は1間×2間で、棟方向をほぼ北に方位をとる南北棟である。梁間南側は、3.92m、梁間北側は3.92mを測る。桁行西側は4.792mで、東側は8.00mを測る。桁行の柱間寸法は、3.36~4.56mである。柱穴の掘り方

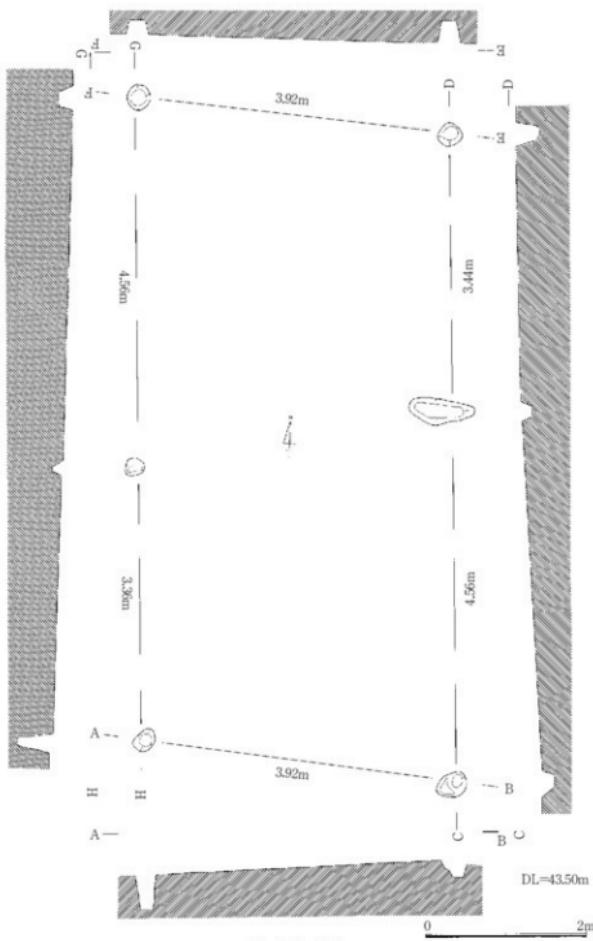


Fig. 17 SB1

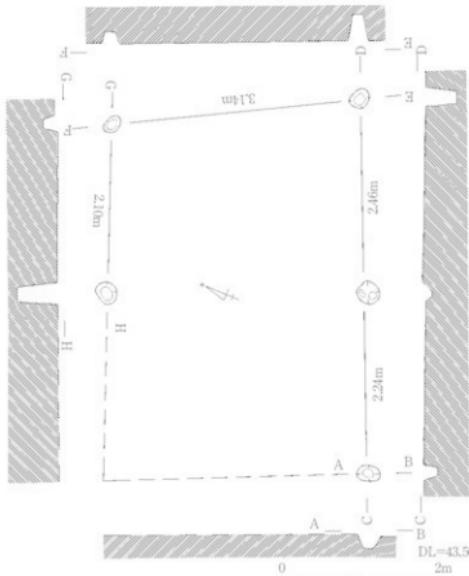


Fig. 18 SB2

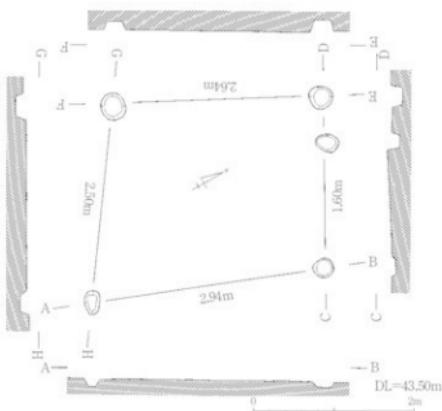


Fig. 19 SB3

は、ほぼ円形と楕円形を呈し円形の直径20~30cmを測り、楕円形の長軸80cm、短軸30cmを測る。検出面からの深さは平均で23cmである。底面の標高は、42.56~43.12mを測る。柱穴の埋土は単層で、褐色土である。出土遺物は認められなかった。

2) SB2

曲輪2の南部SB1の北側に位置する。K-9・10、J-9・10区において2層を除去した段階で検出した。柱穴が1個欠損しているが建物の規模は、1間×2間の建物跡で梁間3.14m、桁行4.70mを測る。棟方向はN-69°-Eを測り大きく東に振っている。柱間寸法は、2.24~2.46mを測る。柱穴の掘り方は、ほぼ円形状を呈し直径20~30cmを測る。検出面からの深さは平均で27cmである。底面の標高は、42.89~43.22mを測る。埋土は単層で、にぶい黄褐色土層である。出土遺物は皆無である。

3) SB3

曲輪2の中央部西側よりに位置する。M-9、L-9区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は、1間×1間の南北棟で南側梁間2.50m、北側梁間2.16mを測る。桁行東側2.94m、西側2.64mを測る方形を呈し、棟方向はN-30°-Eである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径20~30cmを測り、検出面からの深さは5~16cmを測る。底面

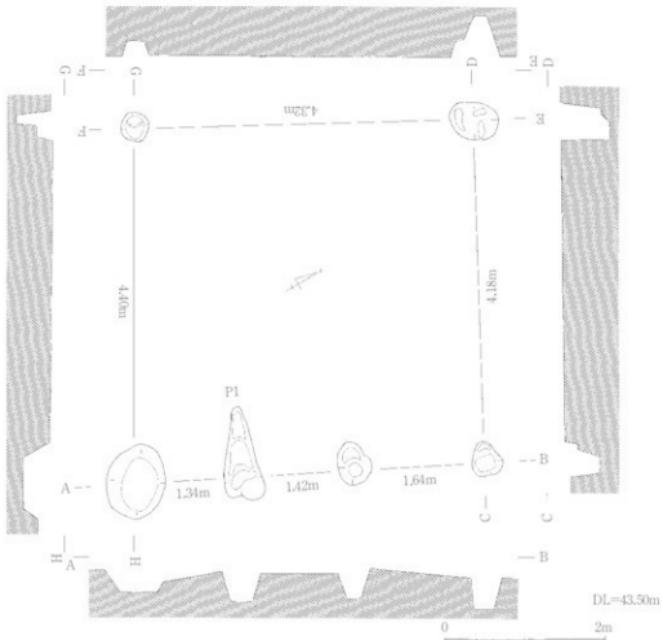


Fig. 20 SB4

の標高は、43.30～43.04mを測る。埋土は1層で、褐色土層である。出土遺物は認められなかった。

4) SB4

曲輪2の中央部東側に位置する。N-9・10、M-9・10区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は1間×1間の方形状の建物であるが、桁行東側列の柱穴はこの建物に伴うと考えられる。梁間は南側4.40m北側4.18m、桁行東側4.32m西側4.40mを測る。棟方向はN-30°-Eである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径36～90cmを測る。検出面からの深さは、33～62cmを測る。底面の標高は、42.87～42.58mを測る。埋土は1層で、褐色土層である。出土遺物は、P1から備前焼鉢片が1点出土している。図版番号は59である。

5) SB5

曲輪2の北部に位置する。R-10、Q-10区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は1間×3間の南北棟である。梁間は南側1.30m、北側1.24mを測り、桁行東側4.54m、西側4.48mを測る。棟方向はN-20°-Eである。柱間寸法は、0.5～2.30mと幅がある。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径20～30cmを測る。検出面からの深さは12～37cmを測る。底面の標高は43.68～43.85mを測る。埋土は単層で褐色土である。出土遺物は認められなかった。

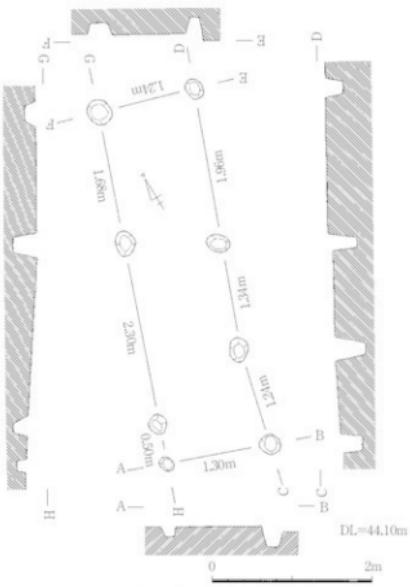


Fig. 21 SB5

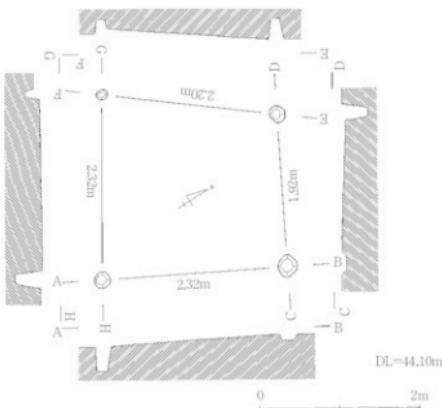


Fig. 22 SB6

6) SB6

曲輪2の北部に位置する。R-9・10、Q-9・10区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は1間×1間の南北棟である。梁間南側は2.32m、北側1.92mを測る。桁行西側2.20m、東側2.32mを測る。棟方向はN-30°-Eである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径10~30cmを測る。検出面からの深さは7~34cmを測る。底面の標高は43.66~43.93mを測る。埋土は1層で、褐色土である。出土遺物は、認められなかった。

7) SA1

曲輪2の中央部で、SB3の東側に位置し、北東方向にかけて柵列が延びている。4間の規模を持つ柵列で全長5.10mを測り、柱間寸法は0.94m~1.54mを測る。柱穴の掘り方は、円形状と楕円形状を呈する。円形は直径20~30cmを測り、楕円形は長径40~50cm、短径20cmを測る。検出面からの深さは、8~26cmを測る。底面の標高は43.14m~43.32mを測る。埋土は1層でにぶい黄褐色土である。出土遺物は認められなかった。

8) SA2

曲輪2の中央部で、SB3の南側SA1の西側に位置する。北東方向にSA1と平行に柵列が延びている。2間の規模を持つ柵列で全長3.00mを測り、柱間寸法は0.94~1.98mである。柱穴の掘り方は、

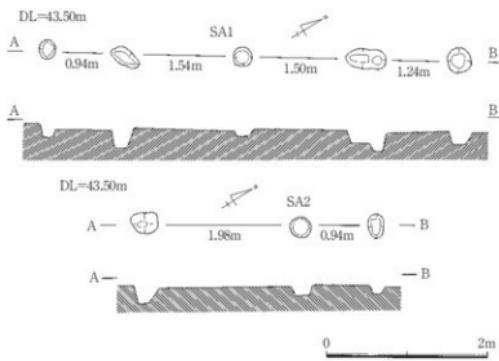


Fig. 23 SA1・2

9) SK 1

曲輪2の中央部よりやや南の西端部に位置する。2層除去後、K-8グリッドにおいて検出した。平面プランは、長径1.10m、短径0.24mを測り不正楕円形を呈する。西側に傾斜しているが、検出面からの深さは東側の部分で70cmを測り、断面形は一部ピットに切られているかU字状を呈する。埋土は、褐色土である。埋土中からの遺物は、認められなかった。

10) SK 2

曲輪2の中央部で、SA1の西側に位置する。2層除去後、L-9グリッドにおいて検出した。平面プランは、長径1.10m、短径0.30mを測り不正楕円形を呈する。検出面からの深さは、東部で10cm中央部47cm西部で26cmを測り、断面形はU字状を呈する。底面の標高は42.73~43.10mを測る。埋土は褐色土であり一部焼土化している。出土遺物は皆無である。

11) SK 3

曲輪2の中央部で、SK2の東側に位置する。2層除去後、L-9グリッドにおいて検出した平面プランは、長径1.10m、短径0.32mを測り不正楕円形を呈する。検出面からの深さは、10~41cmを測り、底面はほぼ平面で断面形はU字状を呈する。

底面の標高は、43.30~42.99mを測る。埋土は単層で褐色土である。出土遺物は認められなかった。

円形状と楕円状を呈する。円形は直径28cmを測り、楕円状は長径30~37cm、短径20~24cmを測る。検出面からの深さは、10cm~22cmを測る。底面の標高は43.18~43.30mを測る。埋土は単層のにぶい黄褐色土で、出土遺物は皆無である。

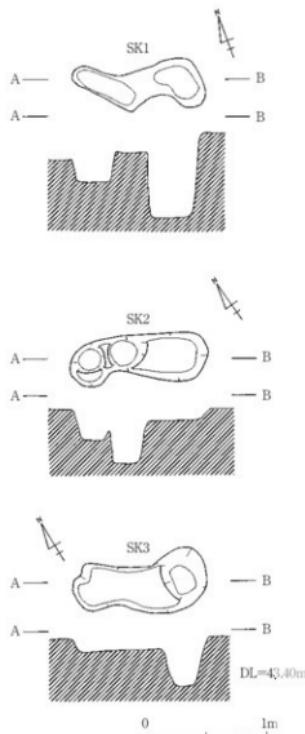


Fig. 24 SK1・2・3

3 曲輪4の遺構

曲輪2の西斜面に、標高36.0m～36.8mの場所に西側に緩く傾斜した帶状の曲輪4が構築されている。曲輪の規模は、南北約6.0m、東西2.5m、面積15m²を測る。

4 堀切

1) 堀切1

曲輪3の南端部に堀切1が構築されている。小さな堀切で曲輪3を区画するに掘られたようであるが、調査区外が大部分を占めるため詳細は不明である。

2) 堀切2

曲輪2と曲輪3の鞍部に3条の堀切が掘られ、その曲輪3に一番近い堀切である。底部の標高は37.7mを測り、曲輪3との比高差3.3m、上端からは1.6mである。断面U字状に近い底部の幅は約2.7mであり、東西斜面共に標高34mラインまで掘り込みがみられる。底部の埋土は厚さ22cmと浅く、斜面からの崩落土である。

3) 堀切3

連続して3条ある堀切の中間に位置する堀切である。底部の標高は37.7mを測り、上端部との比高差は1.6mである。断面U字状の底部の幅は0.65mを測り、東斜面は標高33mライン、西斜面側は標高32mラインまで掘り込まれている。底部の埋土は厚さ30～75cmを測る。

4) 堀切4

曲輪2の南側に掘られた堀切が堀切4である。底部の標高は38.1mを測り、曲輪2側の傾斜は急斜面をなし、比高差は4.9mを測る。断面U字状の底部の幅は0.75mを測り、東斜面は標高37mラインまで、西側斜面は標高34mラインまで掘り込まれている。底部の埋土は厚さ75cmを測る。

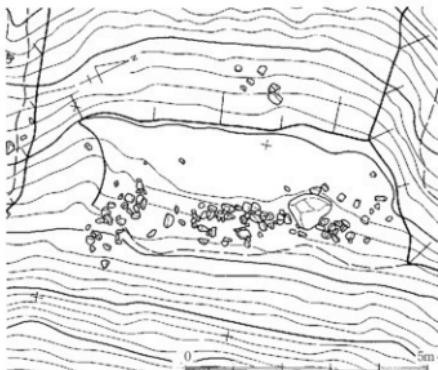


Fig. 25 曲輪4及び集石1 平面図

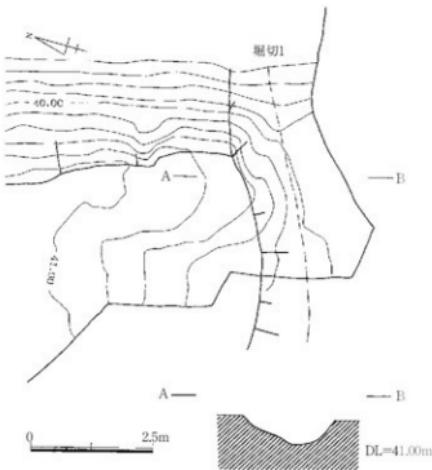


Fig. 26 堀切1 平面図及びエレベーション図

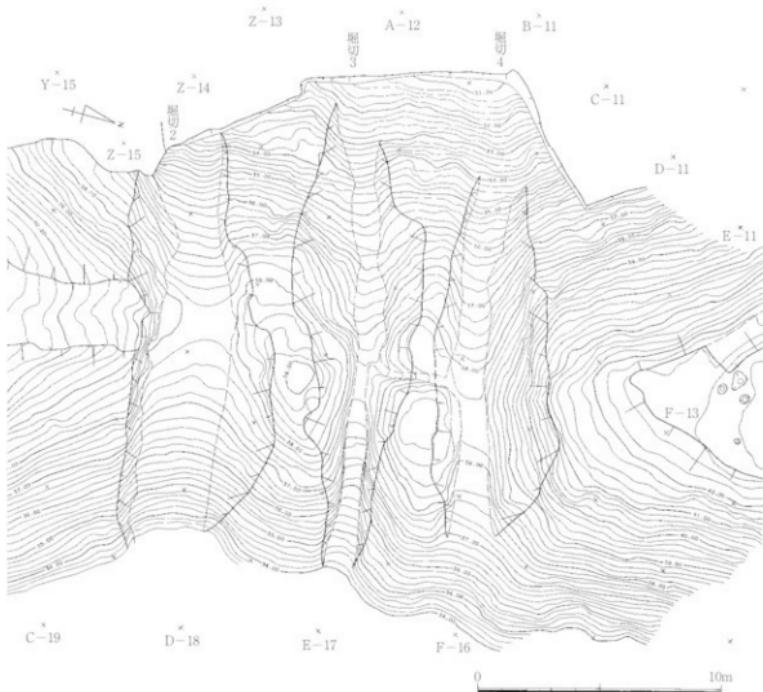


Fig. 27 堀切2・3・4平面図

5 竪堀

1) 竪堀1

曲輪2の西斜面に連続して3条の竪堀が掘られていて、その南端の竪堀である。標高37.4m付近から標高31mまで確認している。それよりも下方は調査区外だが竪堀状の地形は続いている。底部の形状は緩いU字状をなし、上端幅は4mを測る。

2) 竪堀2

3条続いた中間に位置する竪堀である。標高37.4m付近から標高31mまで確認している。それよりも下方は調査区外だが竪堀状の地形は続いている。底部の形状はU字状をなし上端幅は1.5mを測る。

3) 竪堀3

竪堀2から曲輪4を挟んで北側に位置する竪堀で、3条の堀切の中でも一番深く掘られている。最深部と上端部の比高差は約1mを測る。底部の形状はU字状を呈し下端幅は約1mを測る。標高37.4mから標高31mまで確認している。それより下方は調査区外だが竪堀状の地形は続いている。

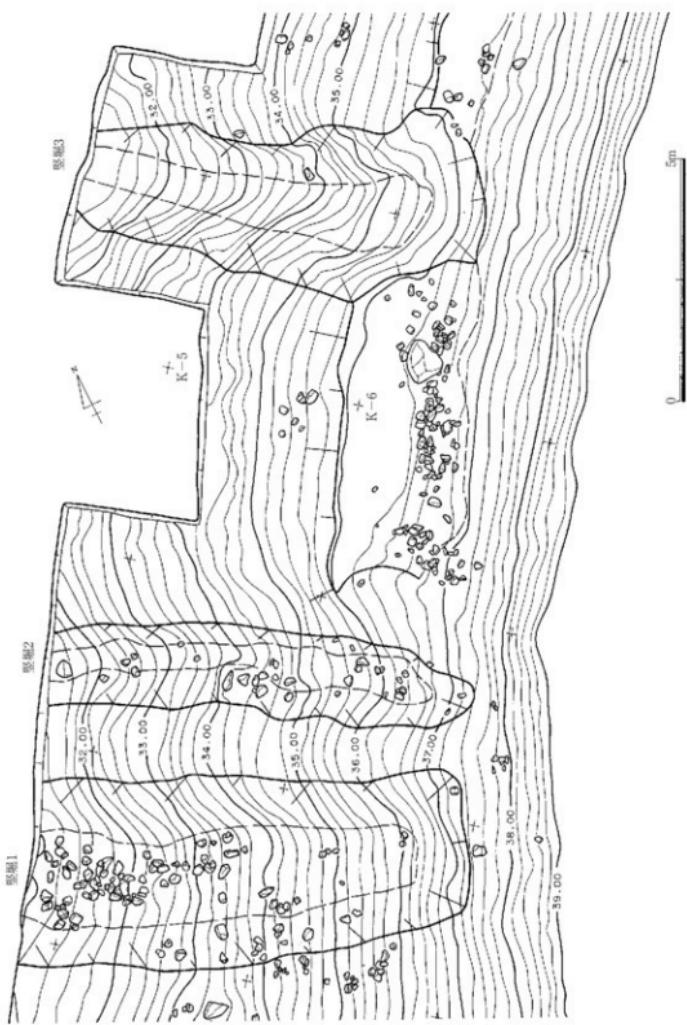


Fig. 28 墓塚1・2・3 平面図

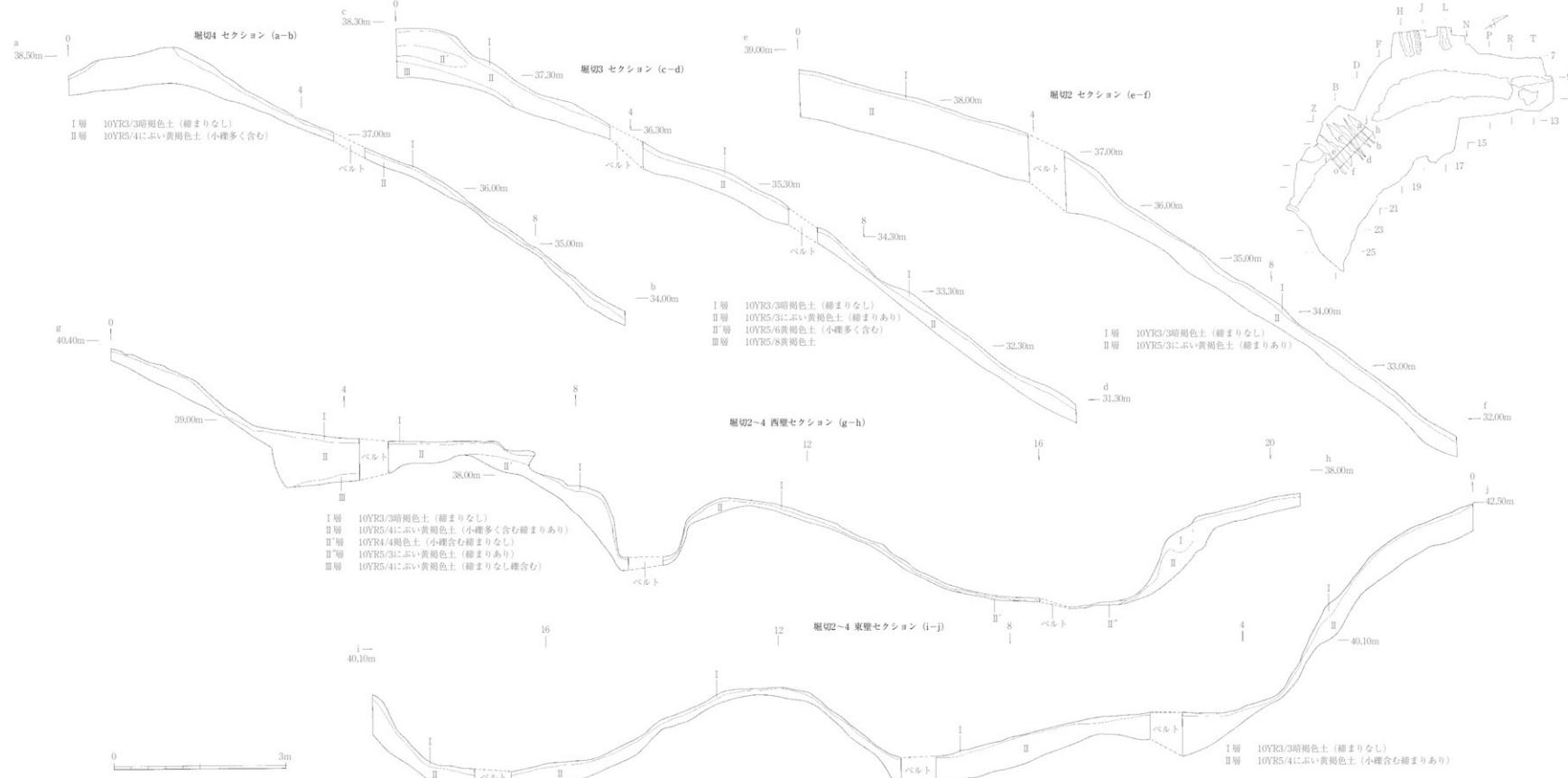


Fig. 29 堀切2・3・4セクション図

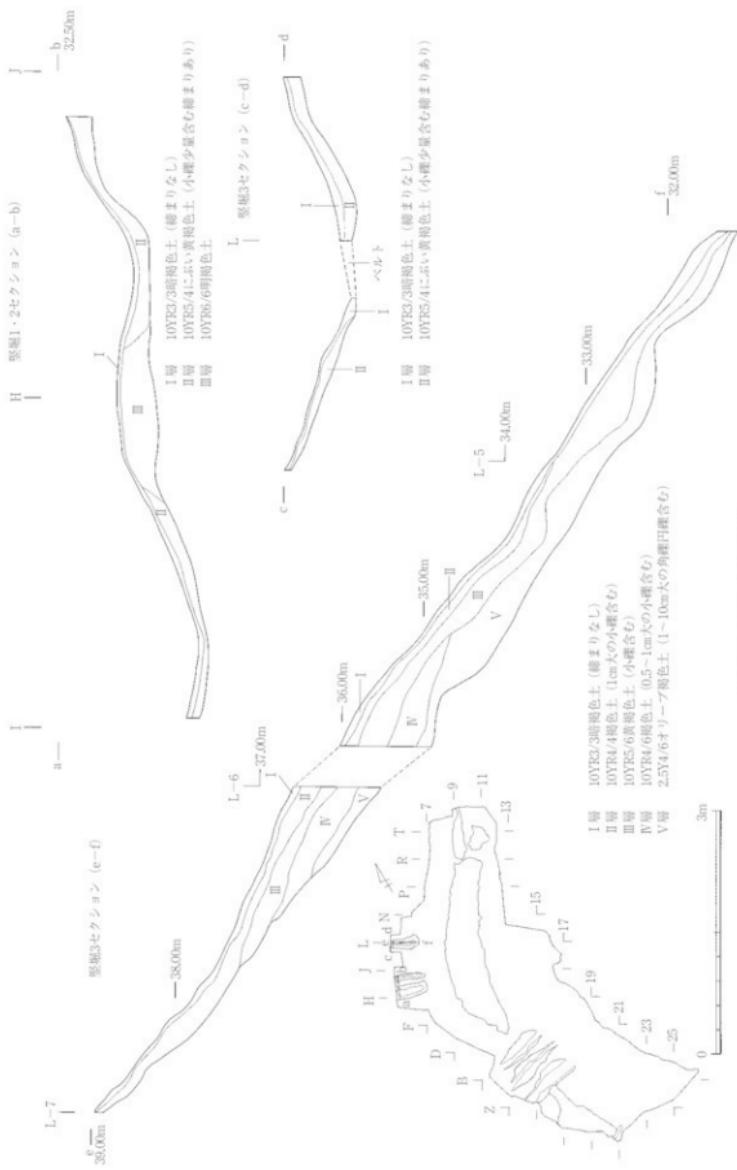


Fig. 30 堅堀セクション図

6 その他の遺構

1) 集石遺構1

曲輪2の西斜面を掘削中に検出した。最大1.2mの方形状の石を中心にして、拳大から人頭大の石が曲輪4に南北方向に並んでいた。曲輪2から落下して曲輪4の平坦部で止まったものと考えられる。堅堀の中にも拳大から人頭大の石が多数認められた。

2) 集石遺構2

曲輪2の東斜面下、Aトレンチの北側で検出した。最大1.6mの台形状の石の周りに、拳大から人頭大の石が斜面を転げ落ちてきたような状態で認められた。これらの石も、何らかの理由で曲輪2から落下して斜面の下に堆積したものと考えられる。(堅田)

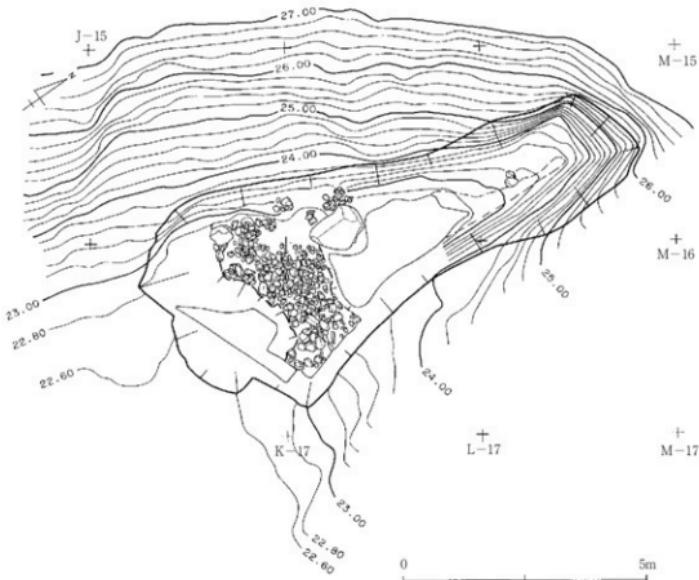


Fig. 31 集石2 平面図

第2節 出土遺物

西本城跡は、小規模な城郭ながら貿易陶磁をはじめ各種の遺物が出土している。県内で発掘調査された小規模城郭と比較しても量的に内容のあるものである。出土遺物の総点数は、1165点である。その内容は、中世遺物が366点で近世遺物が799点である。の中でも貿易陶磁の出土量が最も多く、土師質土器の量を凌いでいる。貿易陶磁は、青磁・青花・白磁が出土しているが、青磁が124点、青花が12点、白磁が11点の内訳で、青磁が最も多く出土している。国産陶器は、備前焼が多く擂鉢がその多くを占めている。土器・陶磁器類以外では土製品で土錘、石製品は砥石、金属製品は釘類や渡来銭などが出土している。今回実測して掲載できた土器類の遺物は78点で、出土地点・法量等の詳細は別表出土土器観察表と中世各遺構別出土遺物表を参照願いたい。

1 遺構内出土遺物 (Fig.32)

1) SB 4

1は備前焼の擂鉢で、底部の一部から口縁部まで残存している。体部はほぼ直線的に立ち上がり口縁部は拡張され内傾して立ち上がる。条線は、6本単位で下から上へ施され、内外面共ロクロナデ調整である。

2) 竪堀 1

竪堀1からは、土師質土器片3点と白磁1点、備前焼片4点、土錘2点で計10点が出土している。白磁皿1点と土錘2点が実測可能な遺物である。2は、白磁皿で底部が欠損している。体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁でおさまる。外面体部下半まで白濁色釉がかかる。3・4は、小型の土錘である。

3) 竪堀 2

竪堀2は、土師質土器片2点、青磁片4点、白磁1点、土錘2点、青花1点の計10点が出土している。実測可能な遺物は、青磁碗片1点と土錘2点である。5・6は小型の土錘である。7は青磁碗の底部で、高台部は削り出しで内面外底共に施釉し、外底は輪状に釉を搔きとり見込に印花文が施される。

4) 竪堀 3

竪堀3は、土師質土器片4点、青磁1点、備前焼片2点、金属製品1点の計8点が出土している。実測可能な遺物は、擂鉢が1点である。8は体部がほぼ直線的に立ち上がり、7本単位の条線が施され底部外面は未調整である。ロクロによるナデ調整で仕上げられているが、外面に削りの痕跡が残る。

5) 集石 2

集石2からは、集石間から比較的多く遺物が出土している。土師質土器5点、青磁1点、備前焼3点、金属製品3点の計13点である。実測可能な遺物は、土師質土器1点と備前焼擂鉢が2点である。9は土師質土器片で、体部は内湾して外上方に直線的に立ち上がり、摩耗が著しいが底部回転糸切りが施される。10・11は備前焼擂鉢である。10の体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。内外面ヨコナデ調整である。11は、体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は拡張されほぼ上方に直立する。体部外面に重ね焼きによる色調変化が認められ、条線は6本単位で施される。

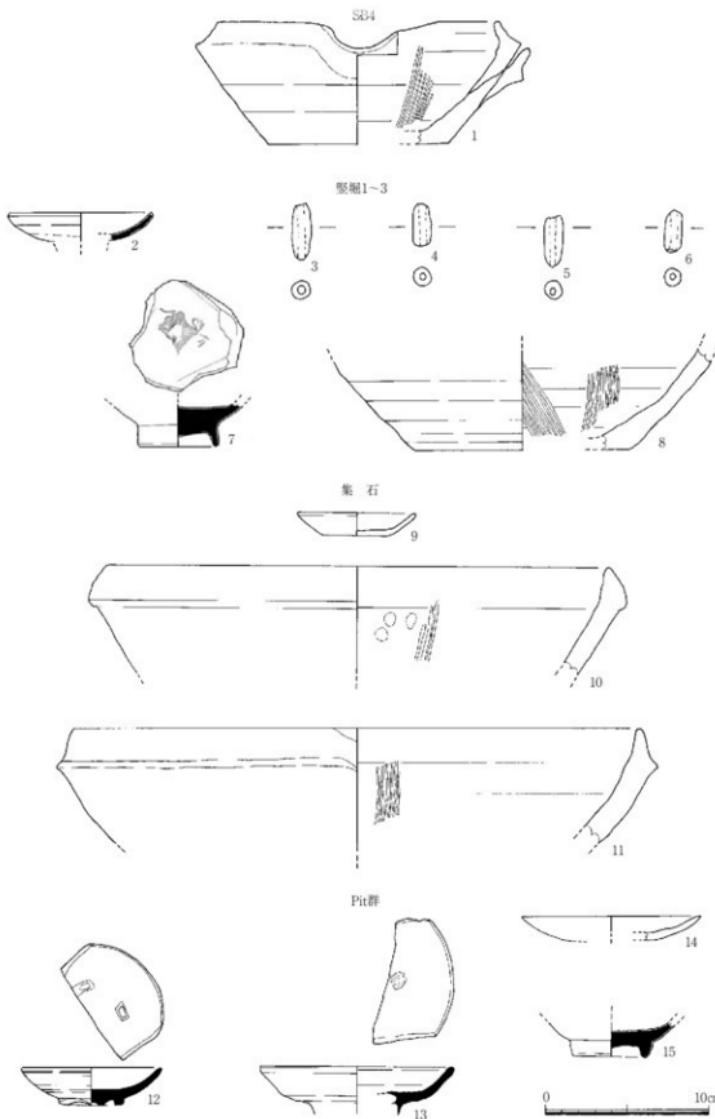


Fig. 32 遺構内出土遺物

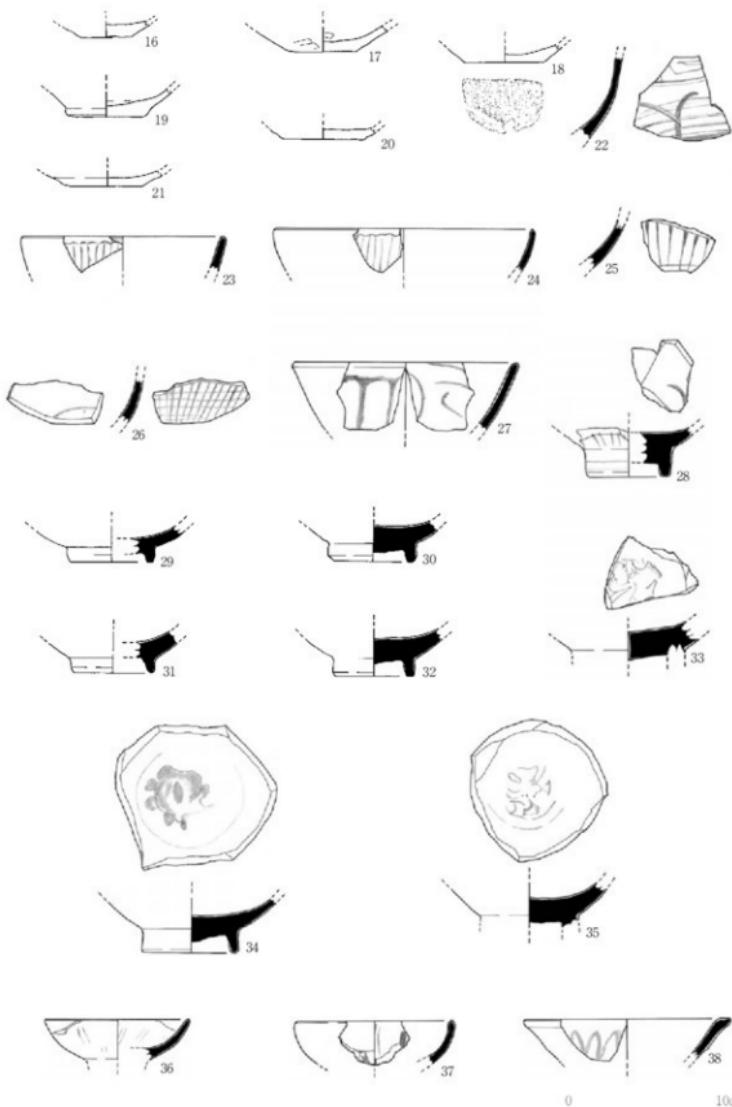


Fig. 33 遺構外出土遺物 1

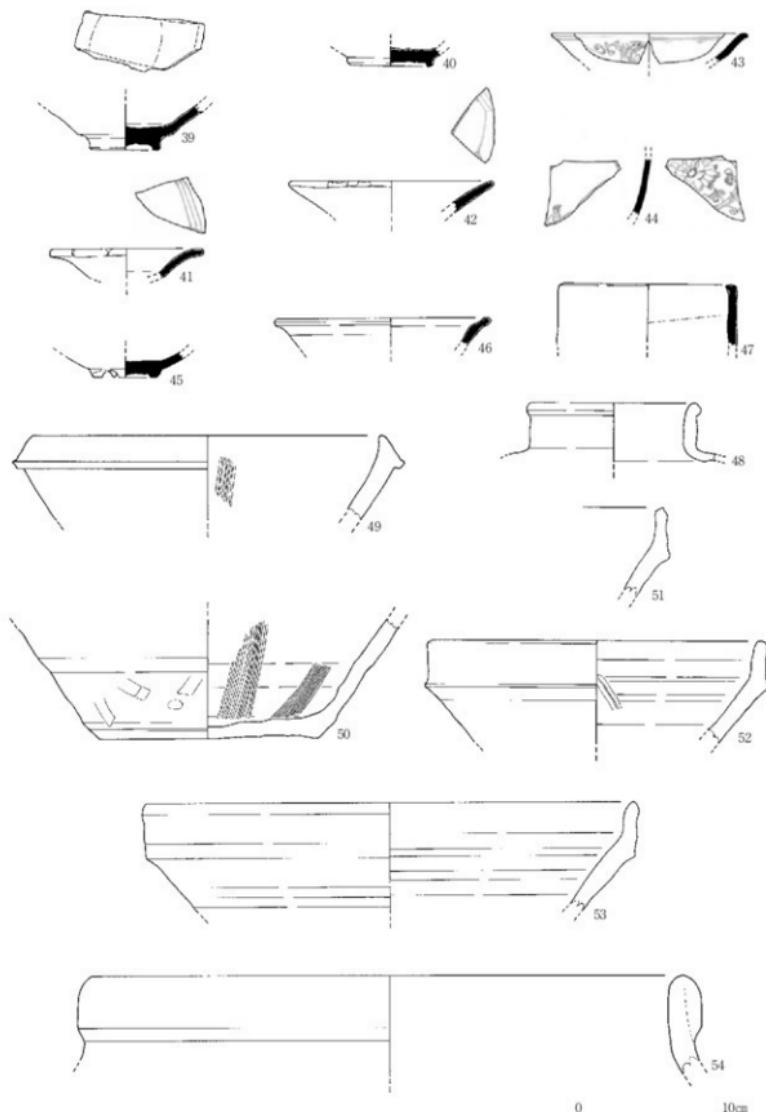


Fig. 34 造構外出土遺物 2

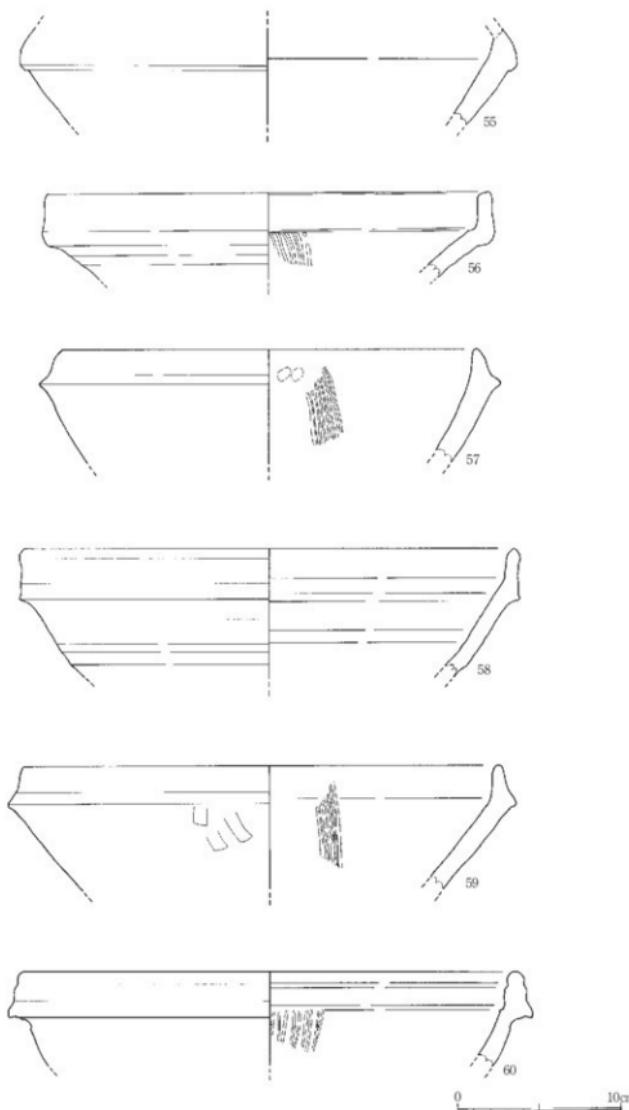


Fig. 35 遺構外出土遺物 3

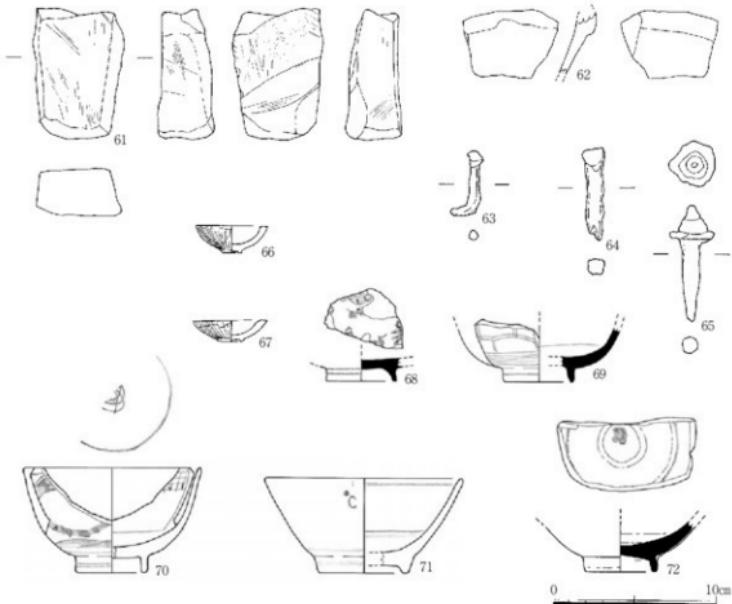


Fig. 36 遺構外出土遺物 4

6) Pit群

P1から12の白磁皿が出土している。高台部がアーチ状を呈し、体部は内弯しておさまる。全面に白湯色釉が施釉され、見込に目跡が残る。P3から13の唐津皿が出土している。体部は内弯気味に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさま見込に砂目跡が残る。P4から14の土師質土器が出土しており、全体的に摩減が著しく、体部は内弯気味に外上方に立ち上がる。P2から15の青磁碗が出土し、高台部の釉は豊付けを乗り越えて高台内面まで施釉され、外底部は露胎である。

2 遺構外出土遺物 (Fig.33~37)

1) 土師質土器

土師質土器は、全般的に磨減が著しく底部破片が多いため器種の判別が困難な製品が多い。実測可能なものは、16から21の6点である。16は小皿で、17から21までは皿と考えられる。18・19・21の底部外面には、底部に底部回転糸切りが残る。色調は全体的に浅黄橙色で、胎土は軟質である。

2) 青磁

西本城跡の出土遺物の中で、貿易陶磁の青磁が最も多く出土している。22から35までは青磁の碗である。22は、体部外面にヘラ状工具による蓮弁文と雷文帯が施され、内外面共に貫入が入る。23

から26までは体部から口縁部の破片であるが、外面にヘラ状工具による線描きの細蓮弁文や、丸ノミ状工具による細蓮弁文が施されている。27は、外面にヘラ状工具による間隔の広い蓮弁文が施されている。28から35は碗の底部破片である。28は、軸が高台部豊付けを乗り越え内面まで施釉され、外底部は露胎である。高台部外面に浅い一本の沈線がある。29は、底部破片で外底部は露胎である。高台は外面を斜めに削り豊付けを狭くしてお露胎で、内外面に貫入がはいる。30は、底部破片で外底は露胎。高台外面を斜めに削る。貫入はない。31は、碗の底部破片である。外底は露胎で軸は豊付けを乗り越えて高台内面まで施釉されている。器壁が厚く内外面に薄い貫入がはいる。32は、底部破片で外底部及び豊付けは露胎で、軸は高台内面まで施釉される。内外面に密な貫入がはいる。33は、底部破片で高台は欠損している。外底は輪状に軸を搔きとり内面に貫入がはいり、器壁が厚い。34は、軸が豊付けを乗り越え高台内面まで施釉され、外底部は露胎である。内外面共に密な貫入がはいる。35は、底部破片で高台部が破損しているが、内外面共に施釉される。高台部は露胎である。胎土に醸化と還元の状態が見られる。

36から42までは青磁の皿である。36は、小振りの皿で体部は内窓気味に立ち上がり口縁部は外反しない。37は、体部が内窓気味に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面下端に丸ノミ状工具による蓮弁状の文様が施される。38は、口縁部が外反する皿で、片切彫りの蓮弁文が施されている。39から42までは青磁接花皿である。39は、底部破片で見込の軸を輪状に搔きとる。高台外面まで施釉され外底部は露胎で、内外面共に貫入がはいる。40は、外底部が露胎である。41は、口縁部破片で、内面に拂描きで波状の文様が描かれる。内外面共に貫入がはいる。42の口縁端部は接花状に刻んであり内面にヘラ描きによる沈線を持つ。

47は青磁の香炉で、口縁端部は内側にやや肥厚し、軸は外面と口縁部の内面に施釉される。

3) 青花

43は、外面上部に青花纏枝蓮紋が施され、内面口縁部に界線。口縁は外反する。44は、外面に青花纏枝蓮紋が施されている。内面にも施文の一部が認められる。貫入はない。

4) 白磁

45は、高台部がアーチ状を呈し、軸は豊付け及び底部外面まで施釉される。

5) 濑戸・美濃系陶器

46は、灰釉折縁皿の口縁部破片であるが、口縁部で屈曲し大きく外反する。

6) 備前焼

48は壺で、口縁部は上方に立ち上がり小玉縁を呈する。54は壺で、口縁部は橢円形を呈し、折り曲げて玉縁内外面共ロクロナデ調整である。

49~53、55~59は擂鉢である。49は、体部がほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。50は、7本単位の条線が下から上に施され、底部は未調整である。51~53は、口縁部が拡張されほぼ直立して上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面共にロクロナデ。55・57は、体部が直線的に立ち上がり口縁部は内傾するものでやや古い様相を持つものである。56・58は、体部が外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は拡張され上方に直立して立ち上がる。内外面ロクロナデ調整である。57は、体部がほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し

端部は緩く内傾する。59は、体部が直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。

7) 石製品

砥石片が10点出土しているが、実測可能なものは61の1点のみである。上端部を欠損しているが、断面方形形状を呈し上面と両側面を使用しており砂岩製である。残存長8.0cm、幅5.2cm、厚さ2.9cm、重量202gである。

8) 金属製品

金属製品は50片出土しているが、古銭以外実測可能なものは少ない。62は、鉄鍋で口縁部の一部と考えられる。体部から直線的に外上方に立ち上がり、口縁部が肥厚している。残存高が、4.2cmを計る。63・64は釘類で、63は、断面が円形で下端部が曲がっている。全長4.0cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、重量3gである。64は下端部が欠損している。断面方形形状で、全長5.6cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm、重量10gである。65は不明鉄製品で、全長7.1cm、幅0.9cm、厚さ0.9cm、重量29gである。

波来銭は、宋から明の時代にかけての太平通宝(976)、元豐通宝(1078)、洪武通宝(1368)、永樂通宝(1408)が出土しており、日本の古銭として寛永通宝が1枚出土している。尚詳細は古銭計測表を参照願いたい。

9) 近世陶磁器

近世陶磁器は、肥前産・瀬戸産の白磁紅皿・碗類と備前産の擂鉢類が出土している。60は、備前産の近世擂鉢で口縁部が拡張され外面に2条の凹線と体部内面には全面に荒い条線が施される。66・67は肥前産の紅皿である。外面は型押しによる放射状文で、白湯色の釉が高台部を除いて施される。68は、肥前産の染付と考えられるが貿易陶磁の可能性もある。全面に釉が施され、見込みの文様は不明である。高台外面に2条の界線が施され、豊付けのみ無釉である。69・70・72は、肥前産の碗で腰部は丸く体部は直線的に立ち上がるタイプである。69は外面に網目文、70は草花文が描かれる。72は、見込み輪状に削られ見込み中心に五弁花の崩れがスタンプされる。71は瀬戸産の陶胎染付の碗で、広東形のタイプで体部は直線的に立ち上がる。(松田)



Fig. 37 古銭拓本（実寸大）

Tab. 2 出土遺物観察表1

排列番号	出土遺物 出土面	出土地点	種別	器種	法量			等級 (形態・手法等)	色調		
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		内面	外面	底面
					(17.1)	(7.5)	(11.2)		2.5YR4/3 に赤い赤褐	2.5YR5/4 に赤い赤褐	36/1 灰
1	SB4	N-10 (P中)	縫前	縫跡	(17.1)	(7.5)	(11.2)	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縫部は拡張され内側に立ち上がる。底部は6本単位で下から上へ、外側面共にクロナード。	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白
2	堅柄1	J-6	白磁	皿	(8.8)	(1.8)	—	体部は内曲して外上方に立ち上がり口縫でおさまる。外側部下部まで輪郭がかかる。	7.5Y4/3 底セリーブ	7.5Y4/3 底セリーブ	10YR7/1 灰白
7	堅柄2	J-6	青磁	碗	—	(2.6)	(4.7)	高台は削り出しで内外面底共に輪軸し、外底は輪軸に釉を接さる。見凹に印花文。	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰
8	堅柄3	M-5	青磁	縫跡	—	(6.6)	(13.2)	体部はほぼ直線的に立ち上がる。7本単位の条線。底部外側は未調整。	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙
9	隼G2	L-16	土師質 土器	皿	(7.2)	1.4	(4.0)	体部は内曲して外上方に立ち上がり底部回転系切り。掌耗が著しい。	5YR5/3 に赤い赤褐	5YR6/4 に赤い棕	7.5YR5/1 鵝灰
10	隼G2	L-16	縫前	縫跡	(30.7)	(6.6)	—	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縫部はやや厚肥し縫泄は確く内側する。内面ヨナギ。	10YR5/3 に赤い赤褐	10YR5/3 に赤い赤褐	10YR5/3 に赤い赤褐
11	隼G2	K-16	縫前	縫跡	(34.6)	(7.0)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縫部は拡張され起きる。底部外側に重ね焼きによる色調変化が認められる。条線は6本単位。	10YR5/3 に赤い赤褐	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐
12	Pit 1	H-11	白磁	皿	(8.5)	2.3	4.0	高台部がアーチ状を呈し。体部は内曲しておさまる。全面に施釉され、見凹に目跡。	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄
13	Pit 3	I-10	透世唐津	皿	(12.0)	(2.9)	—	体部は内曲気味に外上方に立ち上がる。底部は丸くおさめる。見凹に目跡。	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	10YR7/2 灰白
14	Pit 4	N-9	土師質 土器	皿	(11.0)	(1.5)	—	体部は内曲気味に外上方に立ち上がる。磨滅が著しい。	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白
15	Pit 2	I-10	青磁	碗	—	(2.2)	4.4	輪は唇付けを乗り越えて高台内面まで施釉される。外底部は露胎である。	9GY6/1 オリーブ灰	9GY6/1 オリーブ灰	5Y7/1 灰白
16	曲輪2	N-10	土師質 土器	小皿	—	(1.0)	3.1	磨滅が著しい。	7.5Y7/4 に赤い棕	7.5Y7/4 に赤い棕	7.5Y7/4 に赤い棕
17	—	—	土師質 土器	小皿	—	(1.6)	4.5	底底部磨滅が著しい。	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄
18	—	ATR	土師質 土器	小皿	—	(1.1)	(5.0)	底部回転系切り。摩耗が著しい。	2.5YR6/6 棕	2.5YR6/6 棕	2.5YR6/6 棕
19	西斜面	O-11	土師質 土器	皿	—	(1.7)	5.0	体部は内曲して外上方に立ち上がる。底部は回転系切り。磨滅が著しい。	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙
20	—	堆土	土師質 土器	皿	—	(0.85)	(5.0)	底底部磨滅が著しい。	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄
21	西斜面	R-7	土師質 土器	皿	—	(0.95)	4.5	底部回転系切り。磨滅が著しい。	5YR6/6 棕	5YR6/6 棕	5YR6/6 棕
22	西斜面	L-15	青磁	碗	—	(5.0)	—	体部外側にヘラ状工具による墨弁文と墨文帯が施される。内外面共に貫入り。	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	10YR7/2 に赤い赤褐

() は復元値又は残存値

Tab. 3 出土遺物観察表2

件名番号	出土遺物 出土前編	出土土地点	種別	器種	法量			特徴 (形態・手法等)	色調		
					口徑 (cm)	深高 (cm)	底径 (cm)		内面	外面	裏面
23	東斜面	O-6	青磁	碗	(12.4)	(2.2)	—	口縁部破片で外面に細蓮弁文が、丸ノミ状工具で施されている。貫入はない。	25GY6/1 オリーブ灰	25GY6/1 オリーブ灰	75Y7/1 灰白
24	曲輪2	L-9	青磁	碗	(13.8)	(2.7)	—	口縁部破片で、外面に纏巻きの磁蓮弁文が描かれる。山形の明先を持つ。	5Y5/2 灰オリーブ	3Y3/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白
25	—	—	青磁	碗	—	(3.1)	—	体部外面にヘラ状工具による細蓮弁文が施される。内外面共に貫入あり。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	75Y8/1 灰白
26	東斜面	H-8	青磁	碗	—	(2.7)	—	体部外側にヘラ状工具による細蓮弁文が施され、内面にヘラで削ったような深い沈凹部を持つ。	5Y5/3 灰オリーブ	3Y3/3 灰オリーブ	5Y7/1 灰白
27	—	排水中	青磁	碗	(13.65)	(4.2)	—	外面に丸ノミ状工具による開闊の広い磁蓮弁文が施されている。内面の文様は不明。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	25Y8/2 灰白
28	東斜面	H-6	青磁	碗	—	(3.0)	(5.0)	碗は高台部胥付を乗り越え内面まで施釉される。外底部は露胎である。高台部外面に浅い一本の沈凹がある。	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y4/2 灰オリーブ	75Y8/1 灰白
29	曲輪2	J-8	青磁	碗	—	(2.2)	(5.0)	底部破片で外底部は露胎である。高台は外周に鋸刃型の胥付けで抜くしており露胎である。内外面に貫入がいる。	25GY6/1 オリーブ灰	25GY6/1 オリーブ灰	75Y6/1 灰
30	集石	L-16	青磁	碗	—	(2.55)	4.6	底部破片で外底は露胎。高台外周を鋸めに削る。貫入はない。	7.5GY6/1 緑灰	7.5GY6/1 緑灰	10Y7/1 灰白
31	—	ATR	青磁	碗	—	(2.55)	(4.7)	碗の底部破片である。外底は露胎で輪は胥付けを乗り越えて高台前面まで施釉されている。器壁が厚く内外面に深い貫入がある。	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	5Y7/1 灰白
32	曲輪4	N-6	青磁	碗	—	(2.9)	4.8	底部破片で外底部及び胥付けは露胎である。碗は高台内側まで施釉される。外面上に深い貫入がいる。	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/1 オリーブ灰
33	曲輪1a	V-9	青磁	碗	—	(2.3)	—	底部破片で高台は欠損している。外底は輪状の輪を残さない。内面に貫入がない。器壁が厚く胥付けを乗り越え高台内面まで施釉される。外底部は露胎である。内外面共に深い貫入がいる。	5GY5/1 オリーブ灰	5GY5/1 オリーブ灰	75Y7/1 灰白
34	東斜面	O-6	青磁	碗	—	(3.3)	5.6	碗は胥付けを乗り越え高台内面まで施釉される。外底部は露胎である。内外面共に深い貫入がいる。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	25Y7/1 灰白
35	*	H-4	青磁	碗	—	(2.8)	—	底部破片で高台部が破損しているが、内外面共に施釉される。高台部は露胎である。器壁に擦化や泥化の状態が見られる。	2.5Y6/3 にぼい黄	2.5Y6/3 にぼい黄	25Y6/1 黄灰
36	—	ATR	青磁	皿	(9.0)	(2.5)	—	小振りの皿で底部は欠損している。器壁は内外気泡により上がり、口縁部は外反しない。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	10Y7/1 灰白
37	—	排水中	青磁	皿	(9.55)	(3.05)	—	体部は内外気泡に外方に立ち上がり、口縁部にいたる。罐部は丸くおさまる。外前口端に丸ノミ状工具による細蓮弁文が施される。	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	10Y7/1 灰白
38	曲輪4	N-6	青磁	皿	(12.6)	(2.5)	—	口縁部が外反する皿で、外面に山形の明先を持つ片切形の蓮弁文が施されている。	7.5GY6/1 緑灰	7.5GY6/1 緑灰	75Y8/1 灰白
39	*	K-6	青磁	皿	—	(2.8)	(4.2)	底部破片で見ぬ輪を輪状に残す。高台前面まで施釉され外底部は露胎である。内外面共に貫入がいる。	5Y4/2 灰オリーブ	5Y4/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白
40	東斜面	E-11	青磁	皿	—	(1.2)	(4.65)	割り出し高台で施釉。外底部は露胎である。	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y5/2 灰オリーブ	10Y7/1 灰白

()は復元品又は残存品

Tab. 4 出土遺物観察表3

排列番号	出土遺物 出土面	出土地点	種別	器種	法量			等級 (形態・手法等)	色調			
					1口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		内面	外側	底面	
41	曲輪4	M-6	青磁	皿	(9.3)	(1.85)	—	模花組口縁部破片で、内面に彫刻で波状の文様が描かれる。内外両面に貫入がある。	7.5Y5/2 灰オーラープ	7.5Y5/2 灰オーラープ	5Y6/1 灰	
42	*	K-6	青磁	皿	(12.4)	(2.0)	—	模花組口縁部破片で、盤部は模花状に刻んであり内面にヘラ彫きによる沈線を好み。	5Y5/2 灰オーラープ	5Y5/2 灰オーラープ	5Y7/1 灰白	
43	—	ATR	染付	皿	(12.0)	(1.8)	—	外面上部に青花繪枝葉紋が施され、内面口縁部に白反織入。口縁は外反する。	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	
44	西斜面	G-14	染付	碗	—	(3.45)	—	外面に青花繪枝葉紋が施されている。内面にも描文の一部が認められる。貫入はない。	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	
45	東斜面	A-18	白磁	皿	—	(1.6)	3.6	高台部がアーチ状を呈し、脚は置付け及び底部外周まで施釉される。	10YR5/3 に5Y1黄褐色	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	
46	曲輪2	M-10	瀬戸美濃	折縁皿	(13.8)	(1.8)	—	灰釉折縁皿。	5Y6/3 オーラープ黄	5Y6/3 オーラープ黄	10YR7/3 に5Y1黄褐色	
47	曲輪2	P-10	青磁	香炉	(10.4)	(3.6)	—	口縁部は内側にやや肥厚し、脚は外面と口縁部の内側に施釉される。	5GY7/1 灰オーラープ灰	5GY7/1 灰オーラープ灰	2.5Y7/1 灰白	
48	—	ATR	備前	壺	(10.0)	(3.6)	—	口縁部上方に立ち上がり小玉縁を呈する。	10YR5/1 灰灰	2.5YR4/3 に5Y1赤褐	10YR5/1 灰灰	
49	曲輪4	ATR	備前	模彷	(21.6)	(5.3)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し盤部は緩く内側する。内外両面コロナデ。	10YR4/2 灰黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	2.5YR5/4 に5Y1赤褐色	
50	曲輪4	M-6	備前	模彷	—	(7.3)	(13.4)	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。7本単位の条縞が下から上に施され、底部は未施調。	7.5Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	
51	—	ATR	備前	模彷	—	(5.5)	—	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は膨張されは直立して上方に立ち上がる。	5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐	
52	曲輪4	I-7	備前	模彷	(20.2)	(6.3)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は膨張され上方に直立して立ち上がる。盤部は丸くおさめる。内外両面にコロナデ。	2.5YR4/2 灰赤	2.5YR4/2 灰赤	2.5YR4/2 灰赤	
53	東斜面	K-15	備前	模彷	(30.0)	(6.7)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は膨張され。上方に直立して立ち上がる。盤部は丸くおさめる。内外両面にコロナデ。	2.5YR4/2 灰赤	2.5YR4/2 灰赤	2.5YR4/2 灰赤	
54	—	ATR	備前	壺	(36.0)	(6.1)	—	口縁部は桃円形を呈し、折り上げて玉縁を呈し、内外両面コロナデ。	5YR3/3 暗赤褐色	5YR3/3 暗赤褐色	2.5YR5/1 赤灰	
55	—	ATR	備前	模彷	—	(6.0)	—	体部は直線的に立ち上がり口縁部は内側する。内外両面コロナデ。	5YR6/4 に5Y1棕	5YR6/4 に5Y1棕	—	
56	曲輪4	M-6	備前	模彷	(27.0)	(5.3)	—	体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は膨張され上方に直立して立ち上がる。内外両面コロナデ。条縞は6本単位で下から上へ。	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/1 灰灰	—	
57	—	ATR	備前	模彷	(25.4)	(7.0)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し盤部は緩く内側する。内外両面コロナデ。	10YR5/3 に5Y1黄褐色	10YR5/3 に5Y1黄褐色	10YR5/3 に5Y1黄褐色	
58	—	拂土	備前	模彷	(30.0)	(7.9)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は膨張され上方に直立して立ち上がる。盤部は丸くおさめる。内外両面ともコロナデ。	10Y4/2 灰赤	10Y4/2 灰赤	—	

() は復元値又は残存値

Tab. 5 出土遺物観察表4

排図番号	出土遺物 出土面輪	出土地点	種別	器種	法量			特徴 (形態・手法等)	色調		
					外径 (cm)	厚高 (cm)	底径 (cm)		内面	外面	裏面
59	—	耕土	備前	模鉢	(29.2)	(7.6)	—	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し、底部は極く内傾する。内外面ヨコナギ。	10YR5/4 に赤い質感	10YR5/4 に赤い質感	10YR5/4 に赤い質感
60	曲輪1b	T-9	備前	模鉢	(30.3)	(5.8)	—	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は上方に弧張され内外面に2本の凹窪がある。内外面ヨコナギ。	5YR4/2 灰白	5YR3/2 暗赤褐	10R5/6 赤
66	曲輪2	K-9	近世磁器	紅皿	(4.5)	(2.1)	(1.2)	外面押押しの放射線状の支柱と。白褐色の釉が高台部を突いて施される。	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白
67	堅桶3	L-6	近世磁器	紅皿	(4.5)	(1.2)	(1.6)	外面押押しの放射線状の支柱と。白褐色の釉が高台部を突いて施される。	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白
68	西鉢面	J-7	近世磁器	小皿	—	(1.4)	(4.4)	全面に釉が施され、豊付けのみ露胎である。高台外周に一条の帯緋。見込文様不明。	3GYR8/1 灰白	3GYR8/1 灰白	3GYR8/1 灰白
69	西鉢面	K-7	近世染付	碗	—	(3.4)	(4.1)	腰が丸く、体部は内湾して立ち上がる形態である。外周に草文が染めつけられる。高台は比較的高い。	3GY8/1 灰白	3GY8/1 灰白	10YR6/2 灰青黒
70	曲輪2	R-9	近世染付	碗	(10.8)	6.5	(6.2)	腰が丸く、体部は内湾して立ち上がる形態である。外周に草文が染めつけられる。高台は比較的高い。	3GY8/1 灰白	3GY8/1 灰白	N8/1 灰白
71	堅桶3	L-6	近世磁 戸美濃系	碗	(12.0)	5.85	(5.4)	高台部から直線的に立ち上がる形態で、広東輪タイプである。	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	10YR7/2 灰白
72	堅切4	E-14	近世磁器	碗	—	(3.1)	(4.4)	高い脚り出し高台で、広く内湾して立ち上がる形態をする。見込みは、輪状に縦きとられ見込み五舟花のスタンプが施される。	N7/1 灰白	2.5GY6/1 オリーブ灰	N7/1 灰白

() は復元又は残存値

Tab. 6 出土古銭計測表

排図番号	銭種	初鋲年次		銭径(mm)		両目(g)	出土地点	
		王朝名	西暦	外径	内径		グリッド	層
73	太平通宝	宋	976	24	20	1.7	K5	II
74	元豐通宝	宋	1078	23	19	2.1	M6	II
75	元豐通宝	宋	1078	23	19	1.6	N6	II
76	洪武通宝	明	1368	24	20	1.5	N9	柱穴
77	永樂通宝	明	1408	25	21	2.4	N5	I
78	寛永通宝	日本	1636	21	19	1.3	G11	I

第5章 考察

第1節 四国西南部の中世城郭

高知県の中村市や幡多郡、愛媛県では宇和郡を中心とする四国西南地域は、蓬隨地ながら九州との重要な流通拠点として、一条・西園寺氏の荘園として発展してきた。一条氏は、中村市街地の小森山周辺に居館を構え、為松城跡を中心とした城跡を手中におさめ、西園寺氏は下松葉・永長周辺と考えられる地点に居館を構築し、その東背後の丘陵上に構築された松葉城跡を拠点として活動している。このように四国西南部を二分する形で中村・宇和に拠点を構え公家から戦国大名として勢力をもつたこれら一族がいる。この四国西南部における2大勢力は、長宗我部氏が土佐統一や四国制覇を成し遂げるまで勢力をもっている。ここでは、愛媛県側で、三瓶町・宇和町・野村町・城川町の一部から北・南宇和郡・宇和島市を中心とした城跡、さらに高知県側では、幡多郡や中村市・宿毛市・土佐清水市を中心とした城跡の立地及び境目の城としての特色ある城跡の概要を俯瞰していくこととする。

四国西南部で現在確認できている中世城郭分布図を作成してみた。さらに、各城跡の立地や戦国期の勢力範囲を含め、AからIまでの9グループに大きく地域分けしてみた。愛媛県側では、西園寺氏の居城した松葉城跡や黒瀬城跡をはじめ明浜町・吉田町・宇和島市にかけて海岸線に構築された城郭の一群をAグループとしてみた。このAグループは、宇和町全域の城跡ドットを落とすことができなかつたが、宇和町全体で91城跡確認されており西園寺氏が拠点とした地域にふさわしい城郭数である。またこのグループの特徴として明浜町や吉田町にかけての海岸線に多く城郭が構築されている。これらは在地土豪の小規模城郭と考えられるが、背後には西園寺氏の支配下におかれ瀬戸内海を通じて視野に入れた広域支配の重要な拠点地域であった可能性がある。

Bグループは四万十川上流域の愛媛県側にあたる、三間町・広見町・松野町にかけて所在する城郭である。この地域は、三間川・広見川が広見町内で合流し吉野川となり、四万十川に流れ込んでおりこの流域に多く城郭が構築されている。土居清良が居城した大森城跡をはじめ、境目の城として重要な河後森城跡がある。海岸線を重視したAグループとは異なり、河川流通を意識したように河川流域に城郭が構築されている特徴がある。西園寺氏と一条氏が抗争を繰り広げた地域のひとつでもあり、一条氏が四万十川を廻り攻めてくる流域沿いに構築された城が多いと考えられる。ここ数年で河後森城跡の発掘調査が進んできており、出土遺物も15~16世紀の貿易陶磁が多く出土しており機能した時期が想定できる。

Cグループは、Aグループと同様海岸線を重視した城の配置をしている。中でも津島町内は、天ヶ森城をはじめとする土豪の越智氏の支配下にある城郭が多いが、岩松川流域に城郭が集中している。内海村の由良半島の良港をもった集落に所在する串ヶ岡城跡などは、海岸線の見張台的な機能を持った小規模城郭である。これらと同じ機能を有したと考えられる小規模な城郭が海岸線に数城跡みられる。

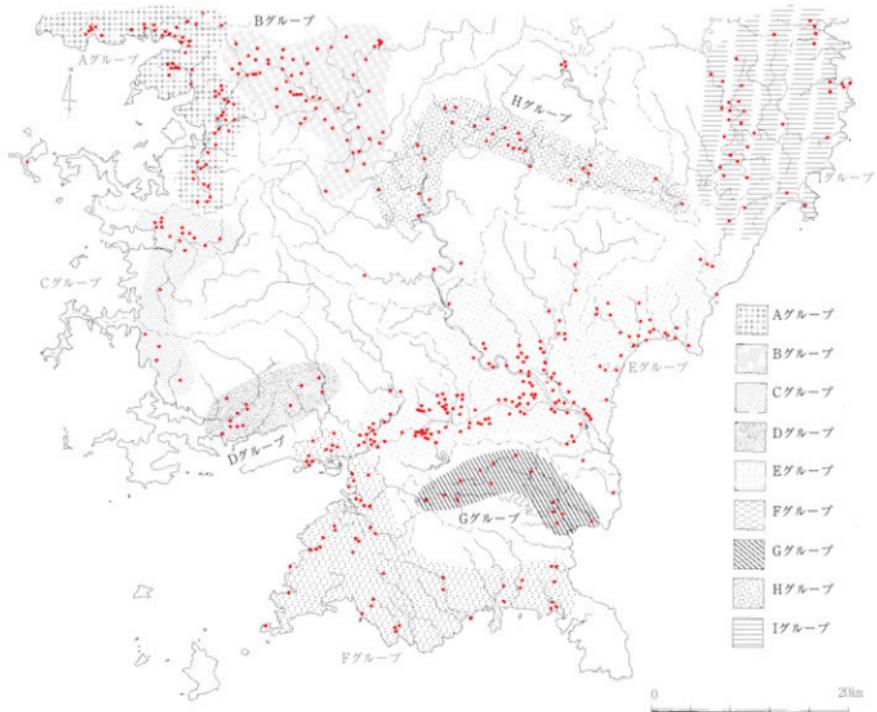


Fig. 38 四国西南部の中世城郭地域別分布図

Dグループは、城辺町・御荘町・一本松町に所在する城郭である。この地域に構築されている城郭は、在地土豪の勘修寺氏により築城された城が多い。勘修寺氏の居城である常盤城跡などは、城辺町の中心部に構築されており、僧都川と蓮乗寺川に挟まれ両河川を堀としている。この僧都川を上流に遡る地点に、川を挟んで丘陵先端部に諸城跡が構築されている。B・C・Dグループは、西園寺氏と一条氏の勢力争いに巻き込まれた地域であり、勘修寺氏などは天正3年の四万十川合戦にも参戦しており、農後の大友氏との関連も見逃すことはできない。

EグループからIグループは、高知県側で一条氏の勢力範囲である。まず一条氏が居館を構えた中村市内の城跡をみると、四万十川を中心にその支流である中筋川、後川流域に約70城跡確認されている。流域ごとにみると、四万十川流域は26城跡、中筋川流域は23城跡、後川流域は21城跡となっている。このEグループとした地域は、これら四万十川流域と中村市に隣接する大方町・佐賀町の諸城跡を含めている。ここでの大きな特徴は、一条氏が拠点とした四万十川流域を含め各河川沿い

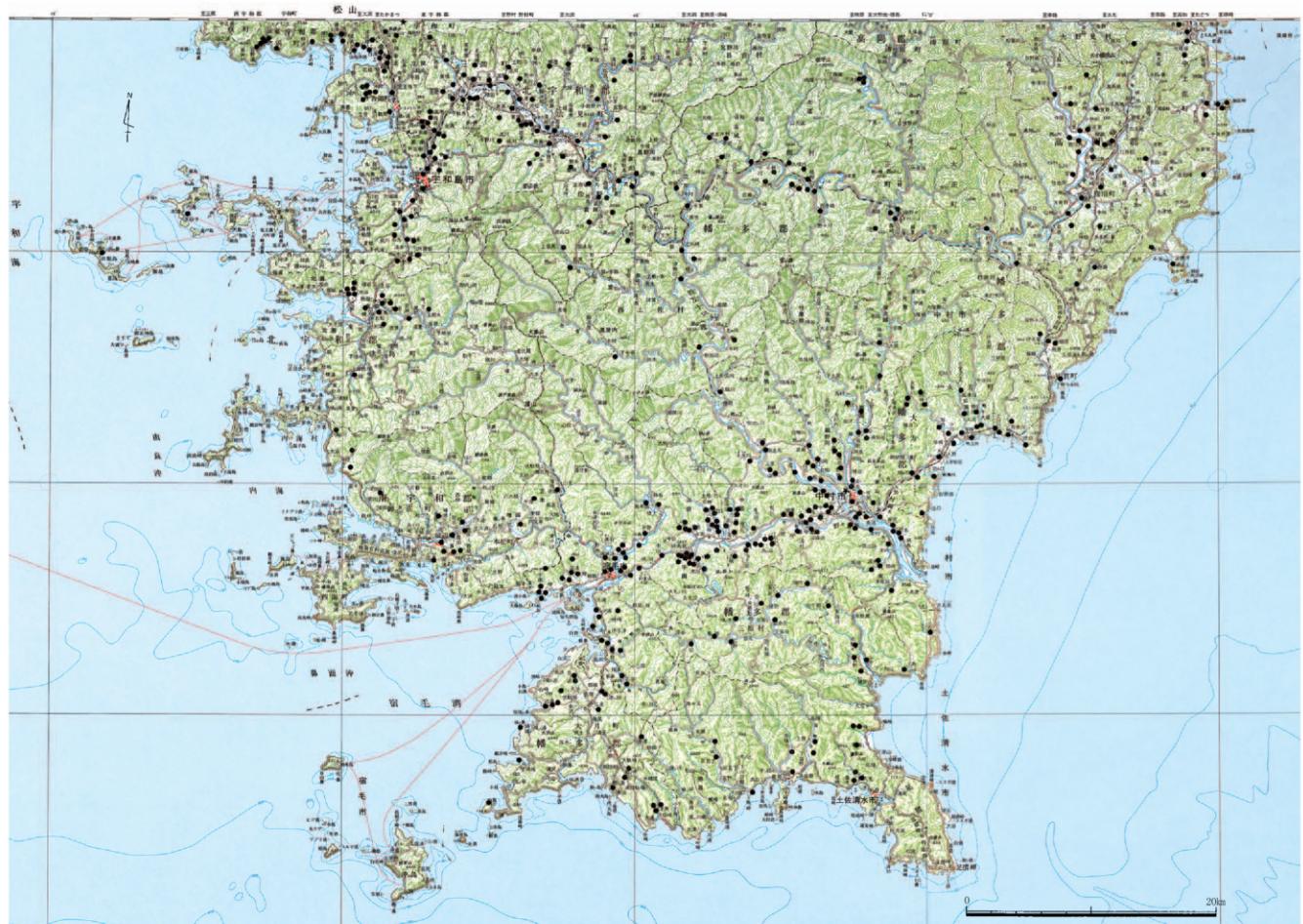


Fig. 39 四国西南部の中世城郭分布図

に城が構築されている点である。中村市に隣接する宿毛市分を含めると中筋川流域が最も集中して城郭が構築されていることがわかる。中村市をはじめ大方町で城跡の発掘調査が多く実施されている。中村市では、中村城跡・栗本城跡・扇城跡・塩塚城跡・チシ古城跡・ハナノシロ城跡・江ノ古城跡等が調査されている。大方町では、曾我城跡や今回の西本城跡が調査されている。

Fグループは、宿毛市分の一部と、大月町・土佐清水市の一部を含めた。ここで特徴は、地形的なものに制約されるが、小河川の上流地域と海岸線に城郭が分布している点である。大月町柏島に構築されている柏島城跡などは、離島の沖ノ島との関連で農後水道を往来する舟の見張り的な機能を有している城郭とも考えられる。さらに海岸線の小集落を守る役割も果たしていたのであろう。この地域の城郭分布を見ると、大方町内の城跡分布と類似していることがわかる。

Gグループは、土佐清水市の一部と三原村に所在するグループとした。土佐清水市の下ノ加江地域は、下ノ加江川が流れしておりこの河川沿いに城郭が構築されている。さらに三原村に入ると長谷川に沿った狭い平野部に上長谷城跡を中心に数城構築されている。平野部で上長谷遺跡が調査されており15世紀から16世紀にかけての貿易陶磁が多く出土している。これらの搬入経路は前述した下ノ加江川を通り搬入されていることが想定され、上流の急流部分は馬借の利用も考えられるが頻繁に河川が利用され、その流域に城跡が構築されている。

Hグループは、西土佐村から十和村・大正町にかけて四万十川中流域に分布する城郭である。もちろん一条氏の支配下に置かれた地小土豪の構築した城郭群である。この地域は幡多地方の中でも山岳地域で四万十川沿いに集落が開けている。地形的な制約によるものと考えられるが、集落の背後に構築される城跡も存在するが、四万十川沿いに構築されている城跡が多い。十和村奈路遺跡では、中世後期の集落跡が調査されており16世紀前半に編年される貿易陶磁の青磁や青花が出土している。中村から四万十川沿いに搬入されたと考えられ、この地域にも15世紀後半から16世紀前半頃までには貿易陶磁を持ち得ることが出来る勢力が存在したことになる。

Iグループは、四万十川中流域から上流域の窪川町や久礼城跡が構築されている中土佐町の範囲を設定した。窪川町では、仁井田五人衆の一人である窪川氏の居城である茂串城跡が市街地の南の標高372mの丘陵上に構築されている。窪川町内の諸城跡は、縄張り調査が進んでおらず詳細な内容は不明である。その中で窪川城跡は、縄張り調査が行われており土塁跡や堅堀・堀切等が確認されている。中でも特徴的な遺構は、南から西側斜面にかけて14条の畝状堅堀群が確認されていることである。この窪川城跡は、この四万十川中・上流域の中でも拠点的な城郭と考えられる。その他は、Hグループと同様小規模な城郭が流域沿いに構築されている。

中土佐町に所在する城跡群は、佐竹氏の居城久礼城跡がこの地域の拠点的城郭である。詰の部分の発掘調査が実施されており礎石建物跡が検出されている。その他の城跡は、上ノ加江の集落や海岸沿いに小規模な城郭が構築されている。

大きく西南四国の中世城郭をAからIまでグレーピングし、各地の城郭をおおまかに俯瞰してみたが城郭が多く構築されているその中心は、高知県側では中村市を中心とした四万十川流域と、愛媛県側では宇和町をはじめ瀬戸内の海岸沿いに多く認められる。これらの分布から、現段階で四国西南部における中世城郭構築の歴史的意義を導き出すことは困難であるが、今後の展望として一条氏

と西園寺氏の動向と地域支配のあり方を模索していくことが重要と考える。さらにその方法論として発掘資料の検討のみだけでなく、縄張り調査の進展や歴史地理学・文献面での総合的な研究が望まれるところである。

第2節 大方町中世城郭の検討

大方町では、中世の城館跡が25ヶ所確認されている。第2章では、大方町という小地域での中世城郭を各流域ごとに見てきたが、そのほとんどが小規模な山城である。大規模城郭のような地域支配の核となる城を「拠点的城郭」と位置付けると、対する特徴の乏しい城郭を「小規模城郭」と捉えることができる。西本城跡をはじめ、その多くの山城が小規模城郭であることは認識されており、民衆との係わりの中で小規模城郭が構築されていった点など全国的に研究が進んでいる。町内では、25城跡について簡単な測量調査が実施されており、これらを援用し立地及び城郭の規模等の検討から大方地域に構築されている中世城郭を各流域ごとにみていき特徴を抽出していきたい。

伊田川流域は、海岸集落の東端に一城のみ構築されている。もちろん入野郷の最東端に位置しており海岸路と山手路の合流地点で東西の交通の要所に位置している。縄張りは、詰と二ノ段の平坦部2ヶ所と詰の西側に連続堀切4条が構築されている。その他の遺構は確認されていないが、連続堀切が4条確認されていることは重要である。立地も海岸線に近く、陸・海・川の往来監視及び集落の守りの両機能を有している城郭であると考える。

有井川流域では、2城跡が確認されている。有井川城跡は、海岸線に近く下流に位置し、海に向かってのびる舌状の段丘上に構築されている。有井川の集落を見渡せることができる。遺構としては、詰の周りに階段状の帶曲輪と堀切1条が確認されており、遺構の残りは悪い。北有井川城跡は、1km程遡ったところに位置する。遺構としては、詰を中心南側に2ヶ所の平坦部と北側に1ヶ所の平坦部が確認でき、北側の平坦部のさらに北側に1条の堀切が構えられている。城跡からは、集落の奥の一部が望めるだけで集落を防御する役割で構築されたとは考えられない。しかし川の対岸には「土居屋敷」の地名がみられ中流域の小集落をまとめる役割を果たしていたのであろうか。

鰐川流域は、4ヶ所の城跡が確認されている。最も下流に位置する上川口城跡は、天然の良港を古代からもった地域を見下ろす丘陵に構築されており、この良港を守る機能を有していたと考えられる。遺構も詰と二ノ段を防衛するように南と北にそれぞれ堀切2条と1条を配し、西斜面には3条の堅堀を構築している。高山城跡も上川口城跡に隣接して位置し、同様な立地で同じ機能を持っていたと考えられる城跡である。詰とその西側に二ノ段の平坦部を持ち、詰の北と西側に堀切1条と2条を配する。上川口城跡と比較するとやや規模が小さい。河口から上流に1kmほど遡ると浮津城跡がありさらに遡ると鰐川城跡が構築されている。鰐川城跡は、現鰐川集落の背後の丘陵に構築されており、小集落を防衛するのみの役割を持った城と考えられる。浮津城跡は、他の3城跡と比べ標高が高く、浮津や鰐川の集落や港まで見渡せる高所に構築されている。詰と二ノ段の平坦部2ヶ所と詰の西部端には土塁が残る。堀切と堅堀が1条ずつ確認されており、詰から備前焼の破片が表採されている。こ

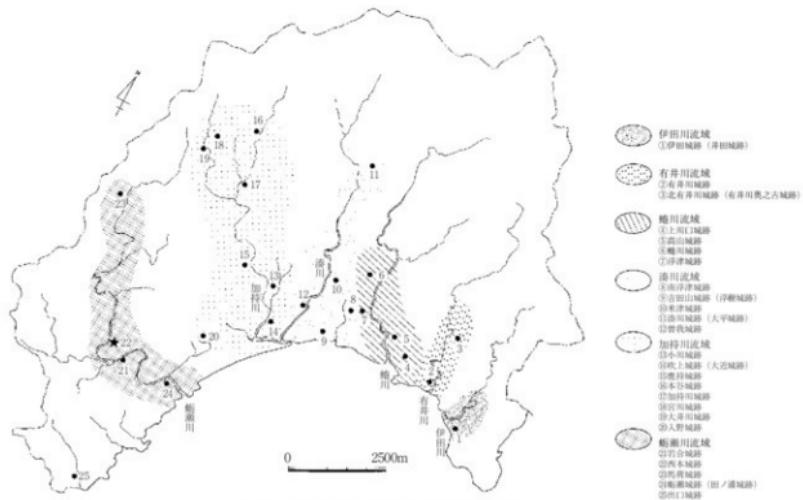


Fig. 40 大方町河川流域別中世城郭分布図

Tab. 7 大方町中世城郭観察表

地図番号	城跡名	住所	地目	流域	標高	備考
1	伊山城跡	大方町伊山字六古城	山林、墓地	伊山川流域	40m (下流) (300)	認定1条
15	東持城跡	大方町加持川字六古城	山林	加持川流域	50m (下流) (40)	認定1条、 望塁1条
20	人野城跡	大方町人野字城山	山林、墓地	加持川流域	25m (下流) (30)	認定1条
14	伏木城跡	大方町浮磯字山田城	山林、墓地	伏木川流域	28m (下流) (33)	認定1条、 望塁1条
16	本谷城跡	大方町加持川字ケンギウ、 サンキウロ	山林	加持川流域	120m (上流) (38)	認定1条
17	加持川城跡	大方町加持川字山山、 北沢山、東沢山	山林	加持川流域	90 (上流) (40)	認定1条
13	小川城跡	大方町加持川字平見	山林	加持川流域	40m (下流) (30)	認定1条、土器 出土地
18	西川城跡	大方町大津字タキイ寺町	山林	加持川流域	120m (上流) (30)	認定2条
19	(未)城跡	大方町大津字城ノ谷	帶、道路	加持川流域	95m (27)	認定2条
22	西木城跡	大方町子田字ナダツ、 チラホク田	山林	瀧川流域	50m (下流) (40)	後醍醐天皇
21	若谷城跡	大方町子田ノマツツガノメゾ	山林	瀧川流域	20m (下流) (20)	望塁1条、 二・三ノ段、 認定4条、 望塁1条
24	御前城跡	大方町子田字子城、 古城東半・古城西半	山林	御前川流域	90m (下流) (30)	二・四ノ段
23	西所城跡	大方町西所字城山	山林	御前川流域	100m (上流) (30)	二・四ノ段、 認定3条、 望塁1条
10	本江川(瀧川) 口川路	大方町口川字山山	山林	瀧川流域	80m (下流) (20)	一・四ノ段、 認定3条
8	南津津城跡	大方町字御子小城山	山林	瀧川流域	25m (下流) (45)	一・四ノ段
12	朝我城跡	大方町字御子町ノ谷	山林	瀧川流域	10m (下流) (30)	一・四ノ段、 認定1条
9	河静城跡(古 田山城跡)	大方町河静字田城	带、荒廃地	瀧川流域	18m (下流) (8)	二・四ノ段、 認定1条(海上 に残された空地の城)
11	大木(瀧川)城跡	大方町奥瀧川字地蔵ノ上 (瀧川)城跡	山林	瀧川流域	90m (上流) (40)	二・四ノ段、 認定2条
3	森井井川	大方町森井川字シロク尼、 朝我	森井川流域	50m (下流) (20)	一・四ノ段、 認定1条	
2	有井川城跡	大方町有井川字キノ瀬	山林	有井川流域	70m (下流) (40)	一・四ノ段
4	上川口城跡	大方町上川口字野地山	山林	鳴川流域	65m (下流) (45)	二・四ノ段、 認定2条、 望塁2条
5	高木城跡	大方町上川口字山	山林	鳴川流域	65m (下流) (45)	二・四ノ段、 認定3条
7	清津城跡	大方町浮磯字城山、上城山	山林	鳴川流域	70m (下流) (40)	二・四ノ段、 認定1条
6	鳴川城跡	大方町鳴川字8009-1・5、 11-13	山林	鳴川流域	70m (下流) (40)	二・四ノ段、 認定1条
25	江口城跡	大方町江口字寺山、寺山	山林	瀧川流域	25m (下流) (20)	二・三・四ノ段、 認定2条

の城跡だけ表探し物を見るとやや古くなる可能性がある。

湊川流域は、5城跡確認されている。下流域では、発掘調査された曾我城跡や対岸の丘陵にある南浮津城跡がある。さらに海岸に近い吉田山城跡（浮鞭城跡）がある。曾我城跡は詰の平坦部から丘陵先端部にかけて段状の平坦部を造りだしており、詰は1条の堀切や堅堀で防御されている。出土遺物から15世紀後半から16世紀前半に機能した城郭であることがわかっている。さらに対岸に位置する南浮津城跡も堀切や堅堀は確認できていないが、平坦部の造りだしは曾我城跡と類似している。浮鞭城跡は、標高18mの低いところに構築されているが、海に突出した城で東・南・西側は断崖と

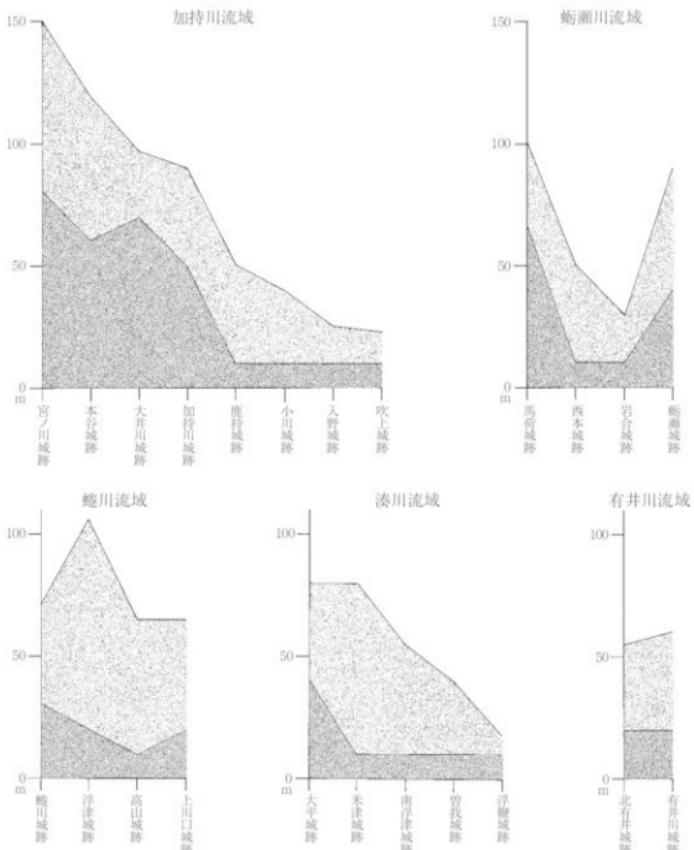


Fig. 41 大方町中世城郭流域別比高差グラフ

なっている。さらに詰の北側は土墨と堀切で防御されている。湊川の中流に位置する米津城跡は、詰とその両端に平坦部を構成している。北側では3条の連続堀切で防御されている。町史では、南北朝期の山城とされているが、連続堀切を持つことから戦国期の城郭と考えられる。最上流域に所在する湊川城跡は、築城者が大平弾正とされており大方町内で最も古い城郭とされている。縄張りを見ると詰と見られる平坦部の東側尾根を2条の堀切で防御している。

加持川流域は、7城跡が確認されており他の流域と比べ最も多く城郭が構築されている。この下流域には大方町内で最も広い加持・入野平野をひかえている理由によるかもしれない。吹上城跡は、最下流に位置し標高25mの台地上の地形に構築されている。遺構の残存状況は悪く、現在堀切1条しか確認できない。やや川を遡ると小川城跡や加持城跡がある。両城跡は前面に加持平野を望め、重要な役割を果たした城跡と考えることができる。小川城跡の遺構は、畠地に開墾され残りが悪く、加持城跡は詰から二ノ段が残り堀切と堅堀がそれぞれ1条確認されている。上流域に構築されている本谷城跡、加持川城跡、宮川城跡、大井川城跡はいずれも小さな詰の平坦部と1条から2条の堀切で防御する遺構を残している。

今回発掘調査した西本城跡も含まれる姫瀬川流域であるが、最下流に姫瀬城跡が位置する。標高が90mと高く、北側は姫瀬川が流れ断崖となり東から南は海で要害の地に構築されている。入野平野を一望でき、姫瀬川口は船着き場であり海から姫瀬川に入る舟の監視的役割を果たしていたと想定できる。上流に遡ると岩合城跡が構築されている。対岸の西本城跡とともに入野～中村間の逢坂越の路をおさえる場所に立地している。さらに西本城跡は上田ノ口集落や中村・馬荷方面からの路もおさえる役割を果たしている。岩合城跡の遺構は、詰の平坦部と堀切3条が確認されている。最上流に馬荷城跡が構築されている。馬荷の集落及び中村からの路をおさえる役割を持っていたと考えられる。

以上各流域に構築されている城跡を簡単に俯瞰してきたが、大方町内で確認された城郭はいずれも小規模なものが多く、詰や二・三ノ段の平坦部を持ち1条から3条の堀切で防御している城跡が多く認められる。斜面部の堅堀は、調査段階で見逃している城跡があると考えられるが数城跡は、西本城跡のように堅堀を掘削していると考えられる。さらに大きな立地の特徴として、河口近くで海岸沿いに構築されている城、下流域で集落の背後に構築されている城、上流域に構築されている城と大きく3パターンに分けることができる。しかしいずれも河川の近くで常に河川を見渡すことが出来る地点に構築されていることは共通項として挙げられる。

各流域ごとに詰の標高と城跡下の集落標高の比高差をFig. 41にグラフとして示している。ここで浮津城跡や米津城跡は、比高差が大きく他の城跡と異なる数値がでている。さらに姫瀬城跡は下流域に位置していながら標高も高く比高差もある。これらのデータからなにが言えるかは、今後詳細な縄張り調査や研究が必要である。予察として許されるならば、時期的な差かあるいは城郭が構築された役割や性格の差があるとしか考えざるを得ない。

第3節 西本城跡出土遺物の検討

西本城跡から出土した遺物は、主に貿易陶磁、国産陶器、土師質土器、古銭、土錘等である。中世出土遺物の詳細点数は、Tab.8のとおりであるが、総数366点の内訳をFig. 42にグラフ示した。出土点数で大きな特徴は、貿易陶磁の青磁がその多くを占めている点である。県内で岡豊城跡をはじめ中村城跡、姫野々城跡、芳原城跡等挺点的な城郭では土師質土器が圧倒的に多数を占めている。扇城跡では土師質土器が377点で貿易陶磁が286点と土師質土器がやや多めであるが圧倒的な数値ではない。その貿易陶磁の中でも青磁がその多くを占めている。小規模城郭のハナノシロ城跡では、土師質土器が211点と全体の38%を占め貿易陶磁は106点と19%である。扇城跡と同じ傾向を窺うこ

Tab. 8 中世出土遺物出土地点表

出土遺物/出土面積 ・遺構	曲輪 1-a	曲輪 1-b	曲輪 2	曲輪 3	曲輪 4	SB	ビット群	堅壁 1	堅壁 2	堅壁 3	堅壁 4	堅壁G 2	A トレ	B トレ	東面 斜面	西面 斜面	表様	計	総数
土師質土器	2	45		7				3	2	4		4	31	1	7	1	1	108	
実測遺物		1						1				1	1			2	2	8	116
青 磁		70	6						3	1		1	8		4	2	5	100	
実測遺物	1	4	5		1			1					2		6	1	3	24	124
青 花		7							1				2						10
実測遺物												1				1	2		12
白 磁		5						1								1	1	8	
実測遺物								1	1						1		3	11	
瀬戸・美濃系陶器																		1	1
実測遺物		1																	
備 前		7						4		1		1	6		1	1		21	
実測遺物	1		3	1					1		2	6		1		2	17	38	
土 錘																		4	4
実測遺物								2	2										
金 属 製 品		21	1	3						1	1	3	2		4		5	41	
実測遺物		4		2									1		2			9	50
石 製 品		7													1		1	9	
実測遺物		1																1	10
計	3	1	173	1	26	1	3	10	10	8	1	13	59	1	27	9	20	366	366

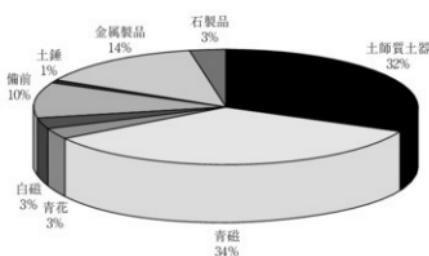


Fig. 42 中世遺物出土量グラフ

出土遺物	総数
土師質土器	116
青 磁	124
青 花	12
白 磁	11
備 前	38
土 錘	4
金 属 製 品	50
石 製 品	10
計	365
(瀬戸・美濃系陶器1点除く)	

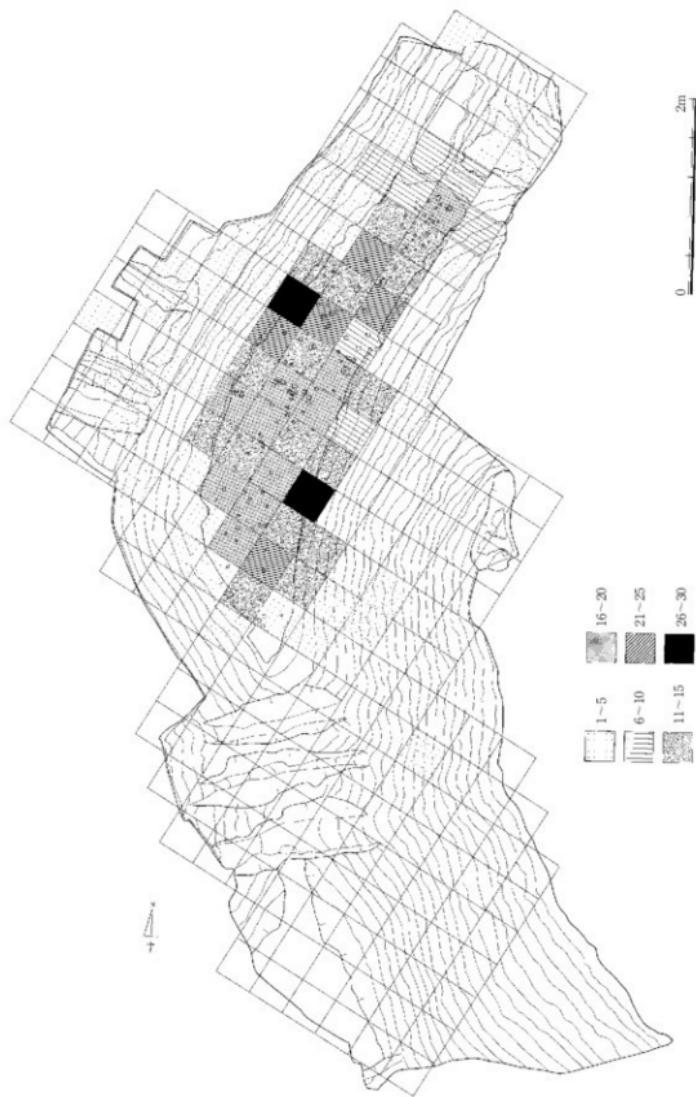


Fig. 43 西城牆遺物出土分布圖

とができる。高知県全体で現段階の調査成果から言えることは、拠点的城郭では遺物全体量の多くを土師質土器が占め、土師質土器を山城で多く使う行為が行われていることが確認できる。対照的に小規模城郭では、土師質土器片数が全体の半分以下で細片が多く拠点的城郭で使用し行われた行為は認められない。所謂山城内で「ハレ」の行為が小規模城郭では行われていないことの証明になる。さらに貿易陶磁の中で輶多地方の城郭で青磁が多く出土している点は、時期的なことや階層的な問題、さらに貿易を支えた一条氏の支配関係にも問題が波及してくるものと考える。これらのことから、出土遺物の内容で城郭の性格・時期的な特徴を掴むことがある程度可能である。ここでは時期決定に最も研究が進んでいる貿易陶磁、国産陶器を中心に抽出し、城跡の機能した時期を検討していきたい。

西本城跡は、貿易陶磁の中でも青磁類が多く、国産陶器の備前焼を見てもその特徴からある程度時期を推定することができる。出土状況もその多くは、Fig. 43で見られるように曲輪2からの出土が多い。西本城跡の出土遺物で、青磁を見るとFig. 33の22のように上田編年のC-II類で、外面雷文帯で下部には片切形の幅の広い蓮弁をもつものや、27のB-III類で片切形によって蓮弁を表現するものがある。さらに白磁を見ても、Fig. 32-12・Fig. 34-45は森田編年のD類で切り高台の皿である。これらの遺物をみると、15世紀前半から中頃までに編年されている遺物である。その他青磁類は、細蓮弁文碗で占められている。さらに青花が数点出土していることや白磁の端反り皿E類が出土していないことから、構築から使用された時期を大きく見ても15世紀中頃から16世紀前半代の約100年以内の間にある程度想定することができる。国産陶器でも、備前焼の壺や捕鉢が多く出土している。備前焼編年のIV期の製品が多く前述した時期にあてはめることができる。16世紀後半（天正年間に実施）の長宗我部地検帳をみると、小字でも残っているように「古城」と記載され既にこの時期には廃城になっているようである。遺物を見てもこの時期のものは出土しておらず、城跡の構築・使用された時期を裏打ちすることができる。

第4節 連続堀切・連続竪堀群について 一検出遺構の検討から—

堅堀を密集して斜面に築き並べ、群として面を被ってしまう遺構として畝状空堀群がある。畝状空堀群は、畝形阻塞とも連続堅堀とも呼ばれ、バラエティーに富んでいて評価が一定ではない。しかし最近では、この畝状空堀群の出現が城郭の時期決定の大きな指標となっている。全国的に確認されている遺構で、16世紀の中頃（正確には16世紀第2四半期）に出現すると認識されている。堅堀の伝統的な使い方を打ち破る手法として全国的な城に多用された遺構であるが、濃密の差はあり北九州・高知県・広島県南部・秋田県南部・新潟県などに多く認められているようである。

西本城跡では、斜面部で調査できた連続堅堀を3条検出することができ、未調査部分や崩壊部分を合わせると、5~6条の堅堀が構築されている。これらの遺構が畝状空堀群として捉えられるか今後の問題であるが、全国の研究成果をみると時期的に西本城跡が機能した最終段階に構築されたと考えることができる。今回検出した連続した堅堀は、畝状空堀群の出現期でも草創期に当てはめるこ

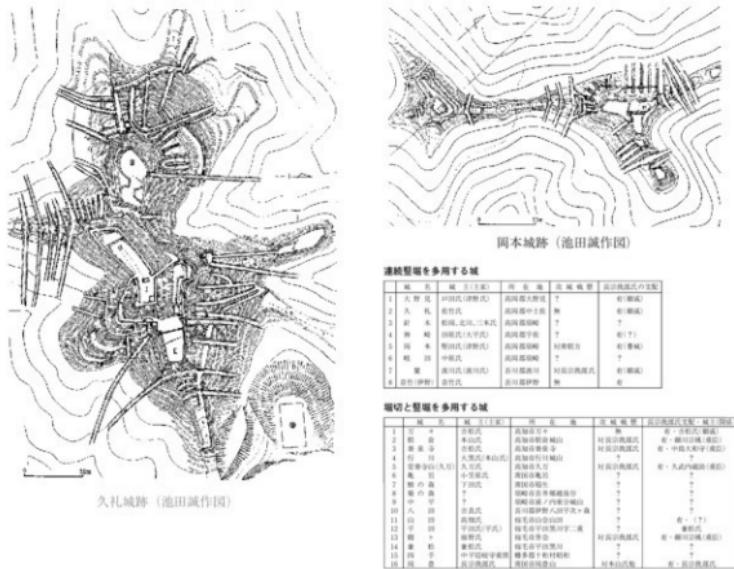


Fig. 44 連続堀切、堅堀を多用する城郭縛張り図

とができ、全国的に普及する畝状空堀群の先駆的な構築技術手法と考えられる。県内でも畝状空堀群は、岡豊城跡、吉良城跡、久礼城跡、姫野々城跡など拠点的城郭やそれ以外の音竹城跡、有岡城跡、岡本城跡などにもみられる。これら城郭に多用される城郭構築技術の解明に重要な資料を提供することができた。

尾根上の防御的役割をはたす堀切について、今回曲輪1・2の両端に3重の連続した堀切を構築していることがわかった。曲輪2の東側では、調査前では2条しか明確に確認することができなかつたが、調査の結果連続した3重の堀切であることを確認した。堀切の掘り方は、西本城跡の場合箱堀であることが確認された。堀切は防御遺構として重要であるが、立て篭の方は下の集落との通路を確保しなければならず、堀切を越えるには堀底を通るか土橋か木橋を渡る方法しかなく、今回は土橋は確認できなかつたので、木橋か堀底を通る方法をとっていたと想定される。堀切での防御及び一定の通路の確保をするため掘り方を箱堀にしたとも考えられる。

2~3重の連続した堀切・堅堀は、これまでの土佐の城郭研究で長宗我部氏系統の構築技術(Fig.44)ではないかと考えられていた。しかし西本城跡では、廃城の時期が16世紀前半頃と考えられ、この時期には、長宗我部勢力は幡多地域までおよんでいない。さらに四万十川流域の支流にも小規模城郭が構築されており、伊予側においても2重の連続堀切が認められることから、一条氏の愛媛県南予支配のための城郭造りが同じ手法で行われたとも考えられる。

今回の西本城跡の調査成果で、一条氏の地域支配のあり方が城郭の構築技術から読み取れる貴重な資料を提供できだし、今後土佐の城郭を考えていく上で大きな問題点を指摘できたと考える。

(松田)

引用・参考文献

- 伊藤 晃「備前焼の流れ」『木村コレクション古備前図録』1984年
石岡ひとみ「河後森城跡出土の陶磁器について」「研究紀要」第3号 愛媛県歴史文化博物館 1998年
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究No2」日本貿易陶磁研究会 1982年
大方町『大方町史』
愛媛県教育委員会『愛媛県中世城跡一分布調査報告書一』1987年
岡本健児「波川城跡の発掘調査」「土佐史談」137号 1974年
木村剛朗他「栗本城跡」 中村市教育委員会 1985年
小野正敏「城館出土の陶磁器が表現するもの」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究No2」日本貿易陶磁研究会 1982年
千田嘉博「中世城館研究の構想」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
千田嘉博「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」「ヒストリア」第129号
宅間一之・出原恵三「芳原城跡発掘調査報告書」高知県教育委員会 1984年
宅間一之「久礼城跡」中土佐町教育委員会 1984年
宅間一之「古井の森城跡」土佐山村教育委員会 1980年
多田暢久「城郭分布と在地構造—戦国期大和東山内の動向ー」「中世城郭研究論集」新人物往来社 1990年
中井 均「織田系城郭の画期一礎石建物跡・瓦・石垣の出現ー」「中世城郭研究論集」新人物往来社 1990年
松田直則他「中村城跡」中村市教育委員会 1985年
松田直則「高知県における中世土器の様相」「中近世土器の基礎研究Ⅲ」日本中世土器研究会 1989年
松田直則「四万十川流域出土の貿易陶磁」「貿易陶磁研究No16」日本貿易陶磁研究会 1996年
松田直則「奈路遺跡」幡多郡十和田教育委員会 1993年
松田直則「和田城跡」高岡郡桜原町教育委員会 1990年
松田直則・竹村三菜「ハナノシロ城跡」「中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
真壁忠彦・藍子「備前焼研究ノート(1)～(3)」「倉敷考古館研究集報」1.2.3 倉敷考古館 1966.1967年
宮地森城「土佐国古城略史全」土佐史談復刻業書(1) 1989年
村田修三「城郭概念再構成の試み」「中世城郭研究論集」新人物往来社 1990年
村田修三「中世の城館」「講座・日本技術の社会史」6巻・土木・日本評論社 1984年
村田修三編「中世城郭事典」2 新人物往来社 1987年
森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究No2」日本貿易陶磁研究会 1982年
森田尚宏「阿斐城跡II－第6次発掘調査報告書一」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
森田尚宏・松田直則・岡本桂典「阿斐城跡第1～5次発掘調査報告書」高知県教育委員会 1989年
森田尚宏「崩城跡」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
武藤致和編「南路志」下巻 文化十年 1960年12月活字本
前川要・千田嘉博・小島道裕「戦国城下町研究ノート」「国立歴史民俗博物館研究報告」第32集 1991年
小林健太郎「戦国城下町の研究」大明堂 1985年
山本雅靖「城館研究の視点と方法の展開」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
山上雅弘「戦国時代の山城－西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城についてー」「中世城郭研究論集」新人物往来社 1990年
山本 大「高知県の歴史」山川出版社 1972年
横山勝栄「山間地域の小型城郭」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
山崎正明・武吉真裕「曾我城跡」大方町教育委員会 1997年
大方町教育委員会「大方の中世城跡－調査記録報告書－」1990年

写真図版



西本城跡遠景（東より）



曲輪2調査前

PL.2



曲輪2・切岸調査前



曲輪2伐採風景



斜面部土留め作業風景



切岸ベルト設定状況

PL.4



曲輪2西斜面調査前



Cトレンチ設定状況



A・B・Cトレンチ完掘



Aトレンチ完掘

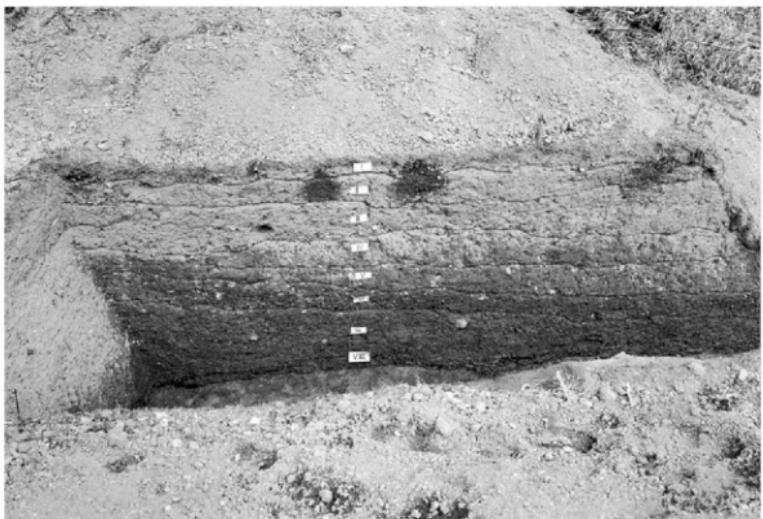
PL6



B・Cトレンチ完掘



Aトレンチセクション



Aトレングセクション

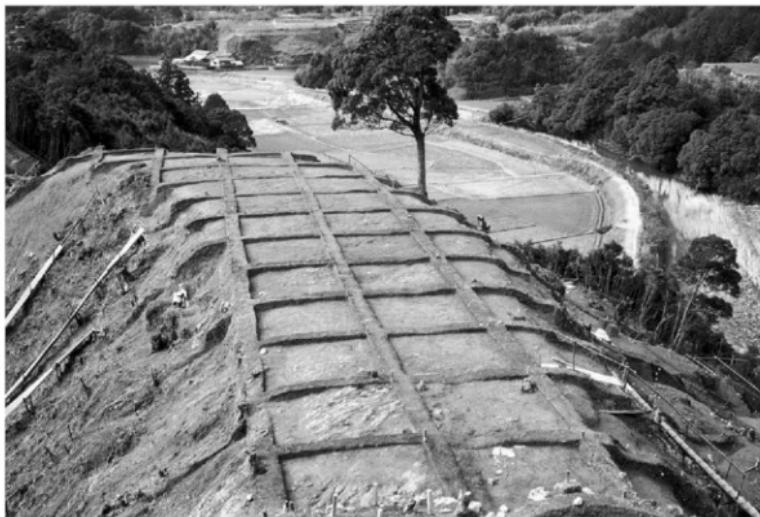


曲輪2作業風景

PL.8



曲輪2



曲輪2



曲輪2作業風景



曲輪2セクション

PL.10



切岸作業風景



堀切（北東から）



堀切4セクション



堀切3セクション

PL.12



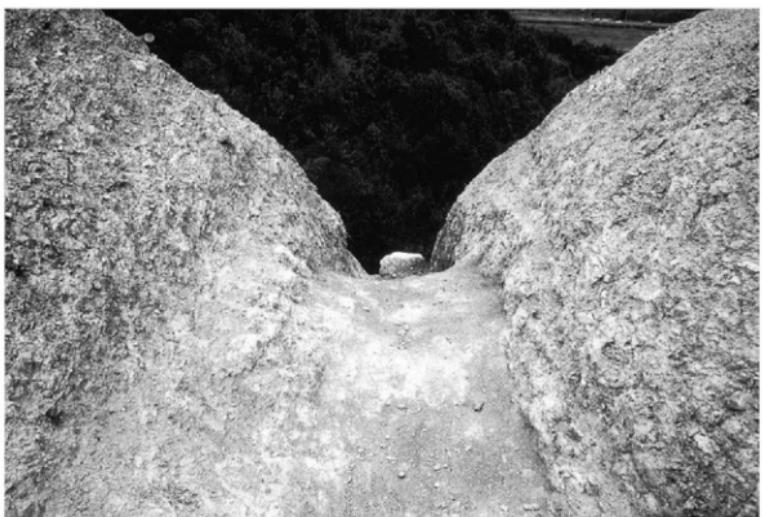
堀切2・3・4（東下方から）



堀切2・3・4完掘



堀切1完掘（東から）



堀切4完掘（西から）

PL.14



堀切2完掘（東から）



曲輪4作業風景



堅堀1・2



堅堀3南北セクション

PL.16



竖堀3東西セクション



竖堀1集石



竖堀3



曲輪2、SB1・2・3

PL.18



曲輪2、SB4・5・6



堀切部・曲輪2



曲輪2・3

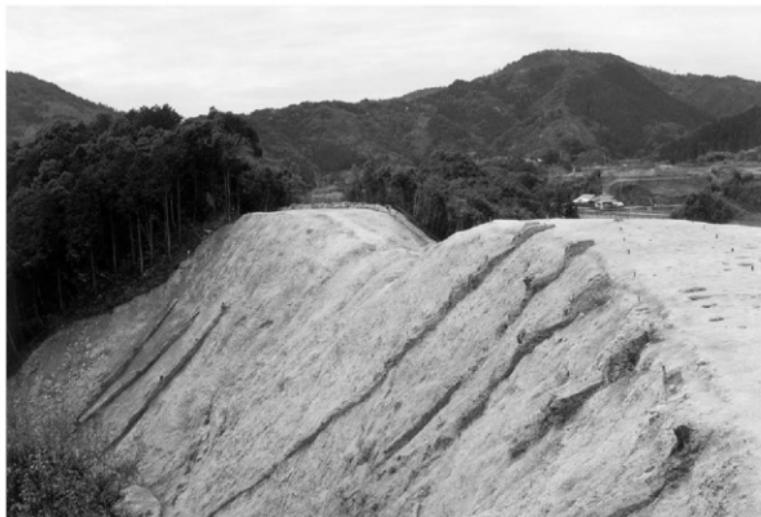


曲輪2・Pit群

PL.20



曲輪4集石1



曲輪2・3東斜面



曲輪3作業風景



堀切・曲輪3東斜面

PL.22



曲輪2東斜面



東斜面下集石2

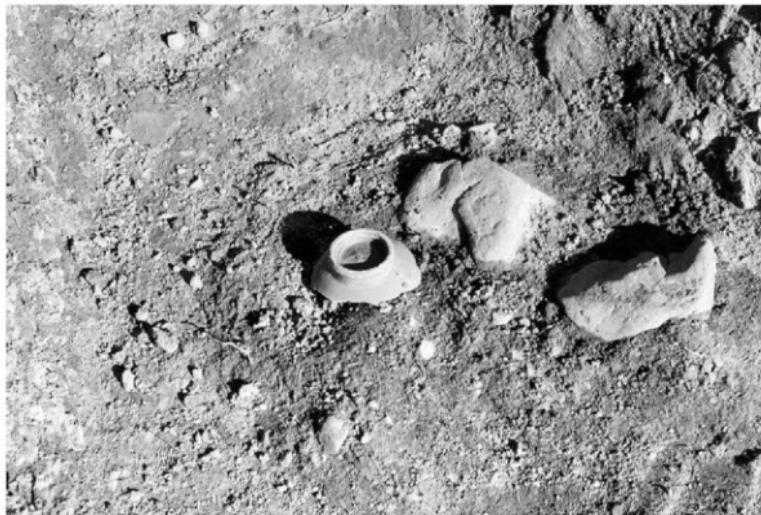


現地説明会風景



同上

PL.24



曲輪2青磁碗出土狀況



曲輪2撲鉢出土狀況



青磁



青磁



備前



唐津

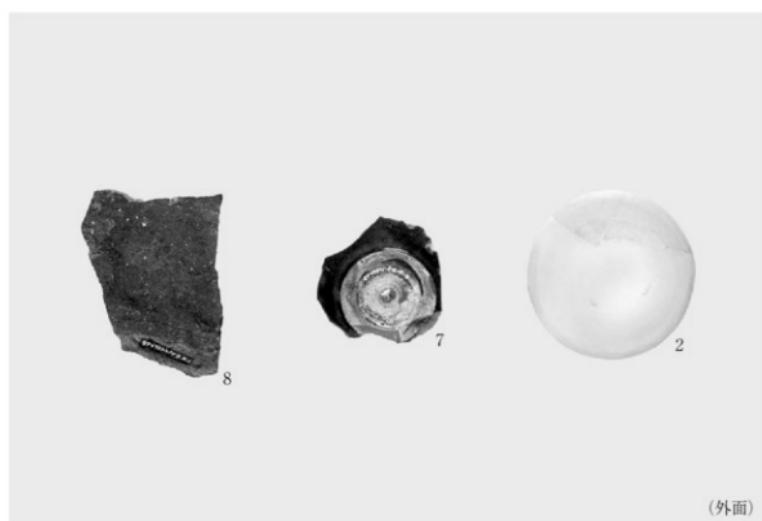
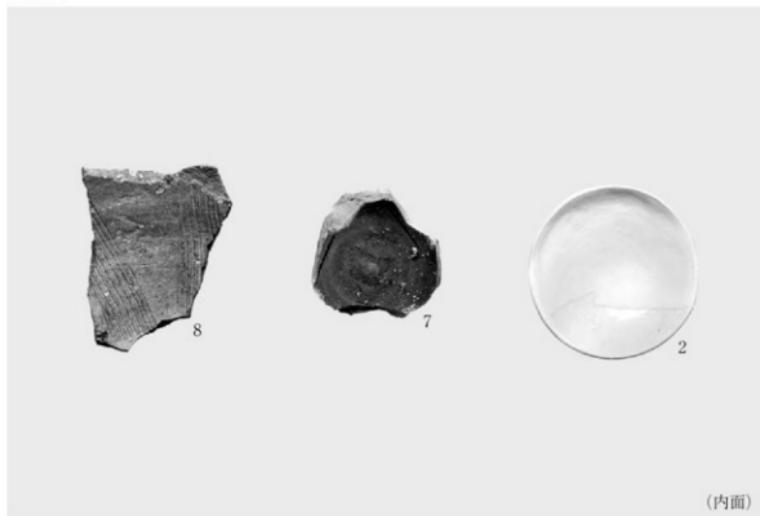


備前

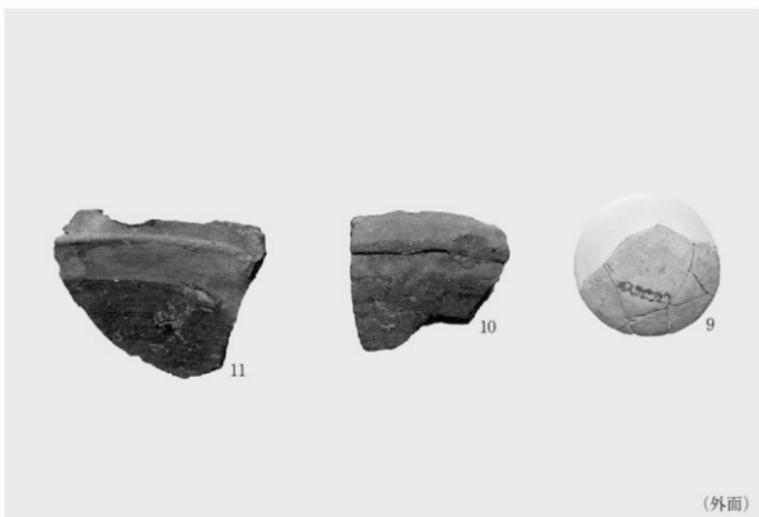
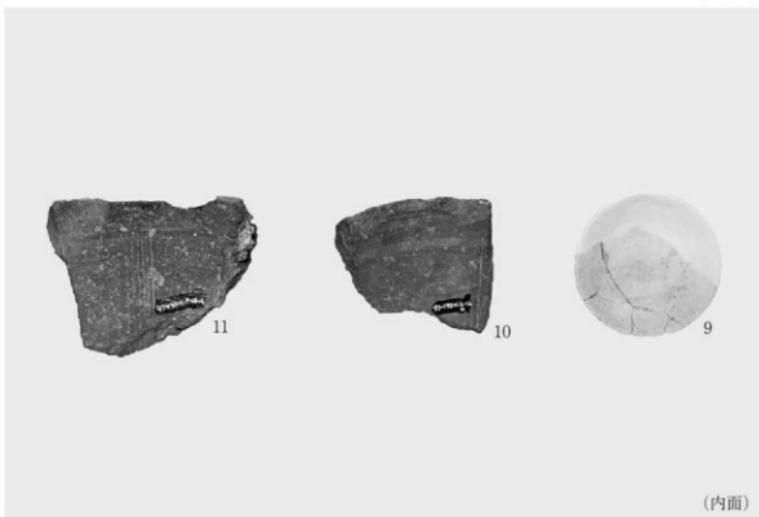


白磁（Pit內）

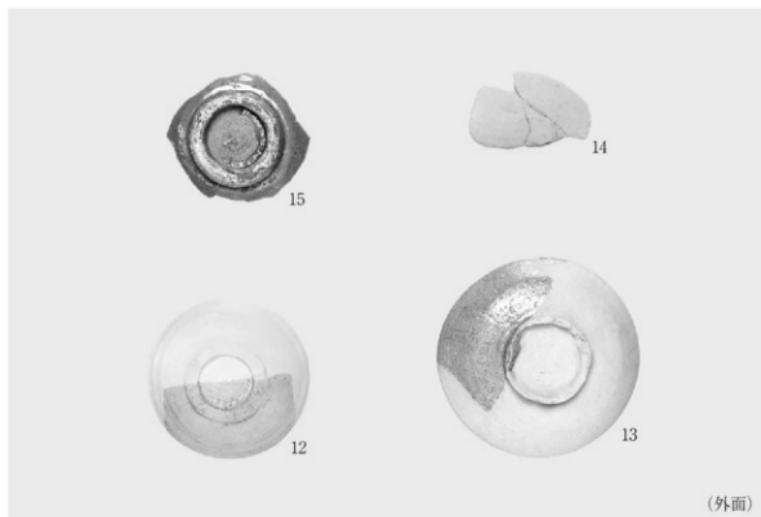
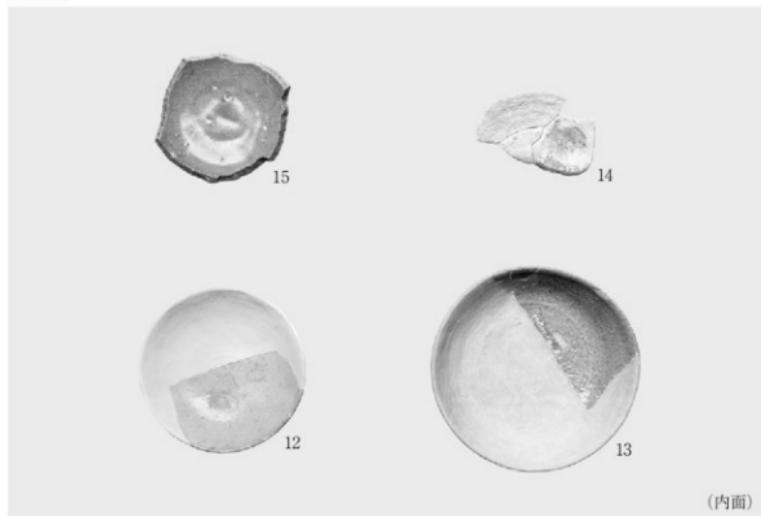
遺物出土狀況

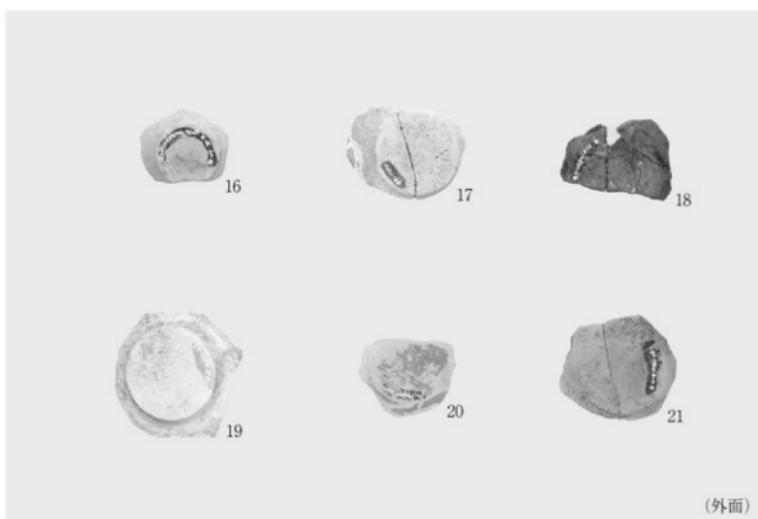
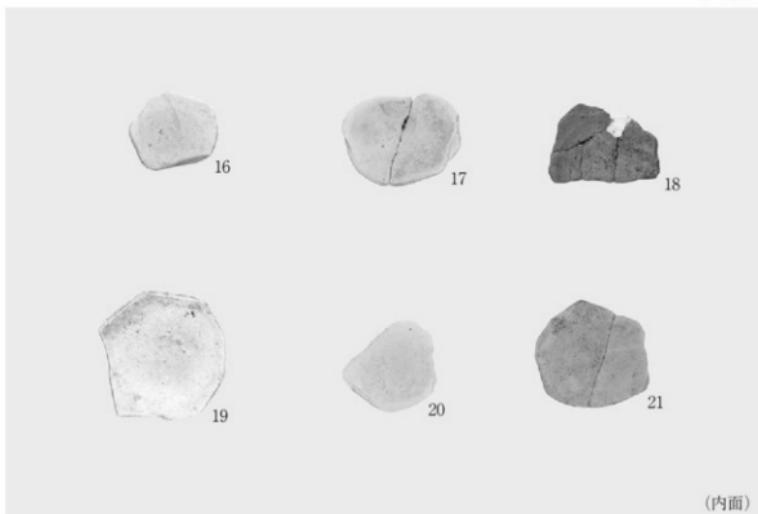


出土遺物1

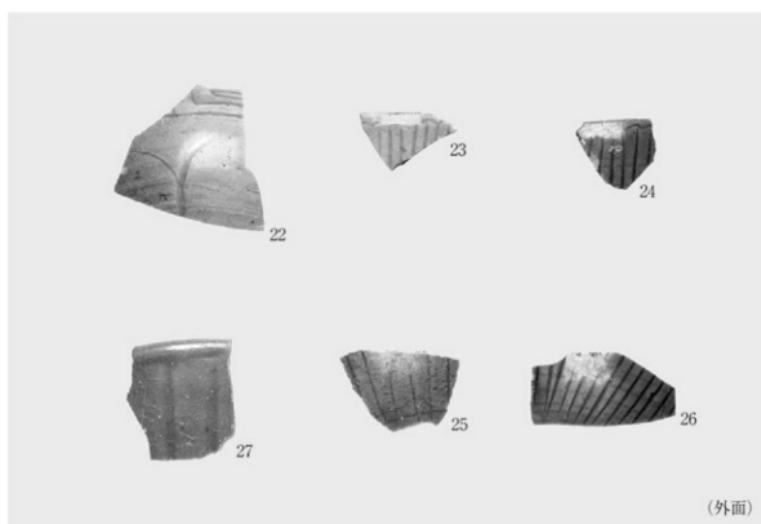
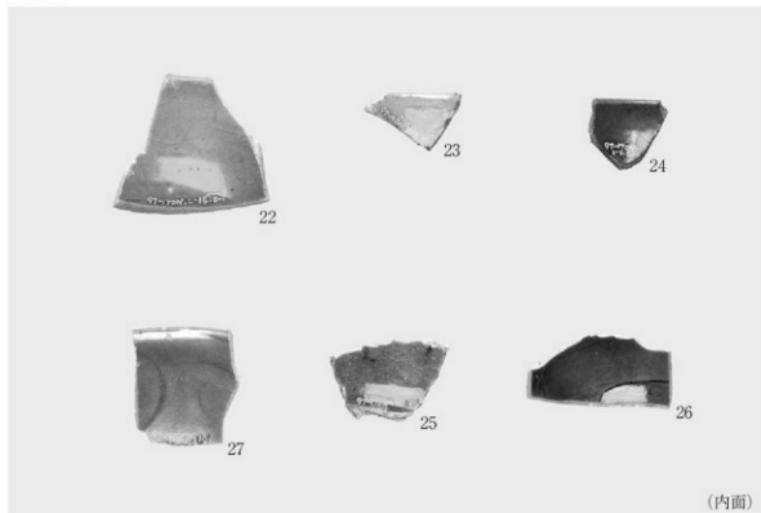


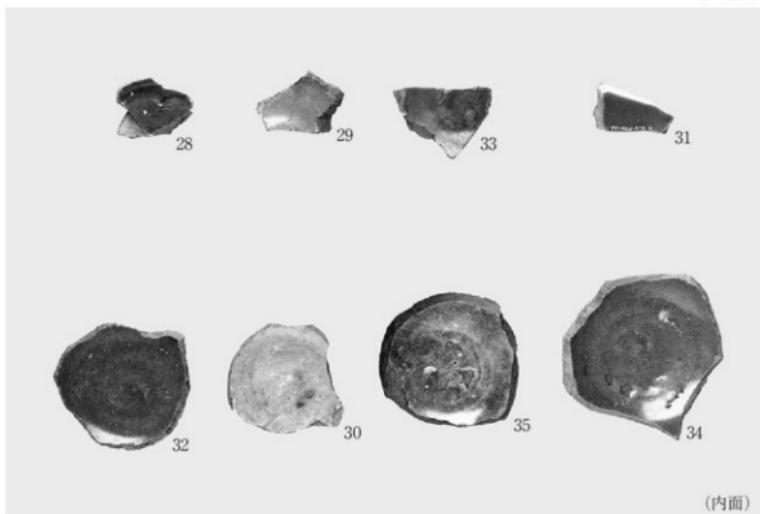
出土遺物2



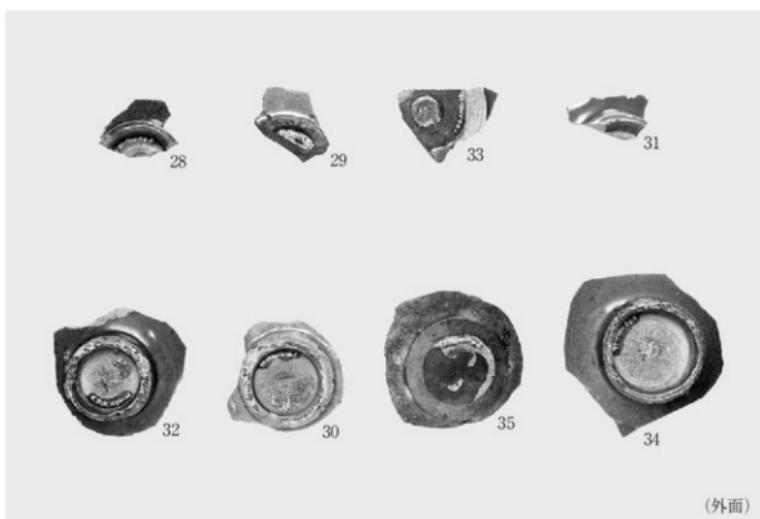


出土遺物4



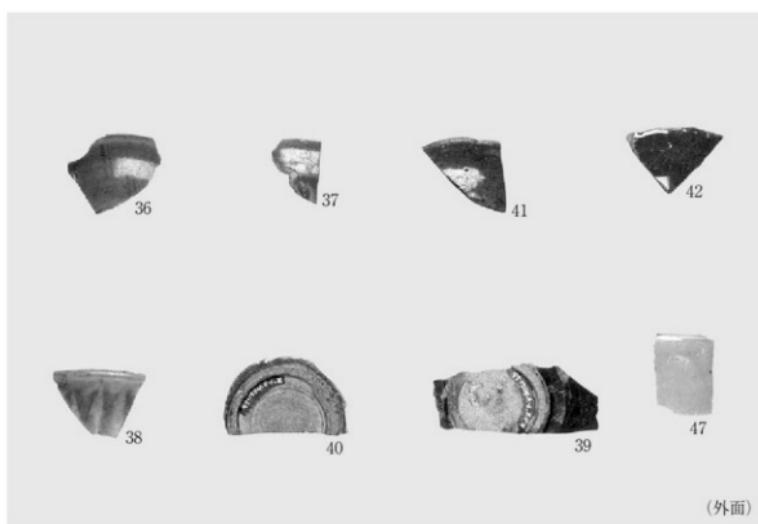
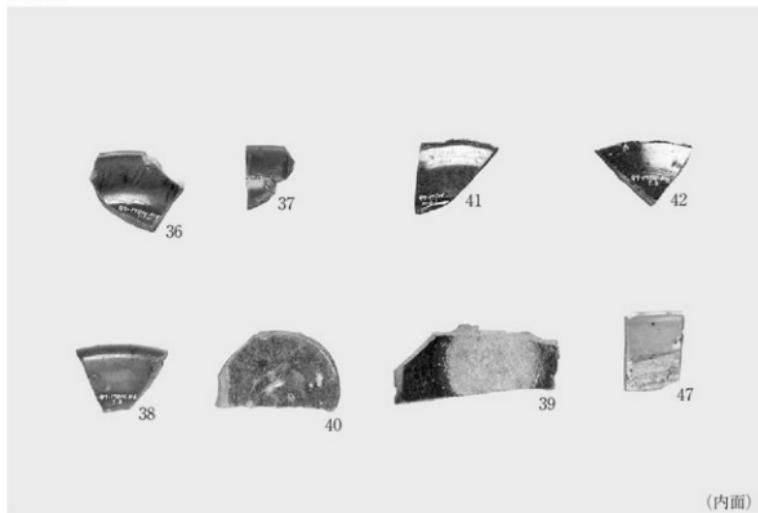


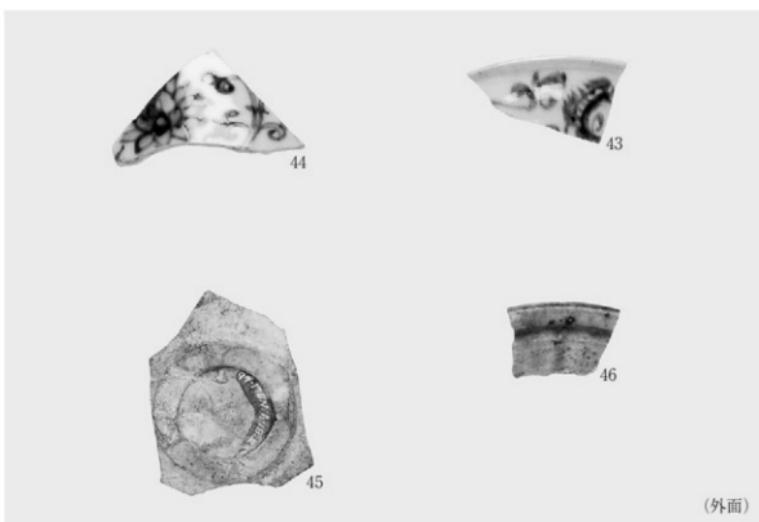
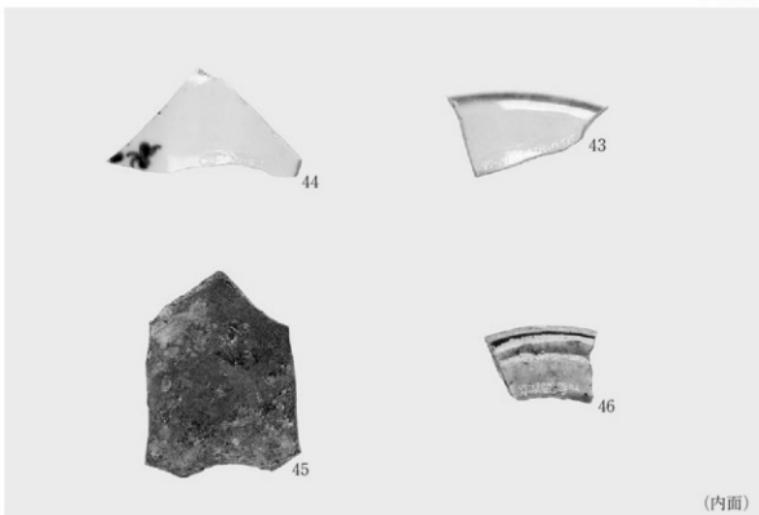
(内面)



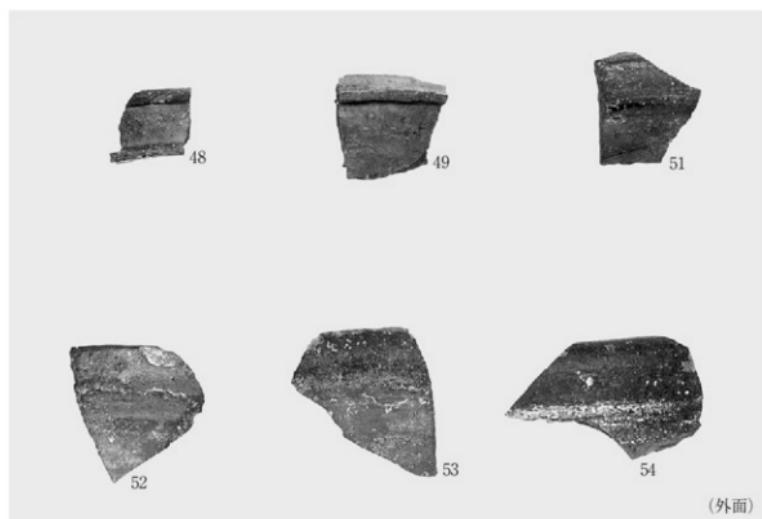
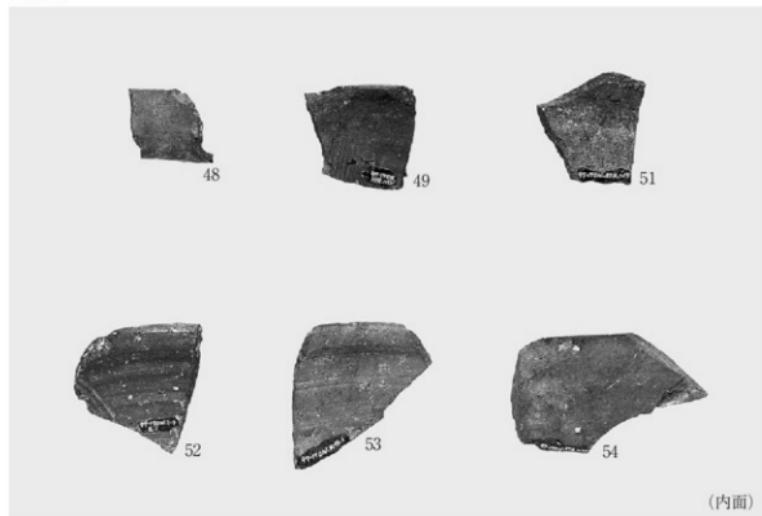
(外面)

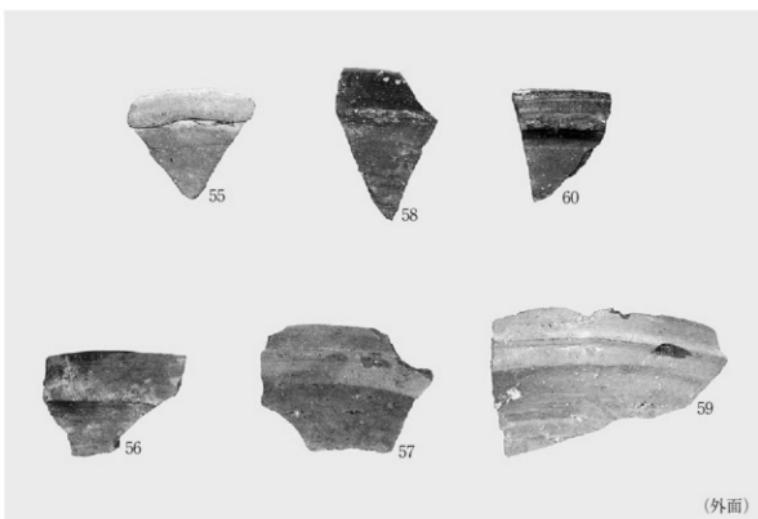
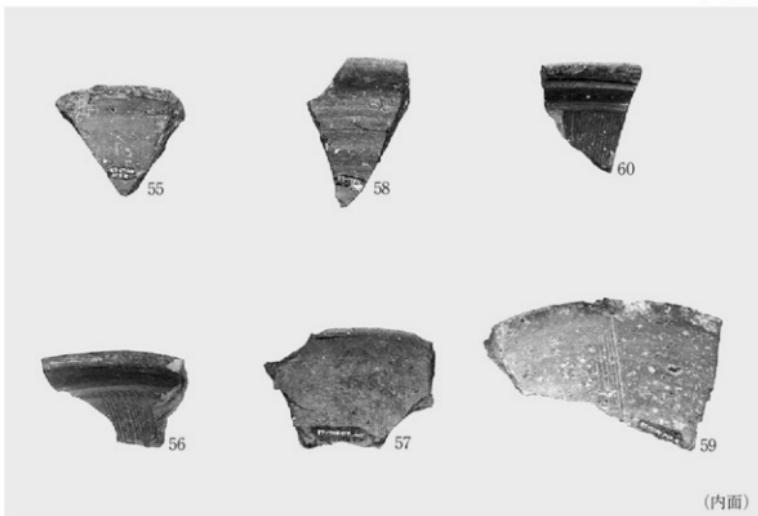
出土遺物6



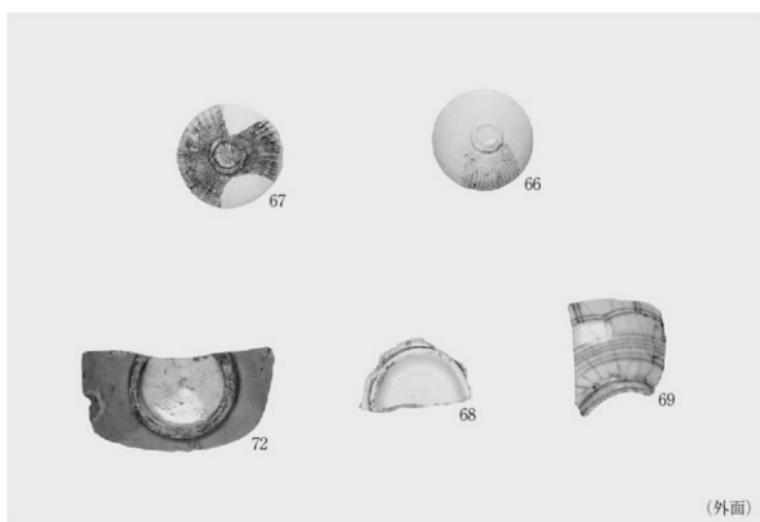
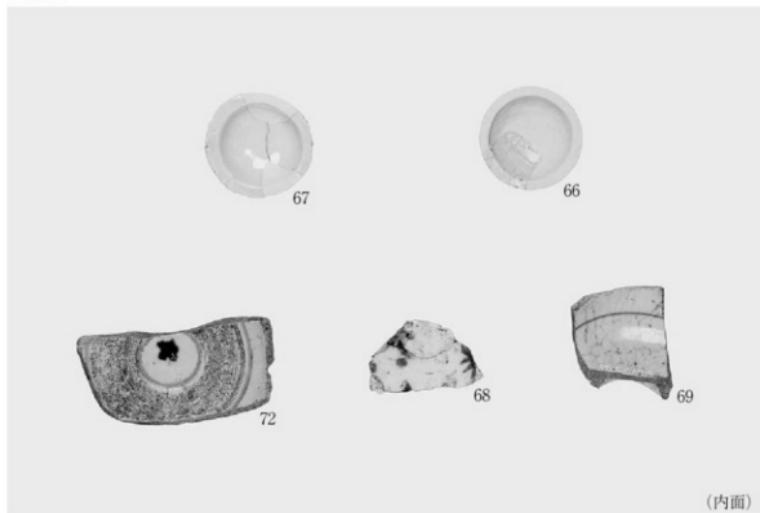


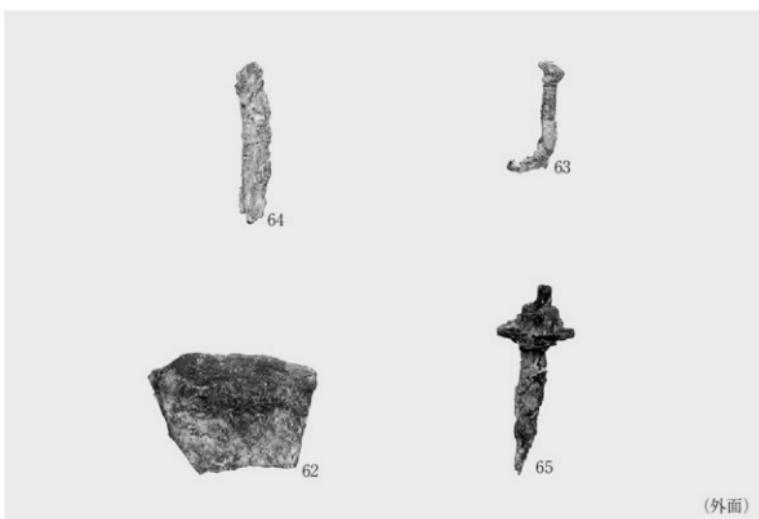
出土遺物8



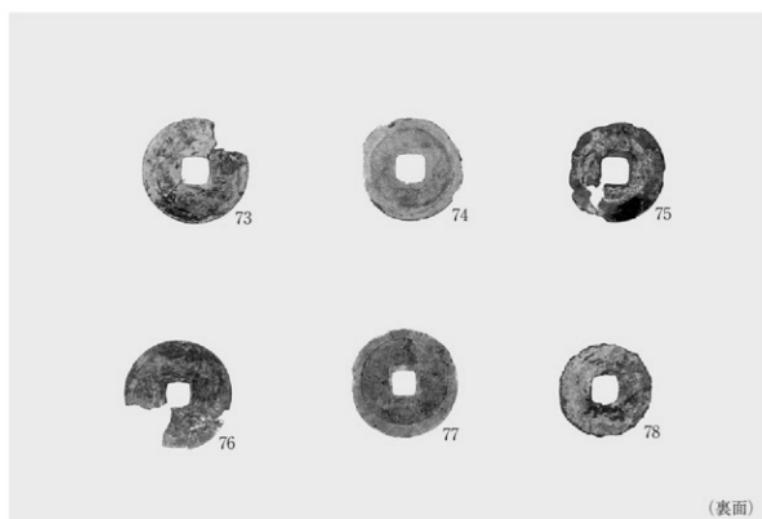
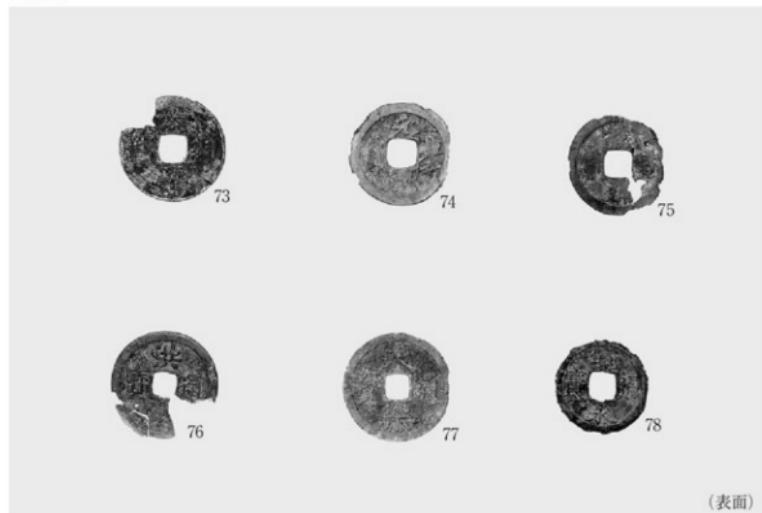


出土遺物10





出土遺物12





1



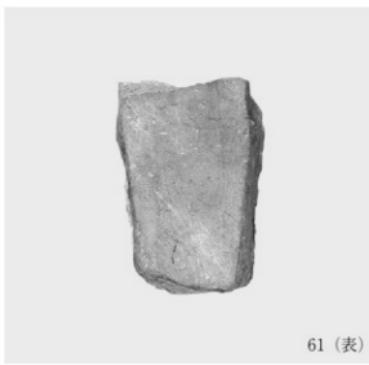
50



70



71

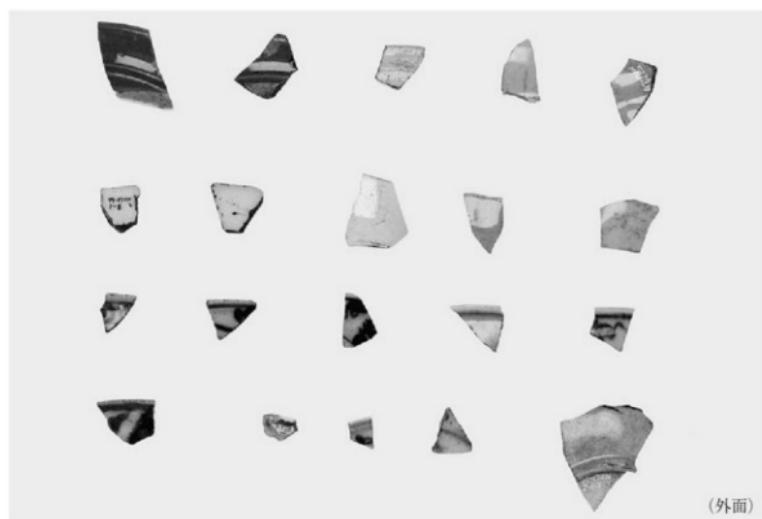
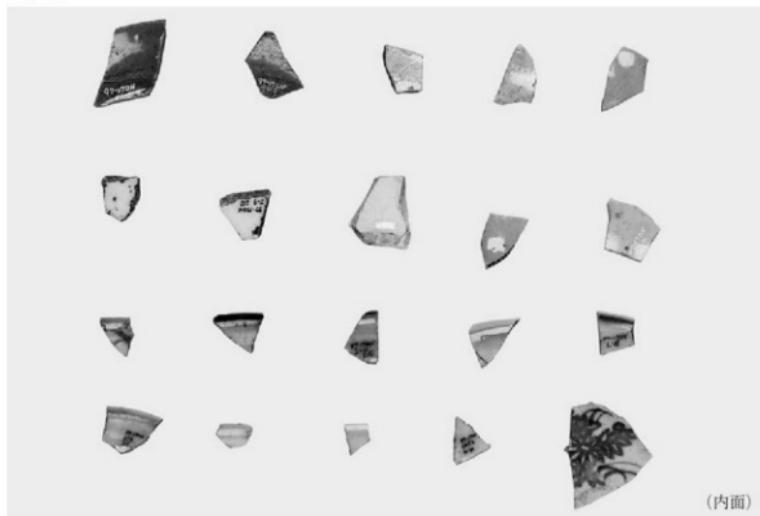


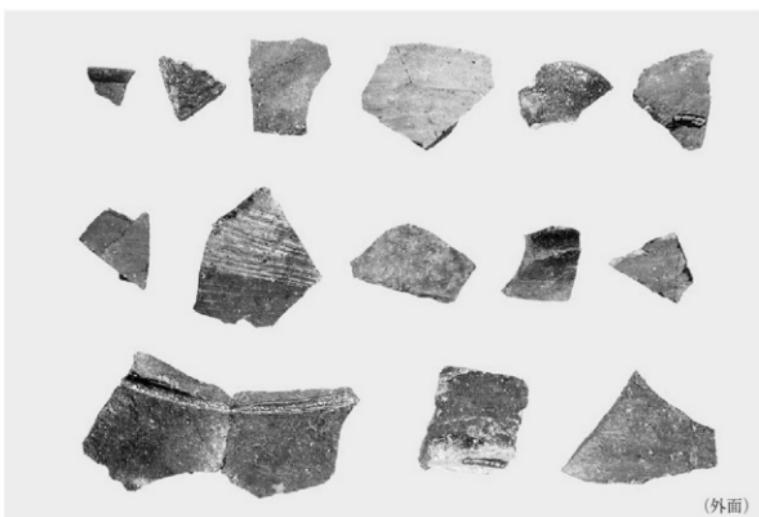
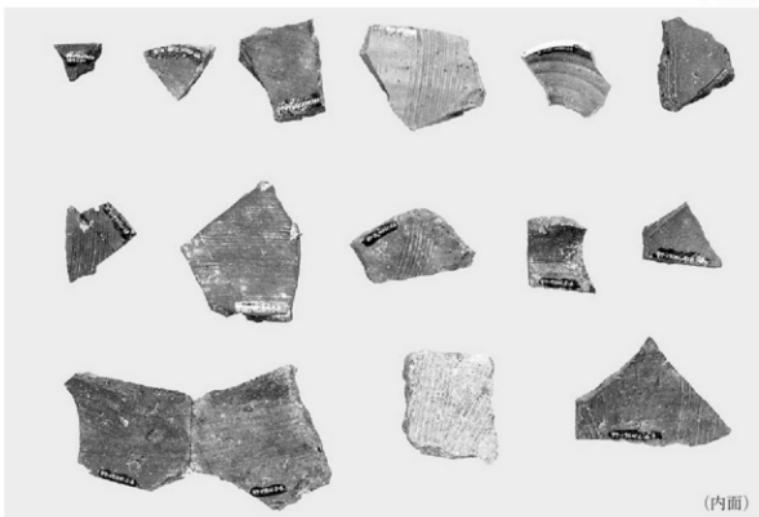
61 (表)



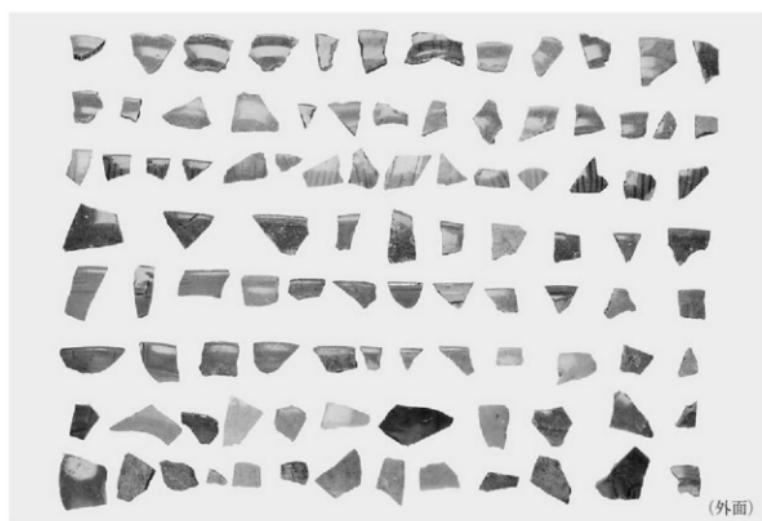
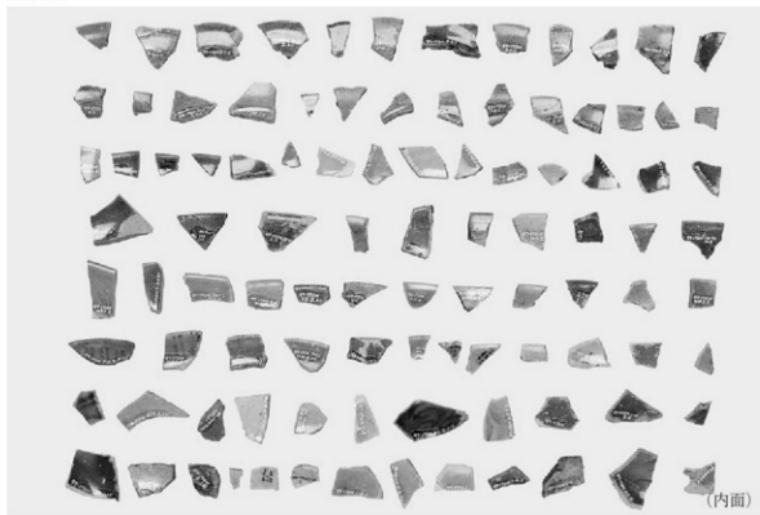
61 (裏)

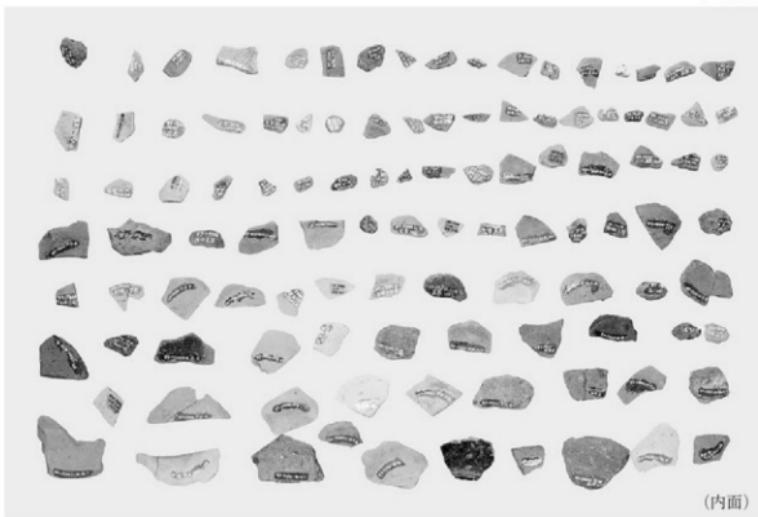
出土遺物14





出土遺物16





報告書抄録

ふりがな	にしもとじょうせき							
書名	西本城跡							
副書名	県道岡本大方線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	松田直則・堅田至							
編集機関	高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL(0888-64-0671)							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'	~		
西本城跡	高知県幡多郡 大方町上田ノ 口字タナダ・ テッポウ田	423	490070	33° 0' 37"	132° 59' 17"	1997.10.15 ~ 1998.03.31	4,500m ²	県道岡本大方線改良工事に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西本城跡	山城	中世	堀切・堅堀・ 堀立柱建物跡 ・その他	貿易陶磁(青磁・ 白磁)・国産陶器等		小規模な城郭であるが、交通の要所に位置し集落を防御する性格を持った中世城郭である。連続3条堀切や堅堀群が検出されている。		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第36集

西 本 城 跡

—県道岡本大方線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社